

日本醫史學雜誌

第 19 卷 第 1 号

昭和 48 年 3 月 30 日発行

原 著

- 明治初年地方医学校のオランダ語からドイツ語
医学移行の研究……………阿知波五郎…(1)
- 西説内科概要について (一) ……………大滝 紀雄…(19)
- 藤原宮出土の典薬寮関係木簡考……………新 村 拓…(29)
- 旧約聖書における衛生状態……………小沢 吉晃…(41)
- 正倉院文書より得たる人口ピラミッド……………日野 英子…(50)
- 畠山義綱と医道伝受 (二) ……………宮本 義己…(59)
- 「鶴齋遺稿」について (六)……………大鳥蘭三郎…(70)
- 江馬家にある坪井信道のヒポクラテス賛詩……………青木 一郎…(88)

資 料

- 堀内文書の研究 (八) ……………片桐 一男…(91)

例会記事……………(102)

- 昭和47年度医史学関係論文目録 (一) ……………(109)

雑 報……………(114)

通 卷 第 1391 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京15250番
電話 (813) 3111 内線 544

金原出版
業百年記念事業

醫學の寶玉



①華岡青洲筆二行書 (115×42.5cm)

巧芸版・絹本軸装・桐箱入

緒方富雄先生箱書

頒価 ¥40,000.

(送料他¥500)

わが国医学の宝玉を完全復元

好評頒布中!

醫學聖
杉田玄白立像

日展評議員 長谷川義起 監製

偉大な玄白と、似る、という二つの構成上の要素を、造形芸術として、調和の世界を彫り上げよう、昇華させようと繰返し追求して、出来上がったのがこの像である。

ブロンズ立像 (高さ35cm) 桐箱入・長谷川義起先生箱書

頒価三〇〇、〇〇〇円



①「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。「世界の近代外科の先駆となった華岡青洲は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

② 百鶴図は、杉田玄白が六十歳の誕生日に仕上げたもので、繊細華麗に描かれている。製作は支那の粹を尽し独自の手法により復元、仕上げに描きこむ。

②百鶴図

杉田玄白画幅

(107×54cm)

巧芸版・絹本極彩色軸装・

桐箱入 緒方富雄先生箱書

頒価 ¥300,000.

売捌所／株式会社金原商店 製作所／財団法人日本医学文化保存会

原著

明治初年地方医学校のオランダ語から

ドイツ語医学移行の研究

——山口県・三田尻・華浦医学校の実例について——

阿知波 五郎

まえがき

明治四年（一八九〇）からわが国医学にドイツ語系医学が実施された経過は、⁽¹⁾東京大学を中心として、すでに諸家の研究によって明らかにされている。しかし、こと地方のそれに及ぶと、その形相は混沌として多様、未だに当時の実態を把握することはむづかしい。著者は一つの事例として、防長藩校の継統としての本を蔵していた山口県・三田尻・華浦医学校の旧蔵書を調査する機会に恵まれ、書誌的に本テーマの実態にふれることができた。長州藩は、薩藩と共に幕末に活躍し、明治維新にいたる原動力の一つとなった雄藩であるから、本テーマの地方病院医学校の代表として認めてよいと考え、あえてその研究をここに発表する。

華浦医学校の性格

十九世紀初期には、西ヨーロッパに近代医学校の過渡期的存在として「病院医学校」が一時繁栄した。その代表は、ロンドンの聖バーソロミュー、聖ジョージ、ゲエイ、聖トーマスやパリのサルペトリエール、ネッカア、バル・ド・グレ

一ノの諸病院医学校である。わが国の明治初年においても地方では、近代医学校成立までの過渡期的のものとして、この「病院医学校」が存在し、それは主として藩校の医学部門の延長であることが多かった。

山口県・三田尻の華浦医学校もその例にもれない。現在訪ねてみても、その遺趾は防府市三田尻の遊園地にあるにすぎない。文部省指命録写（明治八年五月七日）によると、その位置は、山口県管下第九大区四小区三田尻村で、当時は華浦医学校といっていた。学舎の運営は寄附により、年三千元を予算している。当時三人の教員がいた。それは次のようである（本資料は、荒瀬進氏のご好意によったものである）。

○烏田圭三（山口県貫属土族・当亥四十四歳三ヶ月）

1、嘉永六癸丑五月ヨリ東京伊藤玄朴に随学（玄朴門人帳に記載あり）、文久元辛酉六月迄都合九ヶ年間医学修業

1、文久元辛酉八月ヨリ長門国萩ニ開業

1、文久三亥八月元山口藩医院教官ニ班シ、廃藩後引続今日迄所勤、明治元戊辰十一月ヨリ廃藩ニ至ル迄元山口藩侍医兼勤

○福田正二（山口県貫属土族・当該三月三十歳三ヶ月）

1、戊午之春長門国萩、青木周弼に従学、周弼没後、其嫡研藏ニ随ヒ丁卯之春迄都合十ヶ年間医学修業

1、丁卯之春ヨリ元山口藩医院教官ニ班シ、辛未之秋、浪華ニ於テ兵部省病院医官拝命、壬申之春、母之病ニ依テ辞歸、再ヒ山口

県医学所教官ニ列シ引続今日迄所勤

1、己巳之夏周防国小郡駅ニ於テ開業

○秋本好謙（山口県貫属土族・当亥ノ三月三十四歳四ヶ月）

1、明治三年庚午春ヨリ元山口藩医院入学、同五年壬申夏ヨリ翌年癸酉四月迄東京ニ於テ「シモンス」氏ニ從ヒ独乙学修業、同年

五月ヨリ大阪病院「エルレメンス」氏ニ從学、十二月帰県

教師給料は一月金百円（但三人分）

次に同学舎の学科と教則と塾則を繁をいとわず示す。同校の実態を知る資料となるからである。

○預科

日尾曼語学或ハ和蘭語学、羅甸語学（当分欠之）、数学、代数学、測量学大意、物理学、無機化学、有機化学、動物学（当分欠之）、

植物学(当分欠之)

○本科

解剖学付技術、組織学大意、原生学、原病学、薬物学付薬品真偽鑒定法製薬法、外科学付繙帶術、内科学、眼科、産科、臨床經驗

○教則

1、各年西洋書中之最近ナルモノヲ撰ビ翻訳シテ之ヲ口授ス

1、正則変則ヲ分ケ、先預科ヨリ修ルヲ正則トシ直ニ本科ニ入ルヲ変則トス。年齢二十才以下ニシテ入校スル者ハ必ズ正則タラシメ、年長ニシテ久シク歲月ヲ費シ難キ者ハ変則タルヲ許ス

1、正則生タリトモ望ニ依テハ必ズシモ語学ヲ修メシメス

1、每一週ノ終リ口授セシ所之事件ヲ試問シテ其甲乙ヲ定メ、一科終ルトキハ更ニ業ノ精否ヲ試ミテ其熟スル者ヲ上科ニ入ラシム

1、学科ヲ率スル者ハ卒業之証書ヲ与ヘ開業ヲ許ス

○塾則

1、入校ヲ願候者ハ父兄或ハ親族ヨリ請状ヲ出サシム

1、春秋二回之外、帰省ヲ許サス。但父母疾病死之節ハ親類ヨリ証書ヲ出ス者ハ臨時之ヲ許ス

1、食料□別白米六合、金苞錢、月末ニ之ヲ納メシム

1、受業料一ヶ月金五拾錢、但当分欠之

1、休暇日ハ中小学ノ例ニ準ス

1、入学中塾法ヲ犯ス者ハ科ニヨツテ退校セシム

右之通設立仕度此段奉願候也

明治八年五月七日 山口県令 中野 格 ㊟

文部大輔 田中不二麿殿

備考 明治七年五月三十日文務省ヨリ開学許可ス

以上の資料によると、この学校は明治七年五月三十日以降山口県山口医院の性格を離れた存在となつたと判断すべきである。しかし、明治十三年(一八八〇)再び山口県医学校となり、明治十六年十二月には閉校している。

華浦医学校々長・福田正二について

この学校のドイツ語医学推進の原動力は、前記教師中、後に同校々長となった福田正二である。それ故に、福田正二の年譜をここに掲げ、同校のドイツ語医学推進の経過を概観する一助とした。

○福田正二（一八四六—一九〇二）年譜

弘化³（一八四六） 周防吉敷郡小郡東津に生誕、萩に出て青木周弼に入門、青木研蔵に従学

文化³（一八六三） 十二、十六、青木周弼死去

竹田祐伯、烏田圭三（山根敬蔵）好生堂教諭心得

元治元（一八六四） 青木研蔵好生堂教諭、九、三、『軍中備要』翻譯

明治元（一八六八） 四、九、青木研蔵養子、周蔵プロシア留学

九、四、福田正二好生堂助教より都講（好生堂を好生局）

明治²（一八六九） 一〇、二三、烏田圭蔵（圭三）中教諭、福田正二小教諭

明治³（一八七〇） 九、八、青木研蔵、越中島閔兵式にて庄死

明治⁷（一八七四） 四、山口医院、三田尻に移り華浦医院（華浦医学校）、校長、烏田圭三、副校長、福田正二

五、一三、文部省より開学許可

九、青木周蔵特命全權公使（独）

七、福田正二『宍氏原病論』

明治⁸（一八七五） 六、『尼氏医鑑』（福田正二訳）

『理学新書』（福田正二訳）

『辯業則』（福田正二訳）

明治⁹（一八七六） 山口県赤間関医学校廃止、生徒を華浦医学校に收容。校長・烏田圭三、前原一誠（萩）の拳兵に参加

明治¹⁰（一八七七） 華浦医学校は福田正二の個人経営となる

明治¹³（一八八〇） 華浦医学校、山口県医学校となる

明治¹⁶（一八八二） 一一、山口県医学校閉鎖

明治22 (二八八九) 一二、二三、青木周蔵、第一次山県内閣外相

明治28 (二八九五) 第九回山口県医会、会頭福田正二、副会頭半井成實

明治34 (二九〇一) 一〇、二九、没、第四世祖 晩翠堂東洲正二居士

(備考) 前記四訳書は、後述のようにオランダ語本を参考とし、ドイツ語原典を訳したものである(以上は後裔の京大名誉教授・福田正氏のご好意による資料と田中助一氏の著書及び『日本教育史資料』などを参考とした)。

『晩翠堂記』(明治廿九稔歳次丙申七月吉、鹿門岡千仞撰、福田家蔵)によると「君防州ノ人、夙ニ西洋医術ヲ研究ス。藩、擢テ医学教授ニ督セシム。此時大政維新、兵部省君ヲ徴シテ軍医ニ任ス」(原漢文)とある。在官わずか半年であったが、ドイツ語開眼はこの時であったと推定される。彼の学舎を晩翠堂といったのは、その「記」によると、学舎の周囲に松数十株があつて「鬱然トシテ翠」、維新となつて曾て蘭学を修めたものが、「高位ニ列シ、重禄ヲ食ム」でいるのに、ひとり彼はもっぱら後学を薰陶して晩翠堂に終始したとの述懐的な意味をふくめている。これは、藩内の秀才、三浦玄明(後の青木周蔵)と、この福田正二とが青木研蔵の養子候補にあげられ、福田正二は辞して、ついに三浦玄明が青木研蔵の養子となり(慶応二、一二、一三)、周弼の次女、照子と結婚、青木周蔵となつた。彼は医学修業のため三年間、プロシヤに留学(慶応四、閏四、五)、留学中医学をやめて法制、経済専攻に転じた。この『晩翠堂記』中の洋学を学んだ同僚たちの高位高官になつたとの記事は、暗に周蔵が後に、ドイツの特命全権公使になつたり、第一次山県内閣の外相になつたりしたことを指している。しかし、この事実が、かえつて福田正二をして地方にありながら早期にオランダ語からドイツ語医学に転じえた間接な動機となつたであろうことは十分想像できる。坂根義久氏のご好意によつて、同氏の青木周蔵研究中にえられた資料の中から、とくに青木周蔵が、三浦鶯大人に宛てた尺牘(萩市、山根信太郎氏蔵)をお教示頂いた。その中に

「……蔵書の原籍、病理書人身窮理書瘍科書一般窮理書舎密書内科書等属古籍ものホルクスナチュールキユンデ」ヘルケンニング」字典○書を除くの外悉く御売払被遊候、如何御座候や満氏より承り御座候。輒近西洋各国千八百五十五年ノ諸籍ハ総テ滅板同様にて

採用不仕候よし。已ニ当地病院の講場にて概五年來の書籍而已講習仕候折柄、一作日伯氏より大村江贈致仕候新籍数部就中病体解剖書眼科書健康体解剖書人身窮理書一般之外科書等二部つつ有之候間、強而請配分松岡〇〇以臆斷買約仕候編數ハ以上九編ニ而其価凡五十兩位のよし。就而ハ万々申上兼候得共松岡大人御談合之上右の九編御買約被下間敷や……」

この尺牘により周蔵は、ドイツ原典の購入のため、それも友人たちのために相当努力したあとが見られる。その尺牘の中に

「輓近和蘭之本国よりは舶便と而も每ニハ無御座、右之新籍等急に買約仕度候而も失機会候而も、中々不容易候間篤と御高案之被遣奉祈候」

これから見ると、むしろ周蔵が斡旋した本はドイツ語書のみでなくオランダ語医書もあったことを示している。なお坂根義久氏のご好意により福田正二から青木周蔵宛の尺牘写を、そのほか二通うることができた。その内容は、本題とは関係がないので採らなかつたが、これによって親疏は別としても両者の間に交流があつたことを確めえた。したがつて、当時ドイツとの関係の深い青木周蔵からドイツ語の必要性を正二が逸早く汲みとつたであろうことは疑の余地がない。時代が下るが、森林太郎がドイツに留学（明治十七年十月十三日、森鷗外の『独逸日記』）したとき当時ドイツ公使であつた青木周蔵から格別の恩恵を受けた記録からいっても青木がドイツ学に尽した努力は、大きく、かつ長期にわたつていたと思われる。

華浦医学学校蔵書について

福田正二がドイツ語医学に転向するには、前記の同氏年表から見て独学以外には考えられない。他方、同校旧蔵の本を見ると、その蔵書印の変遷から見て大部分が藩校旧蔵のものが多い。当然のことながら藩校時代の蘭学的基盤の上にドイツ語医学が移入されたのである。参考のため同校旧蔵の蔵書、とくに洋書に現われたものの変遷を記する。

年号	長州藩校変遷	蔵書印
1 天保 11 (一八四〇)	医学所	長門書籍、長門文庫
2 弘化 4 (一八四四)	西洋所 齋訳掛	周防国明倫館
3 嘉永 2 (一八四九)	明倫館	明倫館、濟生館
4 嘉永 3 (一八五〇)	好生館	好生館
5 安政 2 (一八五五)	西洋学所	好生堂文庫
6 安政 6 (一八五九)	好生堂	海軍学校、陸軍局
7 万延 元 (一八六〇)	兵制洋式改	赤間関医学所
8 元治 元 (一八六四)	赤間関病院廃止	好生局
9 明治 元 (一八六八)	好生局	山口県
10 明治 4 (一八七一)	山口県	山口県
11 明治 7 (一八七四)	華浦医学校	医院、福田
12 明治 9 (一八七六)	赤間関医校廃止	
13 明治 10 (一八七七)	華浦医校廃止	
14 明治 13 (一八八〇)	山口県医校	

さらにこの蔵書中辞書のみ限定して調査するに、その蔵書印と年代との関係からオランダ語辞書からドイツ語辞書に移行する経過を一見して理解できる。

この表二でわかることは 長門文庫図書 と 好生局印 のある John Holtrop's English and Dutch Dictionary, revised, enlarged and corrected by A. Stevenson. I Vol. 1823. II Vol. 1824. Te Dordrecht by Blussé en Van Braam, en te Amsterdam by J. Van Esveldt Holtrop. のように他のオランダ語と共にまず蘭英辞書が、繁用されていくことである。

次に 海軍学校 の蔵書印と「長門海軍学校御本」の記載のある M. Noël と M. Chapsal の Nouveau

表 1

華浦医学校旧蔵書の洋学辞書中蔵書印別経過表

1840	年代	オランダ語	
49	嘉永 2	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">長門書籍</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">長門文庫</div> </div> <p>Holtrop (英蘭), Martin (蘭).</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 150px;">周防国明倫館</div> <p>Noël (仏文典).</p>	
		<p>仏語明要 和蘭文典</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">明倫館</div> <p>Weiland (蘭文典・写).</p>	
59	安政 6	<p>和蘭字彙</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">濟生館</div>	
		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">医学館</div> <p>伊吉利文典(和) 英吉利文範(和刻) 増補改正訳鍵 三語便覧</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">好生館</div> <p>Weiland (蘭文典・写).</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 150px;">好生堂文庫</div> <p>Weiland (10冊本・蘭) Buys (科言・10冊本)</p>	
		<p>和蘭文典 通布 和蘭字彙</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">海軍学校</div> <p>Noël et Chapsal. (仏)</p>
		<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="font-size: 2em; margin-right: 10px;">}</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">赤間閣医学所</div> </div> <p>Bomhoff (蘭).</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">陸軍局</div>	
1868	明 元	<p>Krammer (和刻)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">好生局</div> <p>Wörterbuch (蘭独, 独蘭)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">陸軍局</div> <p>Taschen Wörterbuch (独蘭)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">山口県</div> <p>Gabler</p>	<p>Weiland (蘭・五冊本).</p> <p>Weiland (蘭・1冊本).</p> <p>Weiland (蘭・科言).</p> <p>Krammer (蘭・科言).</p> <p>Krammer (蘭・地理).</p>
74	明 7	<p>Weber (独).</p> <p>Taschen-Wörterbuch (蘭独・独蘭)</p> <p>Handwörterbuch (和刻・独)</p> <p>Taschen-Wörterbuch (和刻・独)</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">医院</div> <p>普語箋 独單語篇 独單語集</p>
1880	明 13	<p>Bartel's English (大阪同志出版)</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">福田</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 100px;">山口県</div> <p>独文典 字類</p>
ドイツ語			

表 2 華浦医学学校旧蔵書中、ドイツ語原典と、その蘭訳本、和訳本対比表

	慣用著者名	慣用書名	福田正二 訳書	ド イ ツ 語 原 典	蘭 訳 本
1	シュードレル Schoedler	究理書 (2冊)	理学新書 (明8)	Buch d. Natur. 1871. [医 院] 1875.	Boek d. Natuur. [周防国明倫館] 1852.
2	レグナルド, スト レッケル Regnault A. Strecker.	舎密書 (2冊)	理学新書 (明8)	Kurzes Lehrbuch d. CHEMIE. [医 院] 1869.	Onbewerktuige SCHEIKUNDE. [好生局] 1864.
3	ヒルトル J. Hyrtl.	格人解剖書 (1冊)	/	Anatomie des Menschen. (蔵書印ナシ) 1875.	Ontleedkunde v. den Mensch. [好生堂文庫] 1857.
4	ボツク C. E. Bock.	解剖書 (3冊)	/	Anatomisches Taschenbuch. [医 院] 1864.	Ontleedkunde v. den Mensch. [好生堂文庫] 1840.
5	ワフネル Uhle, Wagner.	原病書 (1冊)	笈氏原病論 (明7)	Allgemeine PATHOLOGIE. [山口県] 1872. [医 院] 1876.	Algemeene PATHOLOGIE. [好生局] 1863.
6	ニーマイル Felix von Niemeyer.	病学各論 (4冊)	尼氏医鑑 (明8)	Pathologie v. Therapie. 1871.	Pathologieen THERAPIE. 1865. 1868. [好生局] 1869.
7	ストローマイル Stromeyer.	/	軍中備要 稿本	Maximen der Kriegs-Kunst Heilkunst. 1861.	非見在

(備考) 括弧ハ蔵書印ヲ示ス。

Dictionnaire de la Langue Française, Dix-Neuvième Edition, Paris, Mairé-Nyon. Roret, L. Hachette, Dela-
lain. 1866.

この辞書のようなフランス語辞書が、それぞれこの藩の馬関戦争で象徴されうる緊迫した事情下で諸外国語、とくにこの英、仏両国語がいち早くこの藩で学修された事実を裏付けている。

明治前の洋書辞書は、前記少数のものを除いて、他はほとんどオランダ語辞書、それも Weiland, Martius, Bonnhoff などの大部なものが多い。Weiland だけでも次の数種類が揃っている。

1. P. Weiland : Nederduitsch Taalkundig Woordenboek, Te Amsteldem bij Johannes Allart, Vol. I ~ XI, 1790 ~ 1811.
2. P. Weiland : Beknopt Nederduitsch Taalkundig Woordenboek, Te Dordrecht, bij Blussé en van Braam, Vol. I ~ V, 1826 ~ 1830.
3. P. Weiland : Groot Nederduitsch Taalkundig Woordenboek, A-Z. Nieuwe Uitgave, in één Deel completeet. Dordrecht, Blussé en van Braam, 1859.
4. P. Weiland : Kunstwoordenboek, Te Dordrecht, bij Blussé en van Braam, 1846.

これらの辞書は、よく使用され、とくに上記の十一冊本のオランダ語辞書(1)は、繁用度のいちぢるしい形跡がはっきりしている。その他に見られる Kramers, Bonnhoff, H. Martin, Jr. など、当時慣用されたオランダ語辞書は、その部数も一部にとどまらない。そして、それが、それぞれ繁用された形跡が歴然としている。

同校旧蔵書の他の特色は、当時「科言」といったり、「術語」といったりした Woordenboek van Konsten en Wetenschappen. または Kunstwoordenboek. の存在である。有名な『勃乙斯科言』をはじめ、前記の『勿乙蘭度科言』、『クラアメルス科言』がすべて完備していたことは、異例のことといわねばならない。とくにこの Egbert Buys の『科

言』は、第一卷（一七六九）から最終刊（一七七八）の第十卷までが揃っていて、他の見在本にくらべて繁用度が格別であったと想像され、本の汚れが目立っている。さらに E. Gabler の Latijnsch-Hollandsch Woordenboek over de Geneeskunde en de Naturkundige Wetenschappen, Utrecht, B. Dekema, 1865. が三部位見になっていることは、洋学の読解力が、他藩にくらべてかなり高度であったことを示している。

福田正二のドイツ語について

福田正二は、すでに、このようなオランダ語の読解レベルの高い同藩の中でも、とくに秀れていた洋学者であった。青木周弼、研蔵の後をつぐ適任者として候補にあげられた一事によっても、十分その間の事情を知ることができる。そして、人格高潔の人物であったらしく、終始とどまって華浦医学学校にあって後進の誘導に没頭し尽した（前記、『晚翠堂記』参照）。

1. 『軍中備要』について

まず、彼の蘭学の力量を知る最もよい資料は、表第二の七の『軍中備要』である。この訳業は表面上は、藩命によって青木研蔵が元治元年（一八六四）翻訳したことになっている。しかし、『軍中備要』稿本には、明らかに福田正二訳と明記されたものが現存している。それには八種類あって、「攻囲編」、「病院門」、「病院篇」、「囲地門治療篇」、その他がある。これまでストローマイエル本の和訳は、佐倉の佐藤舜海尚中の訳した『スプロモイエル砲痕論』が示すように「砲痕論」、原典の Dr. L. Stromeyer: Maximen der Kriegsheilkunst, Hannover, 1861. 中 Wunden durch Kriegswaffen. ss. 102~108. に該当する内容である。すなわち、あくまで医師（軍医）の戦傷についての参考書で、医学的のものである。しかし、福田正二の訳稿『軍中備要』は、前記ストローマイエル原典の Über Einrichtung von Casernen. ss. 1~3. と Über Einrichtung von Hospitälern in Friedenszeiten. ss. 4~18. に該当する部の訳である。

これは逐語訳に近い原文に忠実な訳文である。しかも。その内容は、軍陣衛生勤務、患者が発生した場合、いかに患者を収容し、応急処置を施して後送しうるかを主題にしたもので、おそらくわが国で最初のこの方面の訳業であろうと判断される。緊迫した長州藩の情勢が背景をなしていることが、十分察しえられる。

2、宍夫 湮児 氏原病論について

福田正二の訳業に『宍氏原病論』明治十年十月発兌
山口県二友社蔵がある。原病論とは病理学のことである。この題言に「予曾テ独乙国ノ

医官宍夫 湮児 氏著ス所ノ原病書ヲ得テ之ヲ読ムニ、其説詳而該、精而覈、原病の書末タ此ノ如キ者アラス。実ニ方技ノ基本ニシテ医家ノ洪宝ト謂ヘシ。自ラ力ヲ揣ラス翻譯以テ世ニ問ント欲ス。鉛槧数月適々事故アリ之を簞底ニ投シ復顧ミサルコト数年客秋浪華ニ遊ビ偶々其第五版ヲ得。蓋千八百七十二年ノ鏤行ニ係レリ。之ヲ閱スルニ其所説少シク沿革アリ。之ヲ第一版ニ視レハ更ニ精密ヲ加フ」それ故、この本をえて改訳したとある。華浦旧蔵書には幸い次のワフネル蘭・独二種の病理学書がある。

(蘭書)、Uhle, Paul en Wagner, Ernst: Handboek der Algemeene Pathologie. Utrecht, 1863. 蔵書印, 厚生局印,
(独書), Uhle, und Wagner: Handbuch der allgemeinen Pathologie, fünfte vermehrte Auflage. Leipzig, 1872.

蔵書印. 山口 蔵.

- 1、蘭書は一八六三年版である。福田はまず、この蘭書によって訳業を進めた。
- 2、「客秋浪華ニ遊ビ、偶々其第五版を得、蓋千八百七十二年ノ鏤行ニ係レリ」は、この独書と版数も年号も一致する。おそらく、この独書によって改訳したものであることに誤りはない。

福田正二のドイツ語和訳の具体例について

この推察をさらに確めるために次の三つの箇処を比較して見ることとする。

○和訳『成氏原病論』卷之一、一丁表)

「簡單ノ語ヲ用テ疾病ノ義ヲ積スルコト、極メテ難シ、人謂ク疾病ハ健康ト相反スト、蓋シ然ラス。其所謂、健康トハ唯喫緊ノ生機榮養、發育、生殖、運動、知覚、精神作用、整然トシテ自ラ違和ヲ覺ヘサル者ニシテ、学科上ニ在テ之ヲ論スルトキハ則チ九百ノ生器皆其ノ機能ヲ違スシテ造質結構亦皆異常ヲ保ツ者ニ非ルナリ」

○独訳 (Uhle u. Wagner: Handbuch d. allg. Pathologie, S. I.)

“Es ist unmöglich, eine kurze und klare Definition von Krankheit aufzustellen.——

Gewöhnlich betrachtet man die Krankheit im Gegensatze zu der Gesundheit. Beide Ausdrücke sind dem gewöhnlichen Leben entnommen. Gesund heisst derjenige, dessen hauptsächlichste Lebenserscheinungen (Ernährung im weitesten Sinne, Entwicklung und Fortpflanzung, Bewegung, Empfindung und psychische Thätigkeit) ruhig und gleichförmig von Statton gehen, und bei dem das Gefühl des Wohlbefindens besteht. Das Wesentliche im Begriff von Gesundheit im populären Sinne ist also das Gefühl des guten Befindens und die Garantie der Erhaltung des Körpers. Will Man aber den Begriff der Gesundheit strenger fassen, so geräth Man leicht in's Absurde. Denn wissenschaftlich gefasst, würde bei der Gesundheit auch vorausgesetzt werden müssen, dass sämtliche Körpertheile nicht blos ihre normalen Functionen ausüben, sondern auch normal zusammengesetzt sind.”

○翻譯 (Uhle en Wagner: Handboek der Algemeene Pathologie. p. 1.)

“Wat is evenwel ziekte? Tot nog toe trachtte men te vergeefs eene korte, heldere en toch juiste definitie van-wat ziekte was-te geven. Zooewel in de geneeskunde als over het algemeen in alle natuurwetenschap is het daarstellen van scherp begrensde en juiste definitiën uiterst moeijelijk; spreekt men bijv:

van het spijzverteringsproces, of van zenuwwerkdadigheid, ……”

この蘭書は以下延々と疾病の定義が続き、前述和訳のように「健康」の定義が現われるのは、第二頁で、しかも、その内容は逐字的に和文と一致するところがない。これは一例にすぎないが、全般的に、オランダ語本よりも、むしろ、ドイツ語本に典拠したことは確かである。三書の比較は紙数の都合で、以下省略した。

明治初期地方医学校のドイツ語医学

華浦医学校旧蔵本のうち、明治七年を境として購入された洋本は、すべてドイツ語本である。すなわち、前述の福田正二の四つの訳業を契機として、ドイツ語医学に転じたのである。一八六九年刊 (Leipzig) の Neues Taschen Wörterbuch der holländischen und deutschen Sprache. が一挙に十一組・十一冊取揃えられた。当時、この学校は十一組のグループに分けられてあったように第一組以下第十一組に組毎に一冊づつ、この袖珍字書が備付けられていた。文典も、『シェフル文典』(1869) Edmund Schäfer: *Leifaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache für die unteren Classen höherer Lehranstalten*. Acht Auflage. Köln, 1871. が、これまた十一組・十一冊備付られている。この本は前記の『袖珍蘭独・独蘭辞書』とちがって、蘭文は一字も入っていない。当時(一八六九)、大学南校に迎えられた Jakob Kaderly (スイス人) は、ドイツ語教育の必要上、『ドイツ語初歩文典』を著した。すなわち、Lehrbuch der Deutschen Sprache für die höhern Classen der kaiserlich-japanischen Akademie, DAIGAKU NANKO, Tokio in Japan. Mit Berücksichtigung der meisten Neuerungen bearbeitet von JAKOB KADERLY, Lehrer der deutschen Sprache und Literatur an obiger Akademie, zweite Auflage. Gedruckt in der akademischen Buchdruckerei, in fünften Jahre Meidochi, 1872. これは一九二頁の小冊であるが、華浦医学校においても繁用(十一組)なれている。備付目録には『独ニ文典』としている。当時、東京で流行していたホフマン(有名な『日本文典』を書き

シーボルトと関係のある J. J. ホフマン(ではなご)の『ドイツ文典』(P. F. L. Hoffmann: Praktisches grammatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 表紙が破損して何年版かわからないが、この文典も一冊見在している。ただ目録は、これもまた『独乙文典』とのみ記してあるので、前記のものと区別がつかない。

著者は、さきに「華浦医学学校旧蔵書について」、第一編、医学に関する語学書の中で、目録をあげて詳述したので、ここでは省略する。春風社(司馬凌海)や壬申塾(大熊春吉)で活躍した大熊春吉著『独逸熟語集』(明治五年刊、拡堂発兌)は、華浦医学学校の旧蔵書中にもあるが、その序の中に「余頃來、カラ独逸学ニ擅ニス。然レトモ猶倭訳ノ書ニ乏ク稍蘭英等ノ辞書ニ照対スル耳」とある。これは明治五年の実状である。当時の語学関係書の序文には、大なり、小なりこうした意味、急拠ドイツ語が行われるの不便を克する努力が述べられている。それを制するには、オランダ語を何よりの拠りどころとしている。とくに地方におけるドイツ語学習の困難は、想像以上であったのである(「寒郷僻邑之童蒙觀此書以識洋之助」中村順一郎『独逸語篇和解』序文)。

むすび

私どもは、明治四年(一八九〇)から中央でドイツ医学が実施され、これによってわが国全般の医学が、一朝にしてドイツ医学化したものと安易に想像されがちである。しかし、当時の実情は決してそうでなく、明治初年には、なおオランダ語、明治二十年頃までは、英語系医学のそれぞれの混在があつて、真に苦難な日本医学の陣痛期であつた。その中でも、それぞれの立場で、ドイツ医学傾斜への努力が払われてきた。私は、とくに明治初年を限ってオランダ語医学からドイツ語医学転換の努力を、山口県三田尻、華浦医学学校の具体例(校長・福田正二の訳例)をあげてその一部を説明し、検討した。

1、本作業の資料は、福田正二の後裔であられる京大名譽教授福田正氏の特別のご好意によつたものである。謹んで同

氏に謝意を表する。

2、善通寺国立病院名誉院長・荒瀬進、『防長医学史』と『青木周弼』の著者・田中助一、『青木周蔵自伝』の校注者・坂根義久、日本英学史学会の池田哲郎の諸氏から直接間接に多大のお指導とお示教をえた。厚くお礼申上げる。

(昭四八、一、七、記)

引用文献

- (1) 『東京大学医学部百年史』(昭和四十二年刊・東京大学出版会) 及び田中助一氏の諸著書。
- (2) 阿知波五郎著『華浦医学学校』(明治七年—同十年) 旧蔵書について—第一編、医学に関する語学書』(「医学史研究」第十二号・一九六三年)
- (3) 阿知波五郎著『山口県華浦医学学校医書目補遺』(日本英学史研究会「研究報告」第五十七号、一九六六年十一月)
- (4) 坂根義久校注『青木周蔵自伝』(昭和四十五年刊、平凡社東洋文庫一六三、一八頁)
- (5) 『森鷗外全集』第七卷(昭和四十六年刊・筑摩書房一二三頁)

The Change-over from Dutch to German for the Learning of Western Medicine in the Local Parts of Japan in the Early Meiji Period

Goro ACHIWA, M. D.

The modernization of Japanese medicine was, in effect, the Westernization of it. In the pre-Restoration days, Japan accepted European medicine mainly through Dutch learning. The first introduction of European medicine in German to Tokyo, the center of Japanese culture, was in 1871 (the 4th year of Meiji), and there the seed grew rather smoothly. In the local parts of Japan, on the contrary, there was much confusion in changing from Dutch to German. The details of the change-over in Japan at the time is as yet little known, except for that of Tokyo.

Medical education in the early period of the Meiji Era was conducted either in English, Dutch, or German. The general lack of proper teachers caused a good deal of difficulty, but nonetheless medicine in German was making gradual progress year by year. To see how they managed to change over from Dutch to German without a good teacher of the German language, I have studied the case of Eukuda Shoji, president of Mitajiri-Kaho Medical School in Yamaguchi Prefecture, founded in the days of the Choshû clan.

The materials I obtained from Fukudas, include the five kinds of translations, the manuscripts, the German originals and the Dutch translations. Here I am going to report the result of the close compa-

ri-son of the three groups and try to show how the translations of German books of medicine were done. In the local cities of Japan in the early days of Meiji teachers in every hospital school tried hard to understand German books by referring them to Dutch translations. They had to face such difficulties until graduates of the Tokyo Medical School, the predecessor of the present Tokyo University, were dispersed throughout Japan. By the 15th year of Meiji the system of medical education in German was roughly completed.

西説内科撰要について (一)

大 滝 紀 雄

一、本書のなりたち

宇田川玄随(号、槐園一七五五—一七九八)によって翻訳された「西説内科撰要」がわが国最初の西洋内科書であることは、今さら私が述べるまでもない。本書については富士川游氏の「日本医学史」、藤井尚久氏の「本邦内科史」(明治前日本医学史第三卷)をはじめ、多数の医史学書に書かれているので、その書誌学的意義についてはあまり触れないことにする。しかし本書の内容について解説した文献はほとんど見当たらないので、私はその点についての考察を試みたい。

本書の翻訳は蘭学移入初期の二大重要書である「解体新書」(一七七四)と「医範提綱」(一八〇五)の中間期になされた。したがって本書はその細字の注解をみると、「解体新書」の影響をよく受けてはいるが、「医範提綱」の新知識は——一部は「医範提綱」以後に刊行されたらしいが——まったく引用されていない。

本書の出版は数奇な運命をたどったようで、出版年については種々の説があるが、*宗田一氏の説がもっとも信用されると思われる。それによると、翻訳はひとまず寛政四年(一七九二)に終了し、一—三巻が寛政五年、四—六巻が寛政七年、七—九巻が寛政八年というふうな三巻ずつ刊行され、全十八巻の完成をみたのは文化七年(一八一〇)とされている。しかも、最初は江戸の書店で刊行されたが、のちに版權が大阪に移ったということである。

*わが国西洋内科医のはじまりと「西説内科撰要」の刊行について 日本医事新報第一八六一号、昭和三四年二月十四日

原著者ゴルテル Johannes de Gorter (1689-1762) はライデン大学でブルーハーグ Hermann Boerhaave (1668-1738) に学び、一七二二年同大学を卒業、一七二五年には Harderwijk 大学の教授になった人である。彼の著書としては、本書のほか、

吉雄永保訳「外科精要」

佐々木仲沢訳「瘍科精選」

新宮涼庭訳「窮理外科則」

などがある。この中で「瘍科精選」は「西説内科撰要」中に数カ所引用されている。その項を原著でみると“Gezuiverde Heelkonst”と記してある。「簡明外科」とでも訳すべきであろうか。また「増補重訂内科撰要」の八巻、一三三章をみると「瘍科精選」の細字の説明に「仙台医学校西学教授佐々木知芳仲沢訳述ス」と記されている。

ヨハンネス・デ・ゴルテルは「西説内科撰要」では玉亟涅斯・埵・我爾徳児と書かれ、「窮理外科則」では育漢涅斯・趨爾徳児と書かれている。

本書は「簡明内科書」ともいうべきものだが、原著の表題にみられる通り、「精撰医学、大多数の内科疾患に関する短い手引、海戦や野戦に従軍したり、またその他の場合にこのような病気を取扱う必要を生じた外科医が利用するために」(大鳥蘭三郎氏訳)と記されている。すでに述べたようにゴルテルには外科の著述が多い。本書は内科書ではあるが、「外科医のための」という注釈がされている点がはなはだ興味深い。肖像にみられるユーゴー・グロチウス(一五八三—一六四五)はオランダ、デルフトの出身で、偉大な法律家であり、「戦争と平和の法」で国際法理論を提唱した人である。ここでは地名の意味もあろうか。なお、原著の刊行された一七四四年はオーストリア継承戦争(一七四〇—四八)の最中であり、戦場における医学が等閑視されなかった時代である。

「西説内科撰要」の凡例に玄随がのべているように、大槻玄沢が本書をみて、「独奈是編。殊為要略。恐不足_三以鑿_三」

GEZUIVERDE
GENEESKONST,
OF
KORT ONDERWYS
DER MEESTE
INWENDIGE ZIEKTEN;
TEN NUTTE VAN
CHIRURGYNS,

Die ter Zee of Velde dienende, of in
andere omstandigheden, zig genood-
zaakt vinden dusdanige Ziekten te
behandelen

DOOR
JOHANNES DE GORTER,
Medicinae Doctor en Propessor,

HUGO GROTIUS

の 像

Te AMSTERDAM,
By ISAAK TIRION,
Boekverkooper, vooraan in de Kalverstraat,
in HUGO GROTIUS, MDCCXLIV

表 1.

人意。」本書をみるのに簡単すぎて、人の意を満足するには足りないのではなからうかと酷評したらしい。しかし、ひるがえって考えてみれば、我が国最初の内科翻訳書としては、あまり部厚く難解なものよりも、簡略の方がよかったのではなからうか。簡略ではあるがいちおう内科書としてののていさいを整えており、のちに宇田川玄真らにより改訂された「増補重訂内科撰要」文政五年版が出版されるに及んで、内科書としての面目を一新するのである。

私の用いた書は次のものである。

「西説内科撰要」十八巻 宇田川玄随訳 桂川甫周閲 摂陽書肆 種玉堂 賭春堂 発行年不明 大阪書林河内屋儀助
「増補重訂内科撰要」十八巻 宇田川玄随訳 宇田川玄真校註、藤井方亭増訳 京撰書肆 種玉堂 文金堂 瑞錦堂発
兌 文政九年版

「増補重訂内科撰要」三巻ずつ綴じた六冊十八巻 同右 発刊年不明

以上いずれも著者蔵である。なお「西説内科撰要」を「西説」、「増補重訂内科撰要」を「増訂」と略すことにする。右の「西説」第十八巻の終りには同書の*内容広告が掲げられていると同時に、巻一―巻九は「出来」巻十―十八は「続刊」と記されているが、現代風の考えでは理解に苦しむ。

“GFZUIVERDE GENESKONST.”「西説」の原著である一七四四年版は東京西銀座研医会図書館蔵のものを、同館の御厚意により写真コピーしたものである。同館には一七六一年版の同書も保存されているので参照したが、項目、篇の成り立ちは全く同じである。ただ四四年版に比して四一頁増で、誤字、字句の訂正がみられる。なお「増訂」の原著である一七七三年版は著者未見である。

*内容広告文は次の通りである

此書ハ和蘭伝来内治方ノ医書ニシテ和漢古今ノ医書ニモ載セザル妙論奇方ヲアマタアツメ蘭本数書ヲ翻訳スルトコロナリ和蘭ノ医書アマタアリトイヘドモ多クハ外科ノ書ノミニシテ内治ノ医書ヲ上梓スルコトコノ書ヲモツテ原始トスベシ実ニ古今未発ノ珍書ナリコノ書ニ拠テ奇方ヲモトメ療治ヲホドコストキハ如何ナル病疾タリトイヘドモ回生起死ノ術ヲホドコスベシ

二、内容目次

「西説」の内容目次について原著との比較を左にかかげる。カッコ内は原著におけるラテン語および「西説」における玄隨の漢字との当り字である。

ALGEMEENE ZIEKTEN 発無定処

1. Koorts (Febris) 寒熱篇 第一 哥爾都 (歇貌立私)
 2. Ongedaneheid (Cachexia) 翁傑達安篤竭意度篇 第二 (葛結乞西亜)
 3. Bederving (Corruptio) 壞液篇 第三 (格爾必叔)
 4. Scheurbuik (Scorbutus) 失荷兒陪苦篇 第四 (蘇格爾貌都斯)
 5. Zinkingen (Catarrhi) 聖京健篇 第五 (加怛栗)
 6. Jigt (Arthritis) 伊倔多篇 第六 (痛風)
 7. Winden (Flatus) 諸氣篇 第七 (払刺都私)
 8. Geelzucht (Icterus) 黃疸篇 第八 (志孤的祿私)
 9. Zwarte Galziekte (Melancholia, Hypochondria) 胆汁敗黒篇 第九 (默朗格里亜、喜剌昆塚里亜)
 10. Benautheit (Anxietas) 煩悶篇 第十 (安吉齊怛私)
 11. Lammigheid (Paralysis) 痲篇 第十一 (叭刺利失私)
 12. Watersucht (Hydrops) 水腫篇 第十二 (非独碌布私)
- ZIEKTEN DES HOOFDS 病属頭腦
13. Slaapnucht (Sopor) 昏睡篇 第十三 (卒剌兒)
 14. Slaaploosheit (Agrypnia) 不寐篇 第十四 (遏厄栗布尼亞)

15. Bezwyning (Syncope) 卒厥篇 第十五 (設印哥百)

16. Duizeligheit (Vertigo) 頭眩眩冒篇 第十六 (歇而執趨)

17. Ylhoofdighet (Delirium) 精神錯亂篇 第十七 (塚栗留謨)

18. Kramp-en Stuij-treking (Convulsio, Tetanus) 曷郎布蘇對布的列金僵 (昆弗尔叔的軛奴斯)

19. Hoofdpyn (Cephalalgia) 頭痛篇 第十九 (設撓刺魯細亞)

ZIEKTEN DER HALS 病屬頸項

20. Bruin in de Keel (Angina) 喉風篇 第二十 (安及那)

ZIEKTEN DER BORST 病屬胸膈

21. Hoest (Tussis) 咳嗽篇 第二十一 (黜失私)

22. Bloed-spuwen (Haemoptysis) 吐血篇 第二十二 (髮謨布底失斯)

23. Zyde-Wee (Pleuritis) 胸脇痛篇 第二十三 (布樓栗贊斯)

24. Longe-wee (Peripneumonia) 肺痛篇 第二十四 (百里布匿烏謨泥亞)

25. Aamborstigheid (Asthma) 喘急篇 第二十五 (亞斯怛末)

ZIEKTEN DER BUIK 病屬腹肚

26. Bloed braking (Vomitus cruentus) 嘔血篇 第二十六 (忽密都私・告律焉都私)

27. Walginge (Nausea) 惡心乾嘔篇 第二十七 (腴設亞)

28. Braking (Vomitus) 嘔吐篇 第二十八 (忽密都私)

29. Verlooren eetlust (Anorexia) 不食篇 第二十九 (菴貌力吉沙)

30. Verkeerde entlust (Appetitus alienus) 善饑異嗜篇 第三十 (邊百底篤私・亞理奴私)

31. Zode (Soda seu Ardor Venticuli) 暖氣・吞酸・嘈雜篇 第三十一 (鎖達)
 32. Pyn voor 't hart (Cardialgia) 心腹痛篇 第三十二 (伽尔若兒如亜)
 33. Verkeerde dorst 發渴篇 第三十三
 34. Bezwaarlyke spys verteerig (Dyspepsia) 食不消化篇 第三十四 (弟須陌必紗)
 35. Kolyk (Colica passio) 疝篇 第三十五 (各栗葛・机叔)
 36. Drekbraaking (Volvulus) 口中転尿篇 第三十六 (荷尔弗兒斯)
 37. Hardlyvighheit (Alvus constipata) 大便秘結篇 第三十七 (亜尔吸斯・工恒刺窟打)
 38. Spysloop (Lienteria) 乳糜利篇 第三十八 (栗印底野)
 39. Bort (Cholera) 霍乱篇 第三十九 (格列刺)
 40. Buikloop (Diarhoea) 泄瀉篇 第四十 (若爾独)
 41. Leverloed (Fluxus hepaticus) 肝崩篇 第四十一 (払兒吉須斯・汎室屈私)
 42. Roodeloop (Alvi fluxus cruentus) 赤痢篇 第四十二 (亜尔非・払兒吉須斯・格碌媽都私)
 43. Rynelyke buikloop (Dysenteria) 痢利篇 第四十三 (弟生底野)
 44. Persing (Tenesmus) 重墜努責篇 第四十四 (的匿斯謨私)
 45. Wurmen (Vermes) 諸蟲篇 第四十五 (歇尔墨斯)
 46. Trommelzucht (Tympanites) 鼓腸篇 第四十六 (丁撓尼的私)
- ZIEKTEN DER PISWEGEN 病属尿道
47. Graaveel (Nephritis) 結石腎痛篇 第四十七 (涅非栗室私)
 48. Bloedwateren (Mictus cruentus) 尿血篇 第四十八 (密窟都私・格碌媽都私)

49. Psvloed (Urinae profluvium, Diabetes) 尿崩篇 第四十九 (胡栗納・布碌私篤彪謨・若別的斯)
50. Opstopping van de pis (Ischuria) 尿閉篇 第五十 (伊斯格利亞)
51. Droppel pis (Stranguria) 淋瀝篇 第五十一 (私怛蘭臥利亞)
52. Moeijelyk wateren (Dysuria) 小便不利篇 第五十二 (提須利亞)
53. Onmacht om de pis op te houden (Incontinentia Urinae) 小便失禁篇 第五十三 (応工室能質亞)

ZIEKTEN BUITEN OP DE HUID 病發皮表

54. Kinderpokjes (Variolae) 痘瘡篇 第五十四 (發栗沃刺)
55. Mazelen (Morbilli) 麻疹篇 第五十五 (謨耳弼尔栗)

以上のように、病名というよりもどちらかといえば症状による分類が多い。この点第二次世界大戦前の病名分類によるドイツ医学よりも、大戦後の症状分類によるアメリカ医学に近いといえよう。

翻訳そのものにも難渋したらしいが、病名や症状、ことに始めてみるようなラテン語には、玄随自身適当な訳語を見出せず、原語の発音に類似した漢字を勝手に当てはめたような感じがする。玄随の読みちがいと思われるものもかなりある。その大部分が「増訂」では正しく訂正されている。また、「西説」では当て漢字が多いが、「増訂」では漢字を無理に当てはめず、片カナ書きで現わしている部分が多い。秘結 *Constipata* を「*コシクワツクツ*」と読んでいるが、「増訂」では「*コンスタパタ*」と訂正している。食欲不振 *Anorexia* も「西説」では「*菴貌力吉沙*」と書いているが「増訂」では「*アノレシア*」と訂正している。

右のように「西説」は七項目、五十五篇、三二〇章からなっている。「増訂」では冒寒、徽毒、咬傷毒、呃逆、病属婦人(経閉、崩漏、白帯下、孕婦諸病、産婦諸病)の項目が新に採りいれられ、同じく十八卷だが、八項目、六十四篇、三九三章となった。

目次にみられる通り、内科書ではあるが、皮膚、泌尿科疾患、眼科疾患、精神科疾患、産婦人科疾患なども含まれている。そして、各病症別に大較 (Bepalling 定義)、病原 (Oorzaken 原因)、区別または分別 (Verdeling, Onderscheid 分類・鑑別)、余義 (Gevolgen 結果)、治法 (Genezing 療法) 等を述べている。

当時の翻訳書の多くがそうであるように、多数の注釈がみられる。「解体新書」における「翼按するに」式であるが、説明や引用文献や訳者の考えはすべて細字で書かれているので、一目瞭然本文と区別することができる。病名、主訴等は現在のものと一致するものもかなりあるが、現在ではまったくそうした用語の用いられないもの、またはちがった意味で使われているものもある。これらについては後に述べることにする。

病気の分類法はひじょうに杜撰で、全身病 (発無定処) の中に発熱、黄疸、壞血病、胆汁敗黒病などをいれたり、頭脳の病気に咬傷毒 (破傷風)、狂犬病などを、腹部の病気にコレラすなわち霍乱を、皮膚の病気に痘瘡、麻疹をいれたりしている。しかし、顕微鏡はあっても細菌学は発達しておらず、ビタミン、ホルモンの概念もなく、生理学、生化学の知識も未分化の原著の書かれた一七四〇年代としては止むを得なかったのだろう。また「解体新書」が上梓されたとはいえ、本道を標榜する内科医にとって、陰陽五行説や傷寒論を基礎とした「証」による病名分類しか考えられなかった、十八世紀末のわが国の情勢としては、これらの人体構造と初歩的生理学の知識を基礎とした内科分類法は、活目すべき斬新な手法であったにちがいない。(未完)

(本稿の要旨は第七十三回日本医史学会総会で報告した)

“Seisetsu Naika senyô”--the first translated
Book of Internal Medicine

Toshio OTAKI

“Seisetsu Naika-senyô” was the first translated book of internal medicine in Japan. The author was Johannes de Gorter (1689-1762), professor of Harderwijk University in Holland, whose teacher was Hermann Bodrhaave (1668-1738).

The original title of this book was “Gezuiverde Geneeskunst, of kort Onderwys der meeste Inwendige Ziekten; ten nutte van Chirurgyns”, which means “the Handbook of Internal Medicine, for the benefit of Surgeons”. The translator was Udagawa Genzui (1755-1798), a famous specialist of internal medicine; and this book was translated into Japanese in the year 1792. The contents consist of 7 paragraphs and 55 chapters. Later this translated book was revised and enlarged by Udagawa Genshin and Euji Hôtei in 1822. This new edition “Zôho-Chôtei Naika-senyô” consists of 8 paragraphs and 64 chapters.

(to be continued)

原著

藤原宮出土の典藥寮

関係木簡考

日本医史学雑誌・第十九卷
第一号・昭和四十八年三月
昭和四十七年十二月十二日受付

新村 拓

藤原宮は持統八（六九四）年十二月に飛鳥浄御原宮より移って、和銅三（七一〇）年三月の平城京遷都に至る十六年間、持統・文武・元明天皇の三代にわたる都城として存在した。朱鳥元（六八六）年病のため崩じた天武天皇の遺業をうけ、忠実に履行していったのが「深沈にして大度あり」⁽¹⁾との評がある持統女帝の政治であった。ここにて浄御原令の施行をみ、続いて文武朝にて大宝律令が施行されたのであったが、慶雲年間の全国的な飢疫は根底から律令体制をおびやかし、それへの古代的発想にもとづく対応として平城遷都をみたのである。

この藤原宮の本格的な発掘調査は昭和四十一年から行われ、それに伴ない多量の木簡が出土している。調査報告によれば、特にFG二六―D_N地区において典藥寮関係の木簡や削屑が一括出土し、また付近にテンヤクの坪名が遺っているところから、この地に典藥寮関係の建物・菜園があったであろうと推定されている。なお、出土木簡の年代下限は大宝末年ごろと考えられている。⁽²⁾典藥寮関係の木簡内容は、(一)薬物の付札、(二)薬湯の処方書付、(三)薬物請求・受領書付に分類される。以下、主要な木簡記事について考えてみたい。

79 「請葉王風行 故鷹司人進少初」(表)
「請葉王風行 進少初位」(裏)

これは放鷹司に所属する進少初位にある下級官人某が王風行なる葉を請うたものである。放鷹司については、養老五(七二二)年の詔に

深禁殺生、宜其放鷹司鷹狗(中略)、悉放本処、令遂其性、從今而後、如有必須、先奏其狀待勅、其放鷹司官人、并職長上等且停之

と機能停止のことがみえるが、神龜三(七二六)年には復活され、天平十(七三八)年の筑後国正税帳には鷹養人參拾人の貢上(3)のことが、天平十七(七四五)年には放鷹司二人の給米のことが正倉院文書にみえ、天平宝字八(七六四)年には「廢放鷹司置放生司」とみえる(6)。放鷹司の名称及びその機能は養老五年以後一時中断したが、天平宝字八年までは存続しており、その職掌は鷹犬を調習することであった。また進少初位なる官位は大宝元(七〇一)年三月二十一日の官名位号の改制から、翌年十月十四日の大宝律令の頒下までの暫定的に施行された位階であるから、この木簡はおおよそ大宝年間のも(7)のと考えられる。従って、この木簡記事は持統天皇三(六八九)年施行の淨御原令制下にあるものと考えられるから、請葉先は典葉寮と考えてよいであろう。それは淨御原令が大宝・養老令と大差がなかったと思われるからで、或は典葉寮でなく外葉寮であったかもしれない。外葉寮は天武天皇四(六七五)年にみえる近江令制下の官司であり、官用の薬物を掌り、内葉寮に対するものであった(8)。典葉寮に請求のあった王風行なる薬物は王不流行、王不留行(カサクサ、スズクサ)とも呼ばれるものである。この葉草は主に止血・鎮痛剤として用いられ、悪疽の治療に使われるものであるから鷹司の職掌と全く縁のない葉草とはいえない。この葉草は典葉寮式によれば畿内・中国地方を中心として多量に貢進されている(9)。當時、葉草は官宮の葉園にて栽培されているばかりでなく、諸国の葉草豊かな所には採葉師が配置され、付近の農民を使役して採草貢進させていたのである。

68 「高井郡大黃」
「十五斤」

信濃国高井郡から大黃十五斤貢進の付札である。高井は和名抄に太賀為と注し、五郷よりなっていたのであろう。延喜式左馬寮に高井牧の右岸の須坂市の東に高井の地名がみえる。当時その辺が高井郡の中心となっていたのであろう。典葉寮式によれば信濃国大黃三十とみえ、神祇式の高井郡には墨坂神社がみえるが、これは今の須坂の柴宮明神という。⁽¹⁰⁾ 典葉寮式によれば信濃国大黃三十斤とある。高井郡で割当ての半分を受持ち、あとの半分を九郡のどこかで負担貢進したものとみえる。大黃は古名を於保之(ヲホシ)といい、⁽¹¹⁾ 消炎性健胃、緩下剤であり、有効成分はオキシメチルアントラキノンである。⁽¹²⁾ この薬草はタデ科植物で根茎の皮を去り、乾燥したものを用い、古来から漢方では欠くことのできない重要なものとされ、正倉院宝庫に現存している。⁽¹³⁾ 典葉寮式によれば主に関東から東北諸国にかけてみられるが、そのうち陸奥国からは百四十斤と全体の七十%を占める多量の貢進があった。

75 「受被給薬車前子一升 西辛一両」
「多治麻内親王宮政人正八位下陽胡甥」

これは多治麻内親王宮家令の政人正八位下の役職官位をもつ陽胡甥なる者が三種の薬物を典葉寮より受領した書付である。多治麻内親王は天武天皇を父とし、藤原鎌足の女氷上娘を母とする但馬皇女のことであらう。天武二(六七三)年正月に生まれ、和銅元(七〇八)年六月薨去。時に三品であった。万葉集に異母兄の穗積皇子を思う歌を残している。⁽¹⁴⁾ その家令であった陽胡氏は百濟系帰化人の家系で、⁽¹⁵⁾ 本拠は但馬国二方郡湯口郷にあつたらしい。⁽¹⁶⁾ 学芸をもって朝廷に仕えた一族であつたらしく、⁽¹⁷⁾ 写經生として活躍する者(陽胡乙益)もおり、⁽¹⁸⁾ 中でも陽胡史真身は学芸に秀で奈良朝初期における第一級の学者であり、⁽¹⁹⁾ また買官をして西国国司に任せられるなど、⁽²⁰⁾ 学ばかりでなく利殖の道にも通じた富裕な一族であつ

た。次に政人については、大宝三年の持統上皇御葬司の中に「政人四人」とみえ、また東大寺写経所にいたことも知られるが、⁽²¹⁾職掌はよくわからない。天平勝宝元（七四九）年八月の経師上日帳の中に「自政所来舍人」の記事がみえるが、政人なるもの、或はこの政所舍人に類するものではなからうか。⁽²²⁾

ここに出てくる薬草は当時であつて最も多く用いられていたものと思われる。典薬寮式によればほぼ全国にわたつて貢進されている。車前子（オオバコ）は利尿剤、西辛は鎮咳、祛痰薬である細辛のことであろう。久参は苦参（クララ）に通ずると思われる。健胃剤である。当時の重さの単位である升・斤・合・両は柜黍の重量を基準として、二四〇〇柜黍の重さを一両とし、一合は五両、一斤は十六両、一升は五十両となつていた。⁽²³⁾ 唐代の一両は三七、三g相当と推定されてい⁽²⁴⁾る。

76

「左大舍人寮 少允正八位下高（椅之）且臣男足」

□□^{（六カ）}
□□

廿五膳署

夕夕
□□^{（一）}
□□^{（廿五）}

これは左大舍人寮官人高椅男足の請業（受領）木簡である。高椅は高橋にも通ずるから高椅且臣男足は和銅四（七一）年に正七位上より従五位下に叙せられた高橋朝臣男足のことと思われる。⁽²⁵⁾ 高橋氏は代々内膳司奉膳職にあり、御膳のことをすべて掌つていた。この従五位下への特進は奉膳が正六位上相当であるから、奉膳補任のためであろうか。大舍人寮は左右あり、各八百人の大舍人をかかえる大きな官司である。舍人の任用規定をみると、五位以上の子孫で二十一才に達し、役任なく性識すぐれた者を検簡して内舍人に採用し、それにもれた者は大舍人他にあてられ、六位以下八位以上の人⁽²⁶⁾の嫡子で二十一才に達し、役任なき者について国司が簡試し、儀容端正、書算の巧みな者を上等とし兵部省に送られ、そこで更に簡試して上等を大舍人に任じたのである。禁中に宿直し雑事・供奉等を掌るのであるが、他官司に出仕する以前

において先ず大舎人に任用され、官人としての養成を受ける機関でもあった。左大舎人寮の少允は令規では一人とあり、従七位上相当である。ここに記載の薬物の暑預（ヤマノイモ）は極くありふれたもので強精薬となろう。木菌（キノタケ）は木耳ともいい、キノコのことである。

77 「彈正台笠吉麻呂請根大夫前桃子一二升
奉直下刀良」

これも請葉書付である。笠朝臣は笠臣の宗族にて本貫は備中国にあり、姓氏録では右京皇別に収めている。⁽²⁷⁾ 笠吉麻呂はおそらく笠朝臣吉麻呂のことで、和銅元年に正六位下より従五位下に叙せられ、⁽²⁸⁾ 同二年には初めて造雑物法用司が置かれるとこれに任せられた。⁽²⁹⁾ 同五年、従五位上に叙せられ、⁽³⁰⁾ 靈龜元（七一五）年には正五位下に昇叙となっている。⁽³¹⁾ 木簡下限時においては少なくとも正六位下より下であるから彈正台少忠より下役の雜任時代のことになるが、内外を巡察し、非違を糾弾することを職掌とするものである。直丁については彈正台は二名と規定されている。諸国から徵発せられた仕丁の官司に勤務するもので、官内の雜事に駆使された。ところで、木簡の書付割注の所であるが、彈正台直丁の刀良なる者が上役の笠吉麻呂の命を受けて典葉寮へ出向き、桃子を受領したと解するのであろう。木簡番号一〇七番に「物部刀良風病」と書付けたものがあるが、刀良は或はこの物部刀良を指すのではなからうか。但し物部刀良が風病（中枢性並びに末梢性神経の疾患であろうと推測されている）に罹患したことは直接には関係がないものと思われる。桃子（モモノミ）は緩下・駆瘀血剤である。請根大夫前は「根を大夫（おほまへつぎみ）の前に請ふ」と読み下すのであろうか。

ところで、官人の医薬給与はどのようになっていたであろうか。医疾令によれば

凡五位以上病患者、並奏聞遣医為療、仍量病給葉

とあり、義解によれば五位以上の場合には宮内省に申牒し、軽症ならばそこで処方し、重症なら宮内省から太政官へ申達して奏聞の後、医薬を給与することになっていたのである。延喜式（典葉寮）では

凡五位已上有須草葉者、就寮請之

とあり、五位以上ならば必要に応じて典葉寮より直接交付されたのである。令の本文は五位以上についての規定しかみえない。それならば下級官人はどうなっていたのであろうか。集解（職員令）の典葉頭の解によれば、

又云、療医針師、典葉量其所能、有患之処、遣為効療者、然則京中庶人以上、皆合救療也

とあるから、京中庶人以上の者も官医の治療対象となっていたことが知れる。今昔物語の中に、片田舎に住む無下の下衆にもあらぬ女が典葉寮で治療を受けた話があり、しかも、その典葉頭は公私に用いられたる者であったと記されている。⁽³³⁾また、滝口の従者が病氣となり丹波忠明が往診する話が見える。⁽³⁴⁾地方においては国医師が一人、医生が大國十人、上國八人、中国六人、下國四人の割で置くことが規定されていた。そして国司の部内巡行に同行し、農民に医療を施すこともあった。天平八（七三六）年の薩摩国正税帳には

参度賑給一度医師一人、従一人（下略）

とみえ、⁽³⁵⁾瘡瘡の流行に伴なう飢疫人救済のために医師が巡行したのである。神龜三（七二六）年の山背国愛宕郡雲下里計帳には

戸主少初位上出雲臣深嶋、年肆拾伍歳、正丁、造官省工、右手於灸

と灸の記載がみえ、⁽³⁶⁾天平十二（七四〇）年越前国江沼郡山背郷計帳には六人の農民男女に灸の記載がみえる。⁽³⁷⁾これらの灸治の背後に国医師の影響を考えなければなるまい。このような史料から医疾令の本文にみえない下級官人及び庶人の官医による治療の実際を垣間見ることができ、散佚して不完全な医疾令の条文の内容を補足することができる。大宝令は実施直後において既に多方面から崩れ出しており、典葉寮関係においても空文化されるころもあったが、医葉給与の面については大いに機能していたことを木簡からうかがうことができる。それは藤原宮時代十五年間の後半において、特に早魃・疫病が連年のようにおこっていることからして、積極的に機能せざるを得ない状況におかれていたからともいえる。

「漏盧湯方漏盧二兩升麻二兩黃芩二兩大黃二兩枳實二兩白朮二兩白微二兩夕葉二兩甘草二兩」

69 麻黄二兩漏盧

「新家親王湯方系子口 本草 一」

これは藥湯処方を書付けたもので、新家親王に対し漏盧湯の処方を示したものである。新家親王は日並知皇子（草壁親王）を父とし、元明天皇を母とする日高（氷高）皇女、後の元正天皇のことかと思われるが、内親王とないので疑問は残る。先の多治麻内親王の姪にあたる。天武十一（六八二）年八月の勅に、

為日高皇女名更新
家皇女之病、大辟罪以下男女并一百九十八人、皆赦之

とみえる。⁽³⁸⁾日本古典文学大系本の日本書紀下巻の頭注によれば、新家は日本紀標註を引用して乳母の姓に抛りたるなるべしとするが未詳と記している。元正天皇は天平二十年四月薨去。時に六十九才とあるから天武八（六七九）年の生まれである。靈龜元年九月に即位しているから、木簡の下限年代においては未だ内親王の時代である。ここにでてくる藥草の多くは典藥式にみえ、漏盧（クスクサ）は皮膚熱毒惡瘡疽痔に利き、止血排膿薬で上薬に属し強精薬でもある。この方剤である漏盧湯は一切の癰疽に効あることが本草綱目にみえる。⁽³⁹⁾畿内近国に貢進は集中しており、八国五十一斤をかぞえる。升麻（トリノアシクサ）は解毒・解熱剤で、煎薬は口内炎、扁桃腺炎に用いられる。枳實（カラタチ）は下痢止め、健胃剤で畿内近国からの貢進である。白朮（ヤマカガミ）は畿内から西国方面にかけての貢進で、強精剤か。黄芩（コガネバナ）は胃腸炎に煎用されるもので、讃岐・武蔵から大量に貢進されている。白微（ミナシロクサ）は解熱剤で温暖な海辺の諸国から貢進され、特に伊豆からは多い。夕葉は不明。甘草は最も頻用されるもので緩和・解毒剤であり、正倉院宝庫にも現存している。麻黄（カツラクサ）は発汗・鎮咳剤で相模・武蔵・讃岐の三国から貢進。兎糸子（ネナシカツラ）は強精剤で畿内近国の貢進。これらの藥草を合したと思われる漏盧湯は本草、即ち本草集注に準拠して処方したものとみえる。

「……典薬……」

72

〔本〕 草集 本草集注

本草 月 十 凡 十月

74

「本草集注上巻

〔章カ〕

「黄芩二両 芷白芷二両……」

この書付により典薬寮における実際の薬湯処方本草集注に準拠してなされていたことを知る事ができる。大宝令制においては医針生の教科書としてこの梁の陶弘景（陶隱居）の本草集注が用いられたのであったが、令義解及び延喜式においては唐の蘇敬の新修本草に代っている。これは既に延暦六（七八七）年において、

典薬寮言、蘇敬注新修本草、与陶隱居集注本草相檢、增一百余条、亦今採用草薬、既合敬説、請行用之、許焉

(40)

とあるように、従来使用してきた本草集注に代って内容の充実した新修本草を医針生の教科書として採用した旨を申出て認許されているのであった。陶弘景は劉宋の孝建三（四五六）年に生まれ、儒仏道教に帰依した南北朝屈指の人物であったが、齊の永明十（四九二）年茅山に隱居してから医薬に志し、後漢から三国時代の成立とみられる神農本草經を校訂し、また別に名医別録を纂修し、その両者を合して本草經を撰定し、永元二（五〇〇）年になって実用化のために本草經の薬品をその当時のものに固定化し、更にその異名、用法・出產地等を注銘した本草集注を完成させたのである。この原本は唐宋間に亡佚してしまっていないが、寛平年間撰の日本国見在書目録には本草集注七巻を著録している。その内容については先ず薬品を種類によって分類し、その内につき更に三品に依って分類したのである。実用的な、しかも医薬的な自然分類と神仙的な分類とを兼ね存し、その種類による自然分類を重くみた。これは本草が仙薬より医薬へ移行する過程を如実に示すものといえよう。本草集注はこうした画期的な内容をもつものであったが、その後、唐代（六五九）年において、この陶氏の本草を踏襲し、更に増補校訂を加えた新修本草が纂修され、七二年後の天平三年には我が国において書写

されており、また天平二十年にも書写されていたことが正倉院文書にみえる。⁽⁴²⁾ 従って奈良朝初期において新修本草が公式にはないが、一部の者によって薬湯処方の際して参照されていたことが考えられる。ところで、薬湯処方を書付けると同時に、その準拠した書名をもわざわざ書き込んでいるのはなぜであろうか。本草集注以外に本草書があって、それと区別するために記したものととも考えられるが、大宝年間において諸書を統合した総合本草書ともいうべき、また医針生の教科書と規定されている本草集注を置いて他に参照すべき本草書があったとも思われぬ。他に理由を求めなければならぬが、律疏職制律によれば、供進の薬は先づ方を処方し、方によって薬を調査すべきで、もし薬の分量を処方の如くせず、また薬封に薬の用量を書き誤ったならば徒三年に処され、又雑律によれば一般の人に対しても同様に過誤があれば徒一年と職務上の過失罪としてはきわめて重い刑に処せられたのを見ると、わざわざ準拠した書名までも書き込んだわけがここにあったように思われる。処方の際して正確を期したためと考えられる。

なお、白芷(ヨロイグサ)はセリ科植物で鎮痛・止血剤である。

以上の他に断片的に薬名を書付けた木簡がある。例えば木簡番号六二「薑根五十草株」六三「麻黄卅四把」六四「麻子一斤五升」六五「麦門冬三合」六六「罌預二升半」六七「竜骨五兩」八一「桂心一兩二分」八二「升麻二兩、白鏡二兩、枳実二兩、夕薬」百五「商陸漆斤」などや、薬湯処方の書付である七一「酒石斛酒方」といったものが見える。なお、昭和四十二年以前に出土した木簡については都合によりふれなかった。後日、機会があれば平城宮出土木簡のものと同合わせ考えてみたい。

一般に飛鳥から奈良朝初期にかけては実学尊重の傾向がみられ、元正天皇の靈龜二年には

制、大学典業生等、業未成立、妄求薦擧、如是之徒、自今以去、不得補任国博士及医師

とあり、⁽⁴⁴⁾更に養老五年の詔には

医卜方術、古今斯崇

とみえ、医官賞賜のことがあった。⁽⁴⁵⁾ 令制の空文化傾向に典藥寮も例外ではなかったが、政府の積極的な姿勢のうちに内部的に機能分化し、ある程度の充実をみた面もあった。それは医薬に対する民衆の要求意識の高まりの反映である。当時の医療を国史の上にあらわれたものだけから考えてみると、呪的医療に支配されていたような観をもつが、木簡を初めとし、説話集、正税帳、計帳といった種類の記録からながめてみると、必ずしも呪術万能ではなく、経験的な漢方に依存する面もかなりの比重を占めていたことを知ることができる。木簡の書付はそのことを改めて強く認識させてくれるものであった。

注(1) 「日本書紀」卷三十、持統天皇称制前紀

(2) 奈良県教育委員会「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第二十五冊『藤原宮』昭和四四・一

なお、本文引用の木簡史料番号は右記本所収の「木簡积文」付記の番号を示すものである。

(3) 「統日本紀」卷八、養老五・七・庚午

(4) 同、卷九、神龜三・八・壬戌

(5) 「大日本文書」卷二

(6) 「統日本紀」卷二十五、天平宝字八・十・乙丑

(7) 放鷹司進少初位は大宝令における兵部省主鷹令史（少初位上相当）に該当しよう。

(8) 「日本書紀」卷二十九、天武天皇四・正・丙午

(9) 「延喜式」、卷三十七、典藥寮、諸国進年料雜葉、藥名は「本草和名」上（日本古典全集）参照。

(10) 吉田東伍「大日本地名辞書」

(11) 和名考異、新訂増補国史大系、延喜式付録

(12) 高橋昉正「漢方の認識」頁一九九

(13) 渡辺 武「正倉院宝庫の薬物」書陵部紀要、第七号

(14) 「万葉集」卷二一四、一一五、一一六

(15) 太田 亮「姓氏家系大辞典」

(16) 池辺 弥「和名類聚抄郷名考証」頁四七三

- (17) 「統日本紀」卷一文武天皇四・八・乙丑
 (18) 「大日本古文書」卷二
 (19) 「統日本紀」卷九、養老六・二・戊戌
 (20) 同、卷十七、天平勝宝元・五・戊辰
 (21) 同、卷三、大宝三・十・丁卯、「大日本古文書」卷七―三十六
 (22) 「大日本古文書」卷三
 (23) 「令義解」雜令
 (24) 角川漢和中辭典、頁一三一―
 (25) 「統日本紀」卷五、和銅四・十一・辛卯
 (26) 「令義解」卷五、軍防令、「令集解」卷三、職員令
 (27) 太田 亮「姓氏家系大辭典」
 (28) 「統日本紀」卷四、和銅元・正・乙巳
 (29) 同 同二・三・庚辰
 (30) 同 卷五、同五・正・戊子
 (31) 同 卷六、靈龜元・正・癸巳
 (32) 服部敏良「平安時代医学の研究」頁六五
 (33) 今昔物語、本朝世俗部、卷二四―七
 (34) 同 卷二四―十一
 (35) 「大日本古文書」卷二
 (36) 同 卷一
 (37) 「大日本古文書」卷二
 (38) 「日本書紀」卷二十九、天武天皇十一・八・己丑
 (39) 「本草綱目」卷十五、草部
 (40) 「統日本紀」卷三十九、延曆六・五・戊戌

- (41) 渡辺幸三「陶弘景の本草に対する文献学的考察」東方学報、京都、第二十冊
- (42) 仁和寺本（鎌倉抄本）「新修本草」の奥書に「天平三年歲次辛未七月十七日書生田辺史」とある。
- (43) 「大日本古文書」卷三、写章疏目錄
- (44) 「続日本紀」卷七、靈龜二・五・丁酉
- (45) 同 卷八、養老五・正・甲戌

原著

日本医学雑誌・第十九卷
第一号・昭和四十八年三月

昭和四十七年十月十四日受付

旧約聖書における衛生状態

小 沢 吉 見

序

「あなたがたの神、主なるわたしは聖であるからあなたがたも聖 (Qadosh) でなければならぬ」(レビ記十九・二)と啓示されているように旧約聖書において神はイスラエル人の聖なるべきことを要求している。この聖なることとは、どのような状態を指し、どのようにして聖になるのか。この点を聖書に示された記録と最近における考古学上の発掘成果とを併せて研究し、古代イラエルにおける衛生施設、衛生観念を調べるのが本稿の目的である。

一、旧約聖書について

旧約聖書はユダヤ教徒にとって正経 (Kanon) であるが、歴史的な記録としての価値も高い。

新約が一〇〇〇年程の期間を扱っているのに対して、二〇〇〇年にも亘る記録であり、それは青銅器時代より鉄器時代⁽²⁾にまたがっている。

この記録の舞台であるイスラエルの国土は古来、諸民族の通過する道、南北文化の交流する、また、貴重な香料⁽³⁾のはこばれる道にあたっていた。

旧約は新約の世界と異り、考古学上の発掘による実証的研究が可能であり、今日も発掘が盛に進められているところに特色がある。

(1) 出エジプト記二七・三「十能、鉢、肉叉、火皿を造り、その器はみな青銅で造らなければならない」

(2) 申命記八・九「その地の石は鉄であってその山からは銅を掘りとることができる」

(3) ヘルマン・シュライバー著、関楠生訳「道の文化史」(岩波書店、昭和三十七年)の一〇四頁、乳香と巡礼の道。

(4) Botta P. E. は一八四二年來、コルサバートを発掘。

The Exhibition of Biblical Archaeology. (一九七二年、東京) カタログ十二頁「本年最初の七ヶ月に四十八ヶ所で発掘調査……」

二、考古学上の発掘

(1) ドイツ東方学会につづきアメリカ東方研究所が発掘に努力して来た。その中心は William Foxwell Albright 教授で

あり、批評神学者の Martin North 等であるが、最近
はイスラエルの考古学者により本格的発掘が進められて
いる。

発掘は聖書に記されている Jericho, Hebron (ヘタ
王国の古都) Debir, Bethel, Mesiddo, Gilead 等を中
心としている。イギリス探検隊の K. M. Kenyon は
「Jericho は考えられる限ぎりの世界最古の町である」
とのべている。

(2) メギッドでは第六層まで発掘され、Solomon 王(前

九六五頃―九二六頃)時代の町が出土している。このよ
うな考古学上の成果と聖書の記録とを併せ研究したの
が Edward Neufeld である。この聖書考古学の発掘



図 1.

目的はこれまでの他地域における場合と本質的な相違をもっている。
 H. Schliemann のトロイア遺跡の発掘(一八七〇年)、Sir A. J. Evans のクレタ島の古都クノッソス発掘(一九〇〇年)、エジプトにおけるピラミッド内の探索の数々、これらは美術品、黄金の遺物を目ざして行われ始めた。これに対し、聖書考古学の立場に立って、イスラエル人のコミュニティ生活の歴史の開明が主目的となっている所に特色がある。

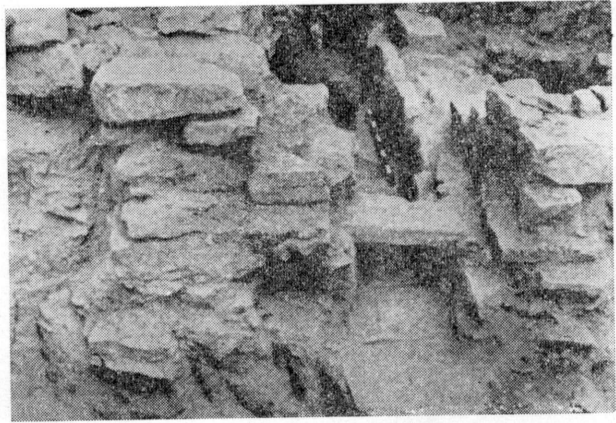
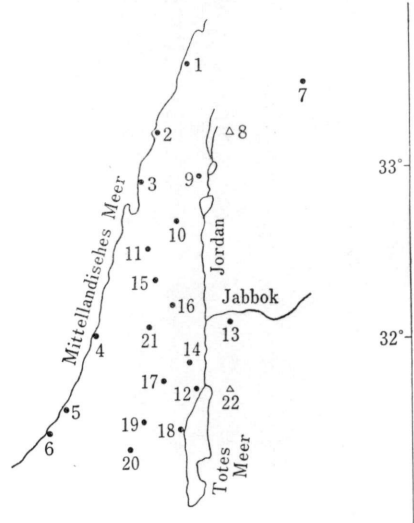


図 2. Middle Bronze Age. domestic Sewerage (Jericho)



Das Palastina		der Bibel	
1	Sidon	12	Qumran
2	Tyrus	13	Gilead
3	Akko	14	Jericho
4	Joppe	15	Hesbon
5	Askalon	16	Tirza
6	Gaza	17	Jerusalem
7	Damaskus	18	Lachis
8	Hermon	19	Hebron
9	Hazor	20	Debir
10	Nazareth	21	Sichem
11	Megiddo	22	Nebo

図 3.

- (1) ウエルネル・ケラー著山本七平訳「歴史としての聖書」(山本書店一九五八年) 四頁
 (2) 前掲カタログ三四―三五頁「発掘されたソロモン王の戦車の城邑メギット」
 (3) Hygiene Conditions in Ancient Israel, 1970. Journal of History of Medicine and Allied Sciences. Vol. XXV, No. 4.

三、研究の動向

「歴史としての聖書」「死海の書」は考古学上の成果を用いて、聖書が歴史的、地理的に、またイスラエル人の当時の生活状態を正しく描いていることを実証しようとしている。再建イスラエルの伝統研究の方向でもある。

この傾向をさらに発展し、古代イスラエル人の衛生状態を研究したのが E. Neufeld, P. L. O. Guy 等⁽³⁾である。

- (1) 「死海の書」北沢義弘訳 みすず書房、一九五七年
 (2) 「ダビテ、イスラエルに王たり」前二〇―二〇年頃」R. L. Ottley, A Short History of the Hebrews. 卷末年表
 (3) The excavations of Armagedon 1929.

四、考古学上の成果

(1) 都市、家庭における排水溝、下水溝。

古代都市の発掘により、当時の衛生施設が判明しつつある。

⁽¹⁾ Mohenjo Daro において、インダス文明の遺跡として、給水施設、下水溝渠、浴場が発掘された。クレタ島の Knossos から有名な迷宮がああ独自の柱とともに出土した。しかし両者とも文献解読は成功していない。この点イスラエルにおける成果は聖書との関連により、深い理解が得られるところに特色がある。

⁽²⁾ Jericho。予言者にして立法者であるモーセは Nebo 山からエリコを遠望しつつ永眠した。このエリコの発掘により地下の下水溝址が発見された。

Hebron の十一哩南西にある Debir の Tell Beit Mirsim。水路のように見える掘り割式の下水溝は家庭から出る廃物、汚物のための施設である。

Jerusalem の北方十一哩の Bethel。排水溝の組織が発見されている。この排水溝の石は一層精密につまみ、溝の横断面はエリコよりも正しい長方形をしている。市中に降った雨水を城壁外に排水するもので、オールブライト教授によれば、前六世紀の初期までの間、町の中を出来るだけ乾燥させるために、年と共に完備されて行ったものである。イスラエル人は街路の泥に困り、腐敗物、鳥獣の屍体から発する有毒ガス、これに集まる害虫、微生物の繁殖に対する処置に苦心して居る。

下水溝についての関心はギリシアのポリスには見られず、ローマの Cloaca Maxima (大下水溝) に大規模な形で見られる。糞尿、汚物の処理もギリシア都市と異り、ローマにおいてはいくらかの注意が払われているが、イスラエルに比べると病氣、不潔に対する注意が非常に低い。この点、エリサベス朝下及び産業革命時代のロンドンにおける便所(5)の数の少いことも注目に価する。

(1) 曾野寿彦、西川幸治共著「死者の丘、涅槃の塔」六一頁(新潮社、一九七〇年)

(2) 前掲 E. Neufeld, レポート、四一五頁

W. F. Albright, The excavation of Tell Beit Mirsim, II. The archeology of Palestine. p. 101. (1963)

(3) セカリヤ書十・五「道ばたの泥の中に敵を踏みじる」

イザヤ書五・二五「しかばねは、ちまたの中で、あくたのようになつた」

(4) マンフォード著生田 勉訳「歴史の都市明日の都市」(新潮社、一九六九年)二二五頁—二二七頁。

同書一六九頁「この医学派(ヒポクラテス派)は公衆衛生についての記述を残さず、また糞尿の適当な処理にも触れていない」同書二二三頁「ローマの浴場はローマ人を遊民、食客、……のための理想的環境……」。これはイスラエルの場合と全く対照的である。

(5) 同書三七九頁。「一八四三年から四四年のマンチェスターのある地区では、七百人以上の住民の要求はたった三十三ヶ所の便所で処理された。すなわち二一・二人につき一個の割合である」

(ロ) 家庭における衛生施設

Sichem の七哩北東 Tell en Nasbeh や Tirza において、大きな家が発掘された。

この発掘により、家の部屋割り、中庭の位置、入口の方向、マドの様子から、調理時に出る煙、町からくる埃、強い太陽光線に対する配慮がどのように施されていたのかよく判明する。各家の一階は、家庭用の貯蔵室、いやな臭の源である調理室となり、人々は涼を求め、煙から逃れるために屋上、涼み台にのぼった。パン焼は平らな石の上で暑い太陽熱を利⁽³⁾用し中庭で行われることが多かった。

中庭⁽¹⁾は部屋の東側に開け西風によって煙や悪臭を吹き去るようにしていた。Biblical Tzaphon では五台のパン焼が中庭ではなく、調理場で発掘されたがこの場合はむっとする臭いの中和に苦勞したことであろう。

(1) ホセア書十三・三「また窓から出て行く煙のようになる」

(2) 列王紀下、四・一〇「屋上に壁のある一つの小さいへやをつくり、そこに寝台と……」

士師記三・二四「高殿の戸に錠の……」

(3) 列王紀上、十九・六「焼石の上で焼いたパン一個と……」

(4) 前掲、古代イスラエル文化展、カタログ七四頁「古代イスラエル人の住居」

五、幼児の死亡とその原因

幼児の遺骨が多く発掘された。⁽¹⁾これは飢饉による栄養失調の結果ではない。また、フェニキヤに見られた Milk (モルク) 即ち Child Sacrifice によるものでもない。あくまでも助産婦の技術、新生児の取扱い方の幼稚なことに原因がある。それは、遺骨が壺⁽²⁾に入れられて個人の家⁽³⁾の床下から出ていることから祭事の犠牲としてではなく、幼児の病死に対する家族の悲しみを示している。

(1) 前掲、ノイフェルト、レポート四一九頁 Hygiene and Infant Mortality.

(2) 壺埋葬という。

(3) エゼキエル書十六・四「その生れた日に、へその緒は切られず、水で清められず、塩でこすられず、また布で包まれなかつた」

モレクについては、列王紀下(二三・一〇)エレミヤ記(三二・三五)と数多く記されており、カナン、フェニキヤ、エ

ジプト、バビロニア各地で長く続いた行事であった。それは、Votive Offering としてイスラエルにおいて禁止されていた。

六、テーブル・マナー、調理器具、食器、衣服

Talmud⁽¹⁾ その基となる Mishnah, Gemara に身体の清めについて詳しい定がある。食前、朝の祈りの前に手を洗うこと、日々の入浴については厳しく定められているが、一般の人々には個人用の食器が乏しくドンブリの中から各人がすくい出して食べ、食後、衣服の袖で口をぬぐっている。油のついた食器、Wool, Linen 製の衣服の洗濯に苦勞し、オリブ・オイル、ヤシの油、木灰、Natron (天然炭酸ソーダ) 塩、砂、香料入りの粘土を利用している。フタのない食器、洗った食器は伏せて収納しておくように注意していることも発掘から知られる。

たらい、足洗い、洗盤の利用が日常生活に多く、石灰石、アラバスター、ガラス製の化粧用パレット、懐中用の香水瓶、Jar が Lachish で発掘されている。

また、調理場の悪臭、集ってくる昆虫を防ぐために、香料が利用され、防臭剤、防虫剤として、香料を「いぶす」、香料を数種類 blend する技術、調剤の技術が薬剤師の仕事であった。

各都市で発見される焼香台(四〇—八〇㎝の高さ)は神殿(祭儀用)、一般の人々の多く集まる所、個人の家から発掘され、その利用状況が各方面にわたっていたことを示す。

香料の使用目的は Symbolic, Hypnotic, Hygienic の三つがある。祭儀上必要でない場所から出ることには不愉快な臭いや害虫との戦いに利用されたものである。

食事⁽⁴⁾については negativ な形で行届いた注意が示されているが、これは今日の食品衛生法第二章第五条の先駆と見ることが出来る。

(1) ヨブ記九・三〇「わたしは雪で身を洗い、灰汁で手を清めても」

(2) 列王紀下、二一・一三、「皿をぬぐい伏せるように……」

(3) 貴重な香料の栽培人、薬剤師は国王の特別の保護下におかれていた。(歴代志上四・二三)

(4) 士師記一三・四「すべて汚れたものを食べてはなりません」

申命記一四・二一「自然に死んだものを食べてはならない」

コサイ人への手紙「食物と飲み物につきたれにも批評されてはならない」

(5) 目のための緑色塗料(孔雀石の粉)用のパレットも見られる。医療上の目的で用いられた。Cosmetic Hygiene である。

七、宗教上の戒律と日常生活

「汝ら宜しく聖く (Qadosh) あるべし」「注意深いことは肉体的清潔を導く」「Physical な清潔は儀式の清純を導く」「清潔ということは神を崇うことに近いことである」(Mishnah) のように聖くあること、清潔を保つことは神より授かった律法、神との契約、信仰上の「おきて」という形をとりつつ、一般民衆の日常生活の上から彼らの健康を守り、家庭生活の純潔を維持し、部族の生命を保つために必要な衛生上の体験から生れた知恵であると考られる。一例をあげれば、香料の使用効果がこれをいぶした時の煙とその際に発する芳香の両者からくることをよく知っていたことである。香料をシンボルや心理的效果としてよりも防腐剤、防臭剤、殺虫剤、医療用として使用しているところに日常生活との深いつながりを示している。

結語

「支那医学史⁽¹⁾」を見ると、葛洪の神仙伝には「石灰を食し黄精を食して年三百三十八才」とある。不老長寿の神仙術を中心に中国医学は出発した。宋代に入り、巫医の力が強く、医学に性理の説が混入し「傷寒論」の精神を忘れて行った。

「吾国医学は四千年來、謬説が伝えられて今日に至り人を生かすことが出来ず」。

これに対して旧約聖書に示された律法は Law であるとともに、⁽²⁾ むろん Moral Manner としてイスラエル人の生活を支配して来た。この行きとどいた、そして具体的に合理的な生活規範は四千年にも亘って変ることなく、彼らの歴史の

進展を支えて来た。

この「聖」なるべしという信念は時代を超えて、イスラエルの国の運命とは関係なく民族の生命を維持しつづけた。

- (1) 陳邦賢著、山本成之助訳(大東出版社、昭和十五年) 五頁
- (2) 清、内科学綱要、序、(光緒三十四年)

“Hygienic Conditions in the Old Testament”

Yoshimi OZAWA

The Old Testament has been the canon (the sacred book) of the Jews, and what is most important in that book from the medical point of view is their idea of cleanliness. The people always kept not only themselves sanitary but also their surroundings. In their old cities we excavated their drainage and sewage works. They took every care in house-keeping and cooking. In temples, public places and houses of the rich, various kinds of incense were used. Some cosmetics were made from plants grown in various places of their land or imported from Southwest Arabia.

In ancient Israel, it was thought to be their duty to keep themselves clean for the protection of their race. They have been faithful to the “Torah” of the Old Testament.

正倉院文書より得たる人口ピラミッド

日 野 英 子

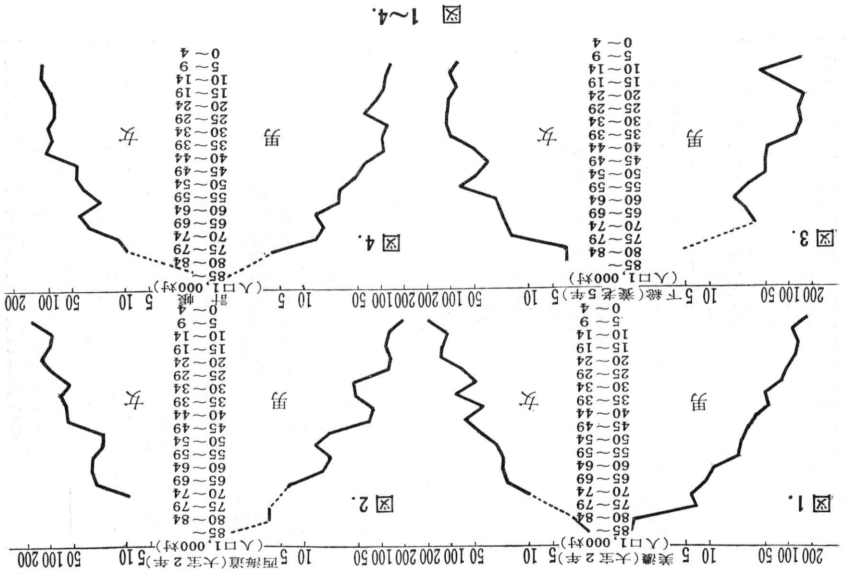
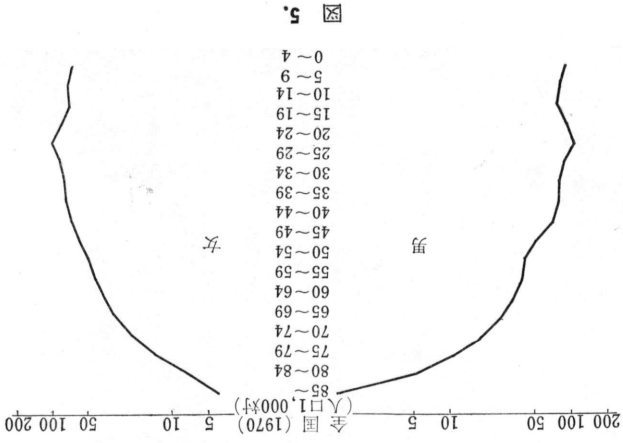
正倉院文書には大宝二年(A・D七〇二)の御野国味蜂間郡春部里戸籍(ヘフムダ)⁽¹⁾図1をはじめとして、諸国の戸籍が
 残されており、また計帳としても数多くの戸籍残簡がみられる。すなわち、"大宝二年御野国味蜂間郡春部里上政戸国造
 族石足戸口十三"⁽³⁾、他二七戸、"養老五年下総国葛鋸郡大島郷甲和里戸主孔王部小山戸"⁽⁴⁾、他六二戸の完全に戸の内容が記述
 された戸籍がある。また神亀(天平)にわたる間の戸の内容が明らかかな戸籍として、"山背国愛宕郡雲上里紙市戸主出雲臣
 冠戸"⁽⁵⁾をはじめとする三四戸が、諸国の計帳から得られる。これらの戸籍を地方別に、御野(美濃)、西海道、下総、計帳
 の四郡にわけ、それぞれを性、年令別に集計して表1を得た。御野は美濃国安八郡、西海道は豊前、豊後、筑前、下総は
 下総国西部を含んでいる。戸の人口が最も多いのは一二四、最も少いものは二で平均一四・二三であり、一戸あたり男六・
 七人、女七・五人であった。これから人口一〇〇〇対の性、年令階級別人口を求めると表1を得る。これによって人口ピ
 ラミッドを描くと、それぞれ図1~4となる。各図に共通する印象として、御野国⁽⁶⁾のものを除いては、幼年人口が他の
 年令階級に比べて比率が小さく図5に示した現代の人口ピラミッドに似かよった形状を示すことである。また幼年人口
 の性比を求めてみると図6のようなグラフが得られる。御野と西海道のものはA・D・七〇二の戸籍であり、下総および
 計帳のものはこれより二〇~四〇年後のものであるので単純に比較することは出来ないが、下総計帳の二〇才代の性比を
 大宝二年の〇~四才に比べてみるとほぼ同様の形状がみられ、いづれも大宝初年ごろにおいては、男より女の幼年人口が

表 1. 性, 年令別人口1000対率

	美濃(大宝2)		西海道(大宝2)		下総(養老5)		計会帳		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
0~4	180.8	149.6	180.6	184.9	147.2	82.2	136.0	114.1	199.6	166.3
5~9	114.7	112.4	121.5	97.2	51.9	101.9	128.7	117.1	129.2	130.4
10~14	138.0	129.7	111.1	103.4	90.9	85.5	110.3	93.1	145.9	153.5
15~19	124.4	132.4	125.0	131.7	155.8	108.6	84.6	69.1	138.2	141.4
20~24	100.1	70.7	118.1	94.0	134.2	111.8	62.5	78.1	119.5	97.3
25~29	84.5	48.1	52.1	56.4	147.2	111.8	121.3	99.1	109.2	79.9
30~34	51.5	88.8	55.6	75.2	129.9	98.7	106.6	87.1	83.9	104.9
35~39	57.3	38.1	76.4	62.7	64.9	49.3	110.3	105.1	82.7	64.9
40~44	36.9	65.3	69.4	59.6	51.9	32.9	51.5	42.0	54.3	66.6
45~49	29.2	43.5	20.8	21.9	51.9	46.3	47.8	42.0	40.1	48.1
50~54	25.3	27.2	13.9	21.9	30.3	78.9	29.4	33.0	29.1	41.7
55~59	23.3	22.7	24.3	28.2	21.6	26.3	29.4	21.0	28.4	28.4
60~64	10.7	23.5	17.4	28.2	30.3	23.0	14.7	39.0	17.4	31.9
65~69	7.8	19.9	6.9	25.1	38.9	19.7	18.4	30.0	15.5	26.7
70~74	5.8	9.9	—	9.4	—	16.4	14.7	12.0	6.4	13.3
75~79	6.8	—	3.5	—	4.3	3.3	3.7	9.0	3.7	2.3
80~84	0.9	2.7	3.4	—	—	3.2	—	6.0	1.2	3.5
85~	—	1.8	—	—	—	—	—	—	—	1.2



図 1.



少かった印象がみられ、それ以上の年令階級に対して正常の人口ピラミットを描かない。この理由を明らかに説明する史実は得られないが、続日本紀卷一によれば大宝元年には全国的な旱魃と蝗害に襲われており、また大宝二年四月には上野国に疫病流行が、九月には下総で飢饉がおこっており、このような農民の疲弊は乳幼児の健康に大きな影響をおよぼしたであろうことが推測される。また五年後の慶雲三々四年（A・D・七〇六）には再び全国にわたる大旱となりあわせて疫病がまん延、続日本紀卷三、十二月には是年、天下諸国疫疾、百姓多死、始作土牛大儺¹⁰とある。因みに陰陽式によれば陽明、美福、談天、安嘉、その他四門にそれぞれ青、赤、白、黒、黄の土牛を、大寒前日の夜半から立春前夜半まで立てて疫気をはらうとある。このような大流行に先んじて地方的な小流行が榮養の低下した小児を犯したのもあろうか。しかし女の人口の少いことを説明する資料としてはなお不足であり、またこの傾向は一〇一四才までみられる。さらに二〇一三才、三五一三九才では御野国の女が少い。天平勝宝二年の符に「奉勅、奴婢年卅已下十五已上、容貌端正々々」として諸国に仰下した記録が但馬国司解にみえ、後官職員令に「風諸氏。氏別貢女。皆限年三十以下十三以上。雖非氏名。欲自進仕者聽¹²」。の条がある。このようにして貢せられた女子は朝廷のみでなく、正倉院文書の治部省牒に残る記録から美濃国交易進上者として久須利女年二十三ら数名が東大寺につかわされているように都の周辺の国々から多くの男女が奴婢として都に移されているのがみられる。従っておそらくはこれ以前にも同様に朝廷や貴人の使用人として女子が進貢されたことが考えられ、都に近く一時は蘇我氏の私領であつた美濃国でも多くの若い女子が出京してその人口に影響したのではないかと考えられる。下総、西海道の女子人口は三〇一四才が男を下まわることが六〇才以上については殆ど認められない。

男子の人口構成は御野では年令に比例して減少し、正常のピラミッドを形成しているが、西海道や下総では年令層による人口の差が大である。計帳によるものは現代の釣鐘型にやや似ている。西海道、下総の五〇才代人口はいづれも他の年令層より著しく少く、計帳でもこの傾向は同様である。戸籍がつくられた大宝二年から遡ること三〇年の弘文元年（六七

二)は壬申の乱が起った年であるが、このとき大海人皇子は自分の封地である美濃国安八間郡(味蜂間郡)の兵三〇〇〇人を手勢として徴した⁽¹⁵⁾。一方朝廷軍は尾張と御野(美濃)から多くの人夫を徴して防備軍を編成して戦っている。乱の終

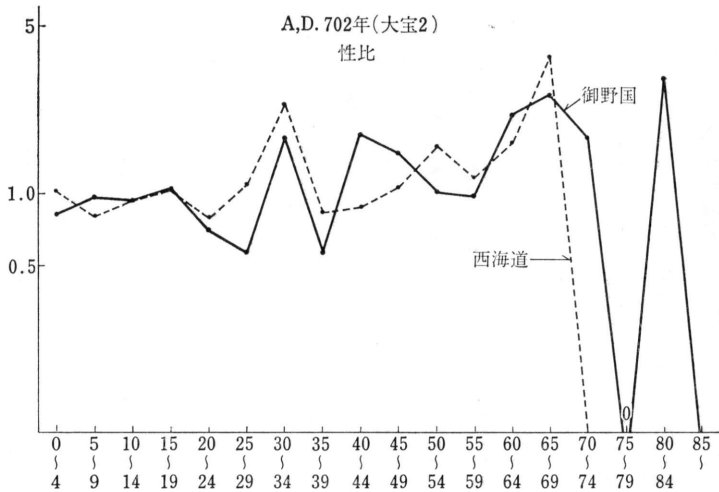


図 6.

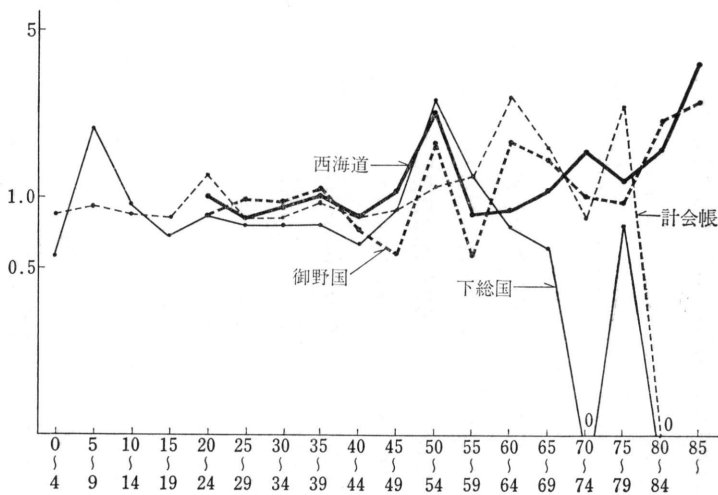


図 7. 細線 A. D. 721年(養老5)~A. D. 740(天平12) 性比
太線 A. D. 702年(大宝2) 性比

表 2. 老人人口の比較 (65才以上 1000対)

		計帳	御野	西海道	下総
奈良時代	男	36.77	21.38	13.89	43.29
	女	57.06	32.64	34.48	42.76
現代 (1969)	男	56.32	77.10	75.12	68.43
	女	69.14	87.61	85.15	86.68

計帳=全国
 御野=岐阜県
 西海道=福岡県, 大分県
 下総=千葉県, 茨城県の1969年人口を用いた。

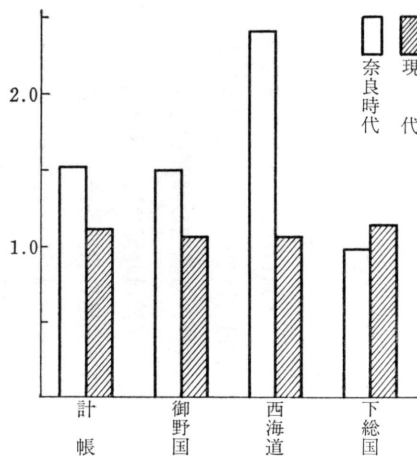


図 8. 老年人口の性比 (65才以上男 1 に対する女の割合)

結後は大津京から飛鳥浄御原宮への遷都が行われたために、これに従って移動した官奴や貴人の使用人も多かったものと考えられる。一方防人の徴発も A・D・六六三の新羅遠征の水軍として北九州の兵が用いられており、この敗戦により多数の死者を出している。正丁三に対して一、課口五に対して一を基準として徴兵が行われており大宝元年の全国軍団制度確立の際の兵員数は凡そ一四一五万といわれているが、東北地方と北九州を除いては次第にその要を減じ、天平一一年五月に東北、太宰府等の一部を除いて停止した。⁽¹⁸⁾ この間、兵士は旧令で二一六〇才、大宝元年八月の新令では二二五九才と定められたがこの以前から筑紫、長門、金田、新城等を築城し諸国の防人をして守備に当らせたが、⁽¹⁹⁾ のち諸国からの防人の徴用は防人自身の苦痛のみでなく、途次の諸国がこの人馬の供用に苦しみ、ために後には筑紫からの徴用にのみ変更されている。⁽²⁰⁾ このことが五〇〜六〇才台の男子人口の凹部に少なからぬ影響をおよぼしたことが考えられる。試み

に六五才以上の高令者のみをとってみると、御野国男二一・三八、女三二・六四(人口一〇〇〇対)西海道男一三・八九、女三四・四八、下総男四三・二九、女四二・七六、計帳男三六・七七、女五七・〇六である。

この比率から西海道の男が著しく低く計帳の女が最も高いことが判る。一九六九年の老年人口を地方を同じくして比較してみるとこのことはさらに明らかである。老年人口の性比を男一に對する女の割合で求めると凶八のように地方差が大でことに北九州地方での老年人口は性差の大きいことが知られ青壮年徴発の影響をこれにみとめざるを得ない。しかしながら七五才以上の高令者は男七・七五女六・九五でその後の時代に比べては少い比率ではないと思われる⁽²¹⁾。因みに昭和一〇年の七〇才以上全国率は男一〇・〇五女一六・五七で現代の男一六・八九女二五・七六に比べては意外の感をさえ抱く。当時の農耕技術では天災による驚威は大きく度々の飢饉に生活をおびやかされてはいるもの、賑給の法がしばしば行われ高令者への恤救に留意されており、かつ生活様式は未だ大らかで麦を中心とした雑穀のほか種々の農作物や山野自生植物や動物鳥類を食用に供しており乳牛の飼育も奨励されてかなりの栄養が摂取されていたようであるが。このことが後代に比べて比較的高い老人人口をみせているように思われる。奈良時代の食生活については稿を改めて報告する。

参考文献

- (1) 大日本古文書卷之一、一頁 東京帝大 富山房 東京、綜合日本史大系(二) 一八六頁
- (2) 大日本古文書卷之一、卷之一 同上
- (3) 同上 一頁
- (4) 同上 二一九頁
- (5) 同上 三三三頁
- (6) 国民衛生の動向 昭和四六年、厚生統計協会、
- (7) 増補六国史卷三、佐伯有義、朝日新聞社、東京
- (8) 同上 二八〇頁
- (9) 同上 三〇頁

- (10) 同上 五二頁
- (11) 正倉院文書東南院雜體附録九
- (12) 故実叢書、令義解校本卷二、一九五頁、吉川弘文館 東京
- (13) 大日本古文書卷三、三九三頁、正倉院文書東南院伍櫃五
- (14) 綜合日本史大系(二)、四〇頁、西岡虎之助、内外書籍、東京
- (15) 日本書紀卷二八
- (16) 日本書紀卷二八
- (17) (1)に同じ
- (18) 綜合日本史大系(二)、七八六頁
- (19) 日本書紀、卷二七
- (20) 正倉院文書周防国正税帳他
- (21) 尊卑分脈
- (22) 統日本紀卷二
- (23) 正倉院文書正集三十四他、
- (24) 風土記
- (25) 統日本紀卷第六、正倉院文書正集三十七淡路国正税帳、統日本紀卷第十一、田令第九

Population-Pyramid taken from Shosoin literature

Ehiko HINO

Shoyo-so-in Literature contains old volumes of the city register and KEI-CHO (census) of MINO country and those of many other counties and from those old volumes, we collected 230 complete books and drew a population-pyramid for both Sex and Age. We examined and made comparisons of those registered dividing them into seven groups according to region, which were Mino, Shimosa Sai-Dai-do, and other areas which had seemingly complete registers in the Jindi era (A.D. 724748).

(Department of of Physiology Defense Academy)

畠山義綱と医道伝受(二)

宮 本 義 己

一、義綱医道伝受の背景とその影響

義綱が一溪道三より医道奥儀を相伝した背景には種々の事由がある。まず最初に、伝受の重要な契機となった一つに、先代から受け継がれた医道に対する伝統的な、深い関心があげられよう。

能登守護畠山氏は、歴代、風流に興じ、文化に浅からぬ関心を示してきた。ことに義総の代、享祿・天文年間には、当代第一流の学識者三条西実隆と親交を保ち、また当世に著名な連歌師、宗祇門下の月村齋宗碩を能登に招聘している(『実隆公記』)。しかもそれに学ぶばかりでなく、彼自らも幾度となく歌会を催し、数多くの句を後世に伝えている。^{註一}

こうした面は、医道に関しても同様に顕著である。とくに歴代当主のうちでも、義統・義総の業績には、医道上かなり評価されるべきものがある。これらの業績の主な例だけを取りあげてみると以下のようである。たとえば、義統の代文明五年九月には、『重刊神心経』^(大日本史料第 八編之七所収)に、

^(文明五年)

成化九年癸巳孟冬、日本国畠山殿所^レ使副官人、信州隠士良心言。我国二百年前有^二兩名医^一。一為^二和介氏^一、一為^二丹

波氏^一。此二医専治^二癰疽・疔瘡・瘰癧等瘡^一、定^二八処灸法^一、甚有^二神効^一。

と見えるように、義統が朝鮮に使者「良心」を遣わし、彼の地に、我が国に当時二百年前より和氣・丹波の兩名門医家に

伝わる医道秘伝書、つまり癰疽・疔瘡・瘰癧など瘡瘍一般の疾病治療法である、癰疽八穴灸法^{註三}を伝送させている。この点

彼の疾病については、『八坂神社文書』所収永祿九年（推定）正月十一日付、山城祇園社宝寿院宛隱岐賢広書状によれば、「御屋形様江御祈禱御守・牛玉并御檀供致披露候。以御書雖可被仰出候上、自旧冬御煩付而、何も無其儀候」と記され、義綱が医道奥儀を相伝する以前、「旧冬」、すなわち永祿八年の冬より、長期疾病にかかっていた状況が知られる。なお、このときの疾病が何であったのか、これだけの記事では確証を得られない。しかし、疾病が長期的であったことを考慮するなら、前出第一号書状に「将亦、近日中気相煩候」とあるのと関連づけられ、中風を煩っていたのではなからうか、と推測されるのである。

このほかにも義綱は、医道伝受後であるが、前出第五号書状に記録されるような「瘡病相煩」^{註六}い、それが一日おきに発作を伴ってくるので、大いに苦しんでいるのがわかる。瘡病は、疔疾・痢病・痘疹などの諸疾とともに、この時代の医道では、小兒門（科）に類する疾病とされていた。^{註七}したがって義綱が、小兒方の樂方注釈書を一溪道三に依頼している（前出第八号書状）のは、彼がこうした小兒門に属する疾病に悩まされていたからであり、これの治癒を意図したからであろう。そして、こうした各種の疾病は、義綱医道伝受の必要な因となっていると見て差し支えあるまい。

さて、義綱の医道伝受は、これまでに証明してきたように、彼の疾病を回復に向わしめたこと、一溪道三との親密な交誼を結ぶための主たる基因となりえたことなどの事由により、能登追放後の彼の動静に、ことに戦略・政治上に於いても、微妙な影響を与えている。

能登追放後の義綱は、永祿十年（推定）四月二十二日付書状（前掲第一号）に「至坂本・上津候」と見えていること、姻戚である近江六角氏を頼っており、ここを居館としていたものと考えられる。しかも、同時に彼は、同年四月二十八日付書状（前掲第二号）に「諸国相調候条、近日令入国候」とあることに明らかとなり、入国に備えてその準備に余念がなかった。そして間もなく同年五月二十六日、一溪道三に「從国可申上候」（前掲第四号書状）と報じている。

しかし、これに記される「国」とは能登を指しているのか否か、この時期の義綱の行動について、現時点では他に全く史

料が見当たらず、判然としない。^{註八}ただこの点は、同書状の文頭に「就今度相煩、至于坂本、被相下候」とことわり書きがあり、近江坂本でないことは明確であって、あるいはこの「国」とは能登を指しているのかも知れない。かりに、これが義綱の一次的な能登入国によつたものと見做せるなら、義綱入国戦の動静に關し、これまでの研究（前掲『改訂石川県史』）に論ぜられなかった、新たな視点が開かれるという意味に於いて、注目に値する事項と言えよう。

こうした義綱の能登入国準備は、翌永禄十一年に至つて増々本格化し、入国のきざしはより光明なものとなる。このことは同年（永禄十一年）と推定される正月二十一日付、笠松但馬守宛義綱書状（これは飯川若葉守の副状（が付されるが、文面は同じ））に、「此度早速走参、馳走肝要候。前篇以来忠節、可相捨二段、不可遇分候」（『笠松文書』）と、義隆（義綱の嫡男）一味からの離反を促していること、さらに、同年（推定）三月十三日付、坪坂伯耆入道宛勝興寺顯榮書状に、上杉輝虎の「今度長尾出馬之意趣者、（射水郡）守山を責伏、能州之屋形を（義綱）入国させ可甲との凶にて候由、難測次第候」（『坪坂文書』）との援助を得ている模様にも明らかである。そしてまもなく、入国準備の完了に達し、機会熟した五月には、能登に向つて破竹の勢で進撃している状況が、次における同年（永禄十一年）五月六日付、一溪道三宛義綱書状に詳しく記されている。^{註十}

第九号（『自養録紙背文書』）

熊差^上飛脚^二候。仍以計策^二当月朔日、七尾之儀相破、同日玉尾城乗取、同三日、八代安芸入道相踏候、神明之地へ入城候。符中池田要害へハ、遊佐孫右衛門尉・神保周防守・其他馬廻之者共入置候。然者、從^二七尾^一國中へ通路、不^二相叶^一候。湯山之儀モ、無^二別儀^一候間、一國大略手ニ入分候。七尾之儀、以^二調略^一可^二申付^一候。七日城ニて敵相踏候条、三宅彦次郎從^二加州^一相働、去年拵候坪山、抱候。於^二始末^一者、可^二心易^一候。猶富来小次郎可^二申候。恐々謹言。

（永禄十一年）
五月六日 義綱（花押）

道三入道殿

この書状によると、義綱が悲願である入国の目的達成のため、軍勢を擁して能登に攻め入り、「以計策」って五月一日に七尾の山城を撃破し、ついで玉尾城を乗取り、同三日に七尾方の主将八代安芸入道（俊盛）を破って「神明之地へ入城」し、遊佐孫右衛門尉・神保周防守、その他の馬廻りの者どもを各々の占拠要害に配属して、七尾城を包囲するに至った経過を知ることができる。

さらに、このようにして一時「一国大略手ニ入分候」と、一溪道三に勝利報告をするに及んだ義綱の七尾進攻は、二ヵ月後の七月に至る時分には、状況が反転し、次の書状に見えるような、反撃の憂き目に見舞われる。

第十号（『自養録紙背文書』）

急度以三飛脚ニ申候。神明之地不慮、無是非二次第候。近日重而、計策子細有之条、三宅彦次郎・八代藤五郎申付、可及行覚悟候。於三時宜者、可被心安候。今度様子、具富来小次郎可申候。恐々謹言。

（永禄十一年）

七月六日

義綱（花押）

道三入道殿

右記の書状によれば、一旦は陥れた「神明之地」が「不慮」と見え、反撃により奪取されたこと、「可及行覚悟候」と記されて、義綱が再度この地を取り戻そうと策を労している事情がわかる。同時に彼は、「計策之子細有之」により、「可被心安候」と一溪道三に報じており、未だ余裕を残している様子も窺われる。

ところで義綱は、永禄十年の能登入国準備時期より同十一年五月以来の七尾進攻にかけて、右に証明してきたことで明らかだが、常にその折々の経過と計画を一溪道三に知らせている。がこれは、彼が絶えず中風・瘧疾などの疾病に襲われており、その治癒と体調の維持に相当の注意を払っていたからであろう。この点は彼の医道伝授の時期が、まさに当主（義綱）の能登追攻という結果を生んだ畠山氏内乱の最中であったこと。さらに、能登入国戦前後を通じ、彼が治療・薬

方の教示を一溪道三に依頼していることなどの諸事項に明白である。しかもこうしたこと、つまり義綱の体調の回復・維持は、彼の能登入国戦を一面においてより可能と成した、という意味で、戦略上重要な支点・要因をなすものであろう。こうして義綱は、入国の内戦も收拾し（尤も、管見の限り、この間つまり入国戦後半の事情を記録する史料が現存せず、明確にはされがたい）、能登入国を果たしたものでどうか定かでないが、註十一「医道伝受を基盤として築かれた親密な交誼を利用して、一溪道三に政治的な援助を求め、かつそれについて「仍江南・北并京都南方の様子、一々以三書注進、可悦入二候」（前掲第六号書状）とその援護を得ている。さらに、こうした義綱に対する一溪道三の政治的援助は次にあげる書状によっても明らかである。

第十一号（『自養録紙背文書』）

就三入国之儀（信長）、織田彈正忠江、為レ指上富来小次郎二候。於三其許一（胤盛）万端馳走、可レ為三祝著一候。猶胤盛可レ申候。恐々

謹言。

（永禄十二年）

卯月十四日

義胤（花押）

道三入道殿

右記の書状について、まず年号は、「入国之儀」・「織田彈正忠」（信長）とあり、かつ「義胤」と記されることから、永禄十二年のものと推定される。

これによると、能登入国に関して義綱（義胤）が、織田信長のもとに近臣の富来小次郎胤盛を派遣し、さらに同人を一溪道三に差し向けているのが知られる。恐らくこれは、七尾城奪回・当主の座回復という目的を秘めた能登入国について、義綱が、織田信長に軍事・政治上の援助を頼み請うたものであろう。すでに、前出第六・七号書状によっても触れてきたが、公方足利義昭を奉じ、上落して以後の信長は、室町幕府の再建を名分に美濃を足場として京畿に勢力を結集し、全国

制覇を意図して、着々とその地歩を堅めつつあり、まさに日の出の勢いであったと述べても過言にはあたらない情勢にあった。^{註十二}したがって、義綱が彼のもとに、こうした援護を請い願って走るのは、入国不成功の後だけに、一面において当然の帰結であったかも知れない。

そして、このような、義綱の信長に対する援護依頼に関しては、同じく右記の第十一号書状に「於_レ其許二万端馳走、可_レ為_レ祝著二候」とも見え、一溪道三が両者（義綱と信長）の間であって、種々の問題に活躍し、その便宜を計らっていた事情が窺われる。なおこの点は、義綱（義胤）が信長向け使者として、「為_レ指_上富来小次郎_一」した反面、「猶胤盛可_レ申候」

と、一溪道三に対し、信長へのそれと同一人である富来小次郎胤盛を派遣していること、などからも納得されよう。^{註十三}また、一溪道三がこうした役割を果たし得た根拠は、信長上洛に伴い、ただちにその祝儀のために参上していること、信長の二条城普請が始まるや、他の当世著名な文化人諸氏とともに、普請見舞いに出向していること、^{註十四}さらに、多少時期がずれるが、信長茶会に参席し、彼の公・私の事情につき詳しく知らされていること、^{註十五}などといった諸事実により確かめられるように、彼が、信長との親交を保持し、内・外状況に通じていた点に見出されるであろう。

ところで、ここで義綱（義胤）に対して果たされた、一溪道三の政治的援助につき、一溪道三の側面的を絞って考えてみるなら、右記してきたことの繰り返しになり兼ねないが、次のようなことが指摘できよう。

彼（一溪道三）は、当該時代切つての名医として、疾病治療・医道普及を目的とし、あるいは当世著名な文化人として茶の湯を媒介に、信長以下有力諸武将との親交を有し（拙稿「曲直綱一溪道三と茶道茶」^{道徳誌第三十五卷八・九十号}）、居住地京畿はもとより、地方にも頻繁に往来しているから、^{註十六}これら中央・地方の諸武将の内情に少なからず通じていたと推測できる。それであるから、彼が義綱に対し、必要に応じて自らの見聞する事柄・近状を報告できたのであろうし、また当世最大の实力者信長への仲介も果たすものではなからうか。この時代にあつては、僧侶や文化人が使者となり、政治・軍事上の顧問的存在となつて活躍する例は、少なからず見受けられる現象である。^{註十七}この意味で、彼の義綱に対する政治的斡旋、あるいは援助もさほど不自然な

もの、独特なものではあるまい。むしろ一般的事象であろう。ただ、こうした一溪道三の事例を見る限り、医師も、これら僧侶・文化人の例に洩れるものではなく、政治・外交上の間接的助力者となっている様子が明らかめられよう。

註一

義総の文化的業績（文芸）については、小論のはじめに若干触れてきたので明らかなが、米原正義氏の論稿『能登畠山氏の文芸』

一・二（国学院雑誌第六十六巻第一・二・三号）に詳しい記載があるので詳細は氏の論稿を参照されたい。

註二

朝鮮に派遣された義統の使者良心、及び八穴灸法に関しては『皇国名医伝前編』に、「良心 信濃人。父秦久秋、為左近将監。

良心善詞藻、又知三医方。文明五年、受畠山義統命赴朝鮮、（和氣）伝下和・丹（丹波）二氏所（丹波）会用三齋疽八穴灸法、及神応経於彼、而還」と記されており、その人物・業績の一端を窺うことができる。

註三

齋疽八穴灸法の朝鮮伝播の事実は、すでに、富士川游博士が『日本医学史』（前出）に於いて若干触れられた例がある。

註四

『寛政重修諸家譜』所載「竹田家譜」によれば、定珪について「亀鶴丸・法眼・法印・号清誉又号瑞竹」とあり、「天文年中光源院義輝良医五人を撰びて、其次第を定めらる。定珪第二に列す」と記される。しかし、「治部卿」の記載がなく、決定しがたいが、『実隆公記』に見える活躍の時期が定珪のそれに一致すること、同時期に活躍した竹田家の人物に、彼を除いた他に該当者が存在しないこと、などにより「治部卿」とあるのは、定珪のことと推定した。

註五

義綱の疾病である「中氣」について、小論に中風と解釈したのは、この時期の彼（義綱）の年齢が三十歳程度であった点を考慮するならば、異論の余地がないではないが、長期病に及んだ事実を踏まえて捉えた場合、妥当と考えられる。

註六

瘧病は、重ねて言及するまでもないが、「一日ハサメニ相発」とあることに明白なように、疫病であって現代におけるマラリア疾患のことであろう。

註七

富士川游博士『日本医学史』（前出）に、これに関する記載あり。

註八

永禄十年時の義綱能登入国準備の状況については、永禄十年（推定）二月十日付の上杉輝虎宛畠山徳祐（義統）書状に、「仍入国近々ニ候間、定而、可レ為御満足ニ候。弥於、向後ニ者、御入魂可レ為本望ニ候」（『伊佐早文書』）と見え、上杉輝虎との親交を再確認していること、また、同年二月二十八日付、畠山修理大夫宛本願寺頭如書状に、「芳札遂ニ披覧ニ候。仍就ニ御入国ノ儀、加州輩馳走之儀、示給候。他家助言之段、堅加ニ斟酌ニ候。不相ニ限此儀ニ上者、更以、非ニ疎意ニ之通、御分別所ニ希候」（『頭知上』）とあり、義綱が能登入国に際し、本願寺頭如に加賀の門徒の助力を求めたのを謝絶されていることに明らかである。さらに、入国準備時期は、同年（推定）四月二十四日付の栗棘庵宛熊来金左衛門尉統兼書状に、「仍義綱帰国ノ儀、来月十日ニ相定候」、「尚々、来月十日帰国必定候」（『栗棘庵文書』）と記され、帰国の期日が、五月十日に決定されていたことが確かめられる。しかもこの点は、同年五月二十六日付、義綱書状（前掲第四号）に「国」と見える義綱能登帰国の可否に関し、可能性に対する傍証となり得るかも知れない。

註九

義隆擁立については、小論では一応従来の説（『改訂石川県史』）に従ったが、前節註三に指摘してきたように、彼の存在に疑問があり、明確でない。

註十

この書状は、後に掲載する同年七月六日付、一溪道三宛義綱書状とともに、すでに『加能古文書』（大日本史料第十編之一）及び『改訂石川県史』（前出）において、編者日置氏が紹介し、引用しているのでまずその旨、判っておきたい。

註十一

義綱能登入国戦後の模様は、永禄十一年十二月五日付、林源右衛門尉宛義胤（義綱）知行宛行状（『林文書』）に「今度忠節無ニ比類ニ候。就レ其浦上村為ニ替地ニ、合鹿之内菅田彈正忠分一円、諸役皆免ニ宛行候」と記され、義綱が論功行賞している事実から、一時的入国成功が窺われる。しかし、彼が七尾に入城したものが否か、他に関係史料が見当たらず、決定しがたい。

註十二

永禄十二年代の信長は、將軍（義昭）居城である二条城を改築し（『信長公記』・『言継卿記』）、また「天下布武」の朱印（勢陽五箇八度会郡十四所取、伊勢朝熊三村宛禁制写）を用いて、その基本方針を明らかにしている。

註十三

一 溪道三の信長上洛見舞は、『甫菴信長記』永禄十一年九月二十八日条に、

(上略) 信長卿(東寺)東福寺ニ著セ給ヒケレバ (中略) 頓テ当時連歌ノ宗匠紹巴并昌叱・心前、医師ニハ、半井驢庵并雖知苦院道三、其
他、諸道名ヲ得タル者共 (下略)

と記されることに明らかである。

註十四

一 溪道三の二条城普請見舞は、『言繼卿記』永祿十二年二月十九日条に、「御城之普請、織田見舞之。西南石蔵、大概出来。烏丸(光康)
・光宣(曲直瀬)・巻(里村)父子・医者道三・紹巴以下、數多見舞也」と見えていることにより、確認される。

註十五

『翠竹院道三之手簡』(曲直瀬家)に、一溪道三がほりけ宛に信長の上洛期日及び叙位任官、妹お犬の嫁入などにつき、詳しく報
じている点に窺える。

註十六

一 溪道三の下向については、畿内の近江坂本 (『言繼卿記』) のほか、遠国では、阿波 (『曲直瀬家文書』・安芸(小乗覚自養録紙背)
などにも及んでいる。

註十七

僧侶・文化人の政治的活躍は、聖護院門跡の芸・雲講和幹旋の例(毛利家文書三三八号、吉川家文書五六七・八号)など、多数の事例により明らかである。

四、むすび

畠山義綱の医道奥儀伝受について、伝受の事実、伝受書の内容、及び伝受の背景とそれの影響の順で以上に証明し、考
察してきたのであるが、ここに、義綱医道奥儀の伝受を、明確な歴史事例と見做した上で、その背景と影響につき、もう
一度簡潔に纏めてみることにしたい。

まず伝受の背景は、第一に、義統・義総の例に明らかに示されるとおり、能登畠山氏歴代の当主が文化を尊び、医道に
かなり深い関心を寄せてきていたので、義綱がその伝統に倣ったものと考えられること。第二は、畠山氏内乱の渦中で、
長期的煩悩 (中風) にあった義綱が、疾病治癒を意図した結果であると考えられるのである。

次に、伝受の影響については、一、伝授者曲直瀬一溪道三との親密な交誼を保持し得たこと、二、伝受書に習った医療の実践により、諸種の疾病が回復に向ったことなどの伝受の結果生じた事由により、三、能登追放後、義綱が悲願としてきた入国戦が可能となったこと、四、一溪道三に対し、義綱が入国の目的遂行のために、近江の南・北及び京都南方の状況についての詳しい報告、織田信長との仲介など軍事・政治上の援助を得ることができたこと、などの点に顕著に表われていると指摘できよう。

なお、小論で取りあげてきた、医道奥儀相伝を基礎とする義綱と一溪道三交渉の期間が、永禄九年頃より同十二年にかけてのきわめて限定された範囲でしか捉えられなかったのは、この期間の前後に於いて、両者の交渉を示す史料が、現在では全く見当たらず、如何ようにも推測しがたい故である。しかし、何づれにせよ、これに取りあげた時期が、義綱にとっては能登守護畠山氏の伝統を維持し、当主の地位を奪回すべく狂奔する時期に該当し、一溪道三に至っては、織田信長をかかめとして、当世有数の戦国武将との交友を、より一層緊密化していく時期に相当するということ意味において、有意義であると考えられる。

付記、小論作成に際し、貴重な史料の閲覧を許可された、慶応義塾大学図書館に対し、深謝の意を表しておきたい。

昭和四十七年九月十九日稿

原著

「鶴齋遺稿」について(六)

日本医学雑誌・第十九卷
第一号・昭和四十八年三月

昭和四十七年十二月二十八日受付

大鳥蘭三郎

五節

雲の上昼の明りのひかりにそ

あまつ乙女の姿見えけり

いその神ふりし吉野⁽²⁾宮ふりに

今も少女のそてかへすらん

霜夜月

しもさえて落葉さへてる山島の

そはの立木に月そかたむく

高砂の尾上の月や出ぬらん

ひかりもさゆるふかき夜の霜

老人述懐

いくとしか越の白山身にそしる

たえずかしらに雪のつもれば

(215)

(214)

(213)

(212)

(211)

老の身の寝られぬままに数ふれハ

のこりし友のあるそ少き

霧帰阜

おのか栖やとりなれはか真霧の

夕へはかへる浅沢のみつ

松葉処々

とりくくに朝気の烟りそへんとや

松の落葉をひくふ里人

神楽

しもやおく里の神楽のかみさひて

あかほしうたふ声の寒けさ

神のますもりの宮つこ庭火たけ

とる神葉の光りますますまて

(220)

(219)

(218)

(217)

(216)

松辺千鳥

みちのくのすゑの松山風吹は

(221)

夕浪千鳥たちこゑて鳴

薄氷

行水の早き流れに月と日も

(222)

しはしは留る薄氷かな

鳩

にほとりの玉藻の床のうき枕

(223)

とつる氷にまよふかよひち

鳩の海のはの浮巢のよるかたも

(224)

今朝しもいかに氷とつらん

冬植物

落葉しておなしこすゑの冬木立

(225)

まつより外にこと色もなし

三輪の山おくしも染つ松立る

(226)

かとは秋の色の色のこりけり

嵐傷夢

夢の中にわかかへりぬるうれしさを

(227)

しらすや夜のあらし吹らん

心なくいかに嵐のうきおちて

(228)

みはてぬ夢をおとろかしぬる

冬地儀

日あたりの小田のあせ路霜くつれ

(229)

はる待小草あらはれにけり

やきすてし萩野原も春近く

(230)

なればか今朝は霞立けり

炉辺閑談

老かとちむかふ埋火かきおこし

(231)

かたるもおなしむかしなりけり

むつかたりなえもやしなむ埋火の

(232)

柴折くへよまとふ友とち

年暮竹ある家

行年もはやくれ竹のひとよおは

(233)

こゆとも千世の色はかはらし

寝覚によめる

いかはかり深くも霜のおきぬらん

(234)

今朝のねさめのわきて寒けき

冬動物

さゝかにのいとなかき世になからへて
(235)

をきのかれ葉の下にや住らむ

寒き夜に梢のましら木つたひて
(236)

ともよひかわす声あはれなり

初雪

村しくれふりにしかたをなかわれは
(237)

ゆきになりぬるこしの遠山

有明の月かとおおもふしろたへは
(238)

よの間の雪のふりや初けん

冬旅を思ふといふことを

旅そうし佐野(の)わたりのゆきよりも
(239)

いかはかりなるむさし野(の)原

たひの友さきたつ我をしたふらん
(240)

雪にのこせし駒の足跡

湖雪

降雪にすはの海面見わたせは
(241)

みつより外にこといろもなし

さゝ波の色さへわかすふりしきる

志賀の浦わの雪の暮夕
(242)

如蘭大人よりちひさき瓶に

梅の木うゑて給ひければ

梅の花ひとりなかくておきもせず
(243)

ねなから贈る香こそ深けれ

早梅をくりて人のもとへ

春まては花待とほに思ふらん
(244)

とはかり手折梅の一枝

惜除夜

明日よりは千年のはるといはゝめと
(245)

ことしのけふをおしまれにけり

早梅を人のもとより贈りて返し

千代までも匂ん宿となりぬへし
(246)

君か手折し梅のかほりに

きみなくはいかてか千代の春を見む
(247)

としのこなたに匂ふ梅枝

歳暮

月も日もふる野の沢のわすれ水
(248)

なに今さらに年をおしまん

何にしかも暮行としの色を見ん
(249)

千代もかはらぬ黒髪の山

落葉降風

山風に散しもみちを吹上て

ふたたひにほふ木々の紅

時雨雲

村雲の立野の山のやまのはを

いてししくれは何地行らん

冬田霜

氷なし水田にかけし棚はしの

路たゆるまで霜そ置ける

深山木枯

大比叡や吹木からしに雲はれて

都のかたに時雨てそゆく

冬月冴

遠近のいろさへわかぬゆきの夜に

月はれわたるかけそさむけき

野寒草

春日野の野守の庵のいたひさし

霜をよきてや残る冬草

(255)

(254)

(253)

(252)

(251)

(250)

関路千鳥

月影も清見か関の夜ふかきに

千鳥ならてはかよふ音もなし

野鷹狩

はく鷹のかりちの小野の夕嵐

つはさもたわに吹なひきけり

由庵か我宿の梅を見て年のうちに

おもひしをれはなとあるかへし

きくの葉の深き色香は梅よりも

としのこなたに春をこそ知れ

又紅梅を見て君もうつすつら

なりとあるかへし

うす色をこきそと君か思ふから

くれなる深く梅を見るらむ

冬月冴

影うつす月の鏡となる水は

さゆる氷をみかくとそ見る

年内立春

住吉のきしの此方に春立て

(261)

(260)

(259)

(258)

(257)

(256)

すきゆく年のみちわすれ草

としの内に春をむかへし心から

霞ぬそらもかすむとそみる

遠千鳥

都にて名のみに聞しみち奥の

のたの玉川千鳥鳴なり

海冬月

越の海や寒き夜あらし吹からに

なみにみたるゝ冬の夜月

名所千鳥

冴る夜にふけるの浦の風はやみ

吹みたされてむら千鳥なく

江千鳥

難波江にしほみちくれば鳴千鳥

ともよひつれていつち行らむ

江水鳥

詫しきは難波細江の水鳥の

こほりをわけてあざりする声

朝初雪

(267)

(266)

(265)

(264)

(263)

(262)

初雪のふりにしものを上る日の

てりなは(この字賑か)けなん雲おほへかし

風払松雪

白波の波にまかへるすゑのまつ

こえぬと見せて払ふ山風

依雪待人

花と見て雪にとび来ん人もかな

きえなはなとて花と見るへき

ふり埋むこしの笹屋の詫しきに

雪かきわけて友を待なり

炭竈烟細

なすわさの心細くも見ゆるかな

小野(の)ゝ炭かま烟りたえさす

炭かまのけむりは細く立にけり

大原山に深雪ふるらし

里炭竈

里人も春ちかしとやいそくらむ

けむりにきはふ小野の炭竈

こりつみしまきの炭かまたかぬ日は

(274)

(273)

(272)

(271)

(270)

(269)

(268)

(275)

白雲たゆる大原の山

歳暮忙

深山人も春のまうけといそくらん

まつ引つれて六路出にけり

世の人は暮行としもをしますや

なとさはかりに春を待らん

雪の木にかゝれるを

雪深きそのいろとしも分ぬまで

枝もたわゝにふれる白樫シデ

つもりては花とし見へぬ木々もなし

ふるかひあれや我宿の雪

姫子松ふりつむゆきをいたゝけは

おいにけらしも人もこそ見め

除夜

さらてたに年の別の悲しきに

ますくをしきけふの暮かな

今さらにふる年月はをしむまし

あすより千代の春と思へは

海辺近き所に住居しける

頃としの内に春立ければ

としの内に春や来ぬらん海原は

さはるくまなくかすみ棚引

同じ所の除夜

今夜漕あまの小舟にことつてん

なみ路を早く春は来よかし

同じ所の元日

横雲のにほひしよりは代の春に

なるかの海の波の長閑さ

としの暮に

数ふれば八十しにたらぬ五年の

あすは春こそむかふへきなれ

試筆

初日影ひかりににほふ老の波

たちかへる花の春にあひにけり

梅の木うゑける日よめる

鶯にうめうゑにきとかたるなよ

きかは来鳴て花を散さん

春色従東来

(283)

(284)

(285)

(286)

(287)

(288)

あつま路の名こそその関や明ぬらん

(289)

霞とともに春は来にけり

鶉か鳴あつまに立し春の色を

(290)

みやこの人もまちて見るらん

春雪似花

立陽川かすみに匂ふ春の雪の

(291)

花や咲ぬとみよし野の山

春風の立にし日よりよし野山

(292)

ゆきふることに花かとそ見る

紙絵桜あまたさけり此所

かしこうくひす鳴かた

はるなれやうめさくりの遠近に

(293)

かたらひかはす鶯の声

つこもりの日春立けるに雪

ふりたけ

此あさけ立来る春のつとなれや

(294)

はなとみせつゝふれるしら雪

年の内春立ければ

いろき立春そうれしき老ぬとて

(295)

よそにはきかぬころならひに

子日

子日する春日の野辺を行人は

(296)

松にひかれて千代を経ぬへし

住吉のきしの姫まつ千代ふるは

子の日に人の引やのこせる

若菜

鶯の鳴つる野辺は雪なから

(298)

こゑをしるへにわかなつまゝし

春風先開苑中梅

めつらしく風こそかをれ宿の梅

(299)

なへての花の春のはしめに

此やとにはるの初風かをるなり

(300)

千代もわすれす咲や此花

橋霞

大空もかすみわたりし水の上に

(301)

かみやかけけん天の橋立

水郷霞

やとかりしかたもわかれすうち霞

(302)

あまの河原の春のあけほの

あさみとり摘つゝ行はなつみ川

(303)

過こしかたの打かすみけり

野若草

春はまた浅沢小野のわか草は

尽しはかりにみとりしてけり

(304)

余寒風

梅枝をさそふ春風さむくとも

袖を吹せて香をやしめまし

(305)

春なから比叡山かせのさむけさは

三年の深雪とけすやありけん

(306)

人家うめの木盛りなるよし

ひとにかたるとて

梅か香をしめしたもとをとつと立ぬ

(307)

ひとやをしむと折らて来にけり

若狭人の八十の賀に

老もせず若狭の国おふる身は

(308)

ちよの後瀬の山までを見む

海辺立春

吹風ののとけくもあるか海原は

なみとともにそ春は立ぬる

竹籬鶯

しめおきし竹の籬のうくひすは

契りたかへぬ千代のはつ声

鶯よ余所にな鳴そ宿かさん

にはの垣ほにおふる呉竹

(311)

水辺柳

春風は水のそこにも吹ぬらん

うつる柳の影そみたるゝ

河水にうつるみとりは佐保姫の

(313)

かさしとなせし春の柳か

夜風告梅

やみの夜も風てふものゝあれはこそ

(314)

梅のありかをかをりにそ知る

梅の花とめつゝ夜半に行人は

(315)

かせのかをりに立とまるらん

関春曙

曙にかすみこめたる不破の関

(316)

(309)

おほろに残る有明の月

霞中鶯

春霞かすみて見ゆる青柳に

心のとけき鶯の声

田家春雨

しつの男はふる春雨をまちえてや

我家もしらすかへすあら小田

苗代

此ころは岩間の水もぬるむなり

(下の句欠)

夏草

いとしく茂りて見ゆる夏草は

君かさかえをならひけるかも

植置し小松にならふなつ草は

千代も経ぬへきみとりにそ見ゆ

夏夜惜月

涼しさにいねやうて見るねやの戸に

かたむく月ををしむ短夜

夏夜翫月

はる秋にすみゆく夜半の月よりも

なつは涼しとわきて見るかな

鶯(鶯か)

天津空ほしの林にさく花の

散かと思れはほたるなりけり

蝉

世の中をうちなけきてか空蝉は

こゑのかきりに鳴くらすらむ

閑居雨

ふる雨の音もきこへぬ草の戸に

露をむすへるさゝかにの糸

不逢恋

いかにせん身はかた糸の結ふれ

いつ逢ふへくもしられさりしを

氷室

人伝に聞たに夏の涼しきは

ひむろの山の夕くれの頃

松下追涼

夕くれにまつの木かけをとめくれは

(323)

(324)

(325)

(326)

(327)

(328)

(329)

たもと涼しくかをる夕風

谷川のきしにしけれる松かけに

しはし立より水むすはゝや

夏祝

御稜河つもりし年を流しやりて

ちとせの秋を君そむかへむ

湖辺鶯^(鶯か)

鳴の海こき行舟のかゝりかと

見えしハきしのほたるなりけり

馴不逢恋

おもふとはさすかにいはぬ中なれと

なるゝにつけてつゝましきかな

松下追涼

たちならふ松をつくしてふく風に

秋おもほゆる夕涼かな

流水漫雲根

おく山に夕立すらし谷川の

水まさりつつ越るいははし

よしの川いはまをわけて流来し

(330)

(331)

(332)

(333)

(334)

(335)

(336)

きしうつ波の花さきにけり

さしかさす扇に秋のかよふらむ

手ならずことに風のすゝしさ

諸人の心にならずあふきには

よつのときなる風かよふなり

琴

山の辺にひとり調ふる琴の音は

まつかせならて何かよふへき

夏懐旧

遠からぬむかししのひてうつ蟬は

いかにこひしき音をし鳴らん

久待七夕

七夕は今宵あふせとちきり置て

あまの河原に幾夜待けん

去年の秋わかれしよりそ久かたの

天の河原に立わひぬらん

納涼到曉

とてもかくねられぬまゝにはしるして

鶉の鳴音をまちて聞かまし

(337)

(338)

(339)

(340)

(341)

(342)

(343)

御萩

さらてたに老ては惜むとし月を
世のならはしに夏移して

(344)

夏もはや今夜なこりに大ぬさを
とりあへぬまに秋は来にけり

(345)

蝦夷へ行人に

東路はふたらのやまの神ませは
えそしらなみのたちさほくへき

(346)

たちさはき蝦夷の千嶋に寄浪の
とく吹かへせ(二字脱)の浜風

(347)

浄侶夕帰

有為の世はけふはかりかはましはとり
いさかへりなん夕暮の空

(348)

海辺秋来

和田の原なみ打寄る音かへて
あき来にけりと驚かしぬる

(349)

寄月恨恋

小暗くは忍ふる人もとひ来なん
つらきは月の光りなりけり

(350)

旅中夢

古郷を思ひねに見しくさまくら
ゆめ路はちかきものにそありける

(351)

七夕月

夕月を舟とやなして彦ほしは
あまの河瀬を今宵こゆらむ

(352)

七夕河

一年にひとたひこゆるあまの川
あきはたつとも波なたせそ

(353)

七夕草

織女のかさしの花の花かつら
露の玉する秋のな草

(354)

七夕鳥

いつの代にちきり初けむかさき
はし打渡すあまの河水

(355)

七夕衣

棚機に花そめころもえもかさし
うつろひやすき色とおもへは

(356)

七夕別

思ふことかたりもはてし七夕の

としに一夜の今朝のわかれば

七夕祝

千早ふる神のちかひし契りとて

ちとせかわらぬ星合のそら

金

陸奥にさくてふ花をみつきて

おほうちやまや光り増らむ

野草留人

秋ちかく千種はな咲野を分て

ゆくも忘れてとまる旅人

ひめ百合のさきにし野間に暇寝して

こよひはなれん床なつのはな

初秋萩

こゝろなくうゑにし庭の萩の葉に

今朝来にけりて秋風そふく

月前萩

風もなく夜深き月の影すめり

おきの葉ことに結ふしら露

(357)

萩音高

むさし野の千草のなかを分行は

声うちさわく萩の上かせ

文月に鶯を聞て

夏過てあき来にけれとうくひすは

はなをわすれす今も鳴けり

權
(あさがほ)

寢覚して見ればこそあれ曙に

つゆを結ひて匂ふあさかほ

夜萩

夜半のはきその色としもわかぬなり

しか鳴かたや盛りなるらむ

から衣夜のにしきを着人は

真野のはき原わけて来ぬらむ

閑居菘
(まきりぎりす)

わかことく悲しきものかきりくす

むくらの宿に夜たく鳴なり

人も来ぬ蓬か宿はきりくす

なかく声のなくさまれけり

(363)

(362)

(361)

(360)

(359)

(358)

(370)

(369)

(368)

(367)

(366)

(365)

(364)

萩露重

萩か枝に置しら露の色染て

(371)

おれぬはかりに花咲にけり

朝霧のたえにしあとの萩の花

(372)

枝もたはゝに露そ置けり

対水待月

よひくゝに水を鏡とてる月の

(373)

出るそおそき遠の山端

閑待月

つれくゝと秋のあはれを知る身には

(374)

月まつならてなすわさもなし

花もちり山ほとゝきす声たえぬ

(375)

しつかに待ん秋の夜の月

野花妨路

秋の野の千種おしなみさく花に

(376)

めてつゝ行は過もやられす

女郎花はな咲かたにたはれるて

(377)

けふもむなしく野辺に暮しぬ

浦月

朝熊山くもより出し月影を

(378)

ふたみの浦の波間にそ見る

見恋

いたつらに立向ひつゝ日はくれぬ

(379)

ひと目の関のしけき守りに

薄暮松風

鳥の音もたへて淋しきゆふ暮に

(380)

こととふものは峰のまつ風

夕くれは淋しきことそ知られける

(381)

あきの調への通ふまつかせ

雨後眺望

村雨のはれにし後はずゆにくて

(382)

いろ増りぬるすみよしの松

雨雲をひえの山かせふきかへし

(383)

ゆふ日そ渡る瀬田の長はし

虫を聞て

寢覚してきけはこそあれさまゝくに

(384)

あきのあはれをつくる虫の音

望月

こよひしも月の桂のさかりにや
ひかりも匂ふ三津のうら波 (385)

山家

いたつらに何くらへぬらんとはるへき (386)

しるしともなるかとの杉むら

水中月

ひさこもてくまはくみてんそ清き
せかるの水にうかふ月影 (387)

眺望

東人のさちとやいはん竹なから
あした夕まにむかふふしのね (388)

古宅薄

野分して浮世のさかを見つるかな
すゝき折しく庭の垣ほに (389)

清風隔世塵

我宿の軒のまつかせはけしさに
うき世のちりをみせずそありける (390)

秋懐旧

ふりにけるとしのなけきに似たるかな (391)

猶すゝむしのこゑたてゝなく
去年のあき散にし萩のふる枝には
また袖ぬらす露の置らん (392)

名所月

人とはゝ如何にこたへし秋の夜の
すまやあかしの月の光りを (393)

十寸鏡田ことの水のてらせるは
おはすてやまの月の影かも (394)

秋風催興

あらけなく峰より落す秋風に
谷の紅葉の木末散りけり (395)

此頃は尾花かすゑをふくかせに
更行あきの色見えにけり (396)

籠中の虫を

籠のうちに何松むしの声立て
あきの夜なかく鳴あかすらん (387)

初昇月

ふしのねはまた夕影もくれぬまに
筑波の山に月は出けり (398)

松原月

松原より千とにくたくくる月見れば

(399)

あきのおもひのかすそかさぬる

河辺月

波のはなざくとやいはんよしの川

(400)

きしのみなはに移る月かけ

停出月

小夜なかは月こそことにさやかなれ

(401)

こゝろにかゝる山の端もなし

野径月

むさし野々すゑ野に行て尋見む

(402)

月の出入くさもありやと

古郷月

古郷にかへりて見れば友もなし

(403)

つきのみすみててらす池水

旅宿月

たひころも路はるはると来つるかも

(404)

夜ことに月のてり増りけり

月似鏡

くもりなき月のかゝのてらす夜は

(405)

むかふも老のすかたはつかし

月慰心

深山辺の都にまさる慰は

(406)

心とともにすめる月かけ

袖上月

はらへともあとより影はやとりけり

(407)

あきの夜ふかき袖上の月

古宮月

まきもくのたまきの宮のふることを

(408)

月よりほかに誰か知るへき

秋山月

志賀山をこえつゝ行はかゝみ山

(409)

かけてさやけき秋の夜の月

(まきり)
霧間月

あきゝりをたへく風の吹分て

(410)

月影うつる宇治の川波

雨後月

村雨ははれて明石の月きよみ

(411)

うきくも渡る須磨のうら波

月前鶴

和歌のうらなきさの水に群居つゝ

月の夜すがらあさる友鶴

(412)

海辺秋夕

みるからに秋のくれこそ淋しけれ

きり立のほるしほかまのうら

難波潟汀のあしのうら枯も

ゆふへ淋しくあき風そふく

(413)

毎夜待月

初月の出にし夜よりみな人は

あきの最中の光りをそまつ

(415)

菊花第一

咲しよりうつろふまでも色香よき

きくには何の花を類へむ

(416)

年々栽菊

いく秋もあかぬものかはとしことに

うゑ添へて見む菊の色香は

(417)

菊送多秋

百草の花咲のちにきくなくは

何にめてつゝ秋を重む

(418)

菊花臨水

折て見む水にうつれるきくの花

かこそとまらめ袖ぬれぬとも

(419)

菊花色々

白露はおけともそのゝ菊のはな

おのかさま／＼いろ見えにけり

(420)

对菊待人

君かためうゑにし庭のきくの花

いまさきにけり来ても見ませや

(421)

籬菊如雪

ゆきと見し卵花垣根あきはまた

ふたゝひ匂ふしら菊の花

(422)

月前折菊

露結ふきくにやとれる月影を

手折てそ見む妹かつとにと

(423)

菊花久薰

長月の名にならひてやきくの花

(424)

いろ香もふかく咲匂ひけり

古郷菊

住すてゝ雨にそぬるゝきくのはな

見る人もなきあたら色香を

秋ことにまかきの菊のさきにけり

いかなる人かむかし住けむ

紅葉透松

夕嵐まつをしけみをふくことに

木の間の紅葉あらはれにけり

聞鹿

高砂の尾上の風に聞ゆなり

ふけ行月に小鹿鳴声

初鷹

老か耳うときまよひか小夜更て

おほつかなくも渡るかりかね

秋寒み初かねの声きこゆ

野辺の萩原うら枯ぬへし

海上雁飛

いくはくのしほ路をわけて過來つゝ

(431)

(430)

(429)

(428)

(427)

(426)

(425)

都の空にむかふかりかね

越の海をいつか出けむかりかねの

つはさもたゆく浦つたひして

月下擣衣

秋寒みしつか篠やにこゑたてゝ

つきの夜毎にきぬたうつらん

月清みまた寝ぬ人のあまたありや

きぬた折なり遠近の里

残菊薰闌

ねやのうちに契りありてや菊の花

うつろふとても匂ひ残せり

うつろへるねやのまかきの菊の花

風のさそへはにほひおこせり

九月十三日は母人の身罷り

給ひける日なれば往事を

思ひてよめる

月見れははゝその森のしたはるゝ

むかしもかくは照らすとおもへは

由庵かにひ室にて竹不弁

(437)

(436)

(435)

(434)

(433)

(432)

秋といふことを題にして
人々とよめる

にひむろに緑りの竹をうゑぬれは
世はあきながら秋としられす

風前鞠

あきもはやすゑの腹野(原)の風寒み

うつら鳴なりゆふくれの頃

とこの山夜寒のかせのあらければ
朝立かねつうつら鳴なり

田家鳴

小山田の稲葉の露や深からん

しきのはねかき数ぞ増れる

秋ふかきやまたの庵のさひしさは

さよ更てきく鳴のはねかき

雨の夜に

さまざまにふる音かへて聞ゆなり

板屋をつとふ秋の夜雨 (完)

(443)

(442)

(441)

(440)

(439)

(438)

原著

日本医学雑誌・第十九卷
第一号・昭和四十八年三月

昭和四十七年十二月二十七日受付

江馬家にある坪井信道のヒポクラテス賛詩

青木一郎

坪井信道（寛政七年嘉永元年一七九五—一八四八）のヒポクラテス賛詩については、緒方富雄博士の著書にくわしく紹介されている。現在信道自筆の賛詩は八点分っているそうである。私は最近江馬家（大垣市藤江町二、江馬庄次郎氏）にて、一点見る機会を得て、これを加えて九点となったわけである。図に見らるる如き辞句である。

西方有美人。鶴髮皓如銀。雙眼睨寰宇。

片言鬼神。高天仁不極。大海知何垠。

赫々吾医祖。光輝照万春。鬼上
脱驚

依卜加辣得私賛

晩生坪井信道拝題

これは信道曾孫坪井誠太郎博士蔵のもと同じであるが、ただ依卜加得が依卜加辣得私となっている。

この賛詩を、江馬家の誰れが入手したものであろうか。江馬家は江戸時代の後期における美濃医家中随一の名家である。

この賛詩の作詩年代を緒方博士の云われるように、天保八年（一八三七）十二月とすると、関西蘭学開拓者であった、二代の江馬蘭齋は天保九年七月八日に死亡しているから、まづ蘭齋ではなからう。三代の松齋は、既に文政三年（一八二

西方有美人鶴

髮皓如銀進眼

映寰宇片言

鬼神高天仁

不極大海知何

根赫、吾智祖

光輝照萬春

依ト加辣澤私賛

晩生坪井信道拜題

坪井信道筆自作ヒボクラテス賛（江馬庄次郎氏藏）

○に死亡しているから問題にならない。すると四代の江馬活堂ということになる。

活堂は隱退後の号で、名は元益、藤渠又万春等の別号があり、堂号は格物堂である。文化三年（一八〇六）に生まれ、明治二十四年八十六才で没している。『格物堂常用医方』は、当時美濃その他の地にて大いに流行し、蘭方を以て盛名をせしたばかりでなく、晩年には好んで雑書を読み、寄事異聞、筆にまかせて記録し、『藤渠漫筆』九十卷、『近聞雜錄』百卷、『続近聞雜錄』十三卷を残している。

伊藤圭介を友人として、本草も研究し、写生図数十卷があり、家園に草木を栽培し、その数樹木のみにも六百種もあったと云われる。

八才にて叔母である才媛細香女史に従って、頼山陽に会ってから、詩文を好み、書画を求め、又自ら鑑定にも長じていた。

このように、活堂の性格を考えると、この人が信道に依頼して賛詩を入手したものと思われる。坪井家の墓地は江馬家より北方十五キロの地にあり、信道は活堂を通じて、供養料を納めていた。

しかしここで考察すべきは、活堂の弟金粟についてである。金粟は文化九年（一八一二）に生まれ、明治十五年七十一才で没している。金粟又香雨楼主人は号で、名は桂、通称元齡と云った。

この人も又多才な人であって、英敏、活澗、衆芸に長じ、幼少にして京都

に出て、頼山陽に詩文を学んだ。岡研介につき蘭学を研修し、大垣に帰り開業した。美濃医道中興の祖と云われ、医学書の外に、『黄雨楼詩鈔』、『黄雨楼文集』、『金粟題画詩鈔』等甚だ多く、元来文人肌の人で書も南画も上手であった。

金粟には注目すべきものがあり、それはこの人の蘭文ヒボクラテス賛（茅原元一郎氏蔵）があることである。この蘭文賛と信道の賛詩が関係があれば、金粟が信道に依頼して入手したものであるかも知れない。すると飛躍ではあるが、この蘭文賛は天保の終りということになる。

何れにしても、依頼入手したものなれば、為書がありそうであるし、又如何にも気楽に書き流している感がする。鬼上脱驚の追加があるが、かかる場合簡単なことであるから、始めから書き直さないものであろうか。

（参考、江馬春齋筆『江馬家の歴史』）

資料

堀内文書の研究 八

片桐 一男

第一五号文書 目黒道琢書状 堀内易庵宛

尚々令郎江も宜様御伝語可被下候

新春之御慶御同意目出度申納候、弥御安泰御重歳可被成奉遥賀候、拙者無變迎春仕候間、貴意易思召可被下候、旧臘者甚寒之起居預御尋問忝奉存候、承諭貴邦未許醸酒一嘸寒威御凌兼可被成存候、不佞亦遇不好飲之患、有酒氣薰席之責恣不能、縦飲退朝之後、微醺取酔聊避風塵一自稱酒隱道光陰申候、併惠恩之渥不棄大馬之才、旧臘又受三加禄之命候条不堪辱之至候、当夏者從駕之沙汰相聞江申候、定知不得免、若必定仕候ハ、重而可申上候、併国許江罷越候而も恐不得面謁、只間近きと申のミニ可尽こと、杉田江ハ御書状相達申候、大槻者長崎江罷越、今以都江還不申候、右御祝詞御報旁可申上如此御座候、恐々頓首

正月十五日

目黒道琢

尚恕(花押)

堀内易庵様

註

- ・杉田||杉田玄白。
- ・大槻||大槻玄沢。
- ・令郎||堀内忠明(忠意)。
- ・大槻は長崎へ罷り越、今以都へ還り申さず、とあるから、本状は天明六年(一七八六)正月十五日付書状なり。
- ・目黒道琢(尚恕)||江戸の医師。杉田玄白の親友。

第五八号文書 元格書状 堀内林哲宛

(端裏) 林哲様

用事

元格

明十六日小子当日ニ付、鳳城江御出被成候様御兼物仕置候所、俄繰上ケ罷成、今日出番仕候、依之若今日天真楼江御出被成候ハ、今日可被成候、尤後刻鳳城江人召呼候節、天真楼江寄り候様に申付置候間、左様御承知可被成候、以上

二月十四日

註

- ・天真楼||杉田玄白の塾。

堀内文書

第八四号文書 杉田立卿書状 堀内忠龍宛

拝読仕候、如レ論酷寒弥御壮学奉ニ多賀ニ候、陳者為ニ寒中御尋一御国産之老薦御患賜被レ下、拝受、奉ニ多謝ニ候、好徳上物、早速傾ニ大醋ニ候、勿々

十二月十六日

註

・杉田立卿ニ名豫(一七八六一一八四五)、杉田玄白と後妻ハいよレとの間に生れた第一子で、長じて眼科を専門とする。小浜藩医。訳著に『眼科新書』あり。

第一一三号文書 杉田成卿書状 堀内忠龍宛

如レ教速舞御同慶奉レ存候、然は野父不快御尋被レ下難レ有、先追々快、此節は近辺病家杯推而相勸候位ニ相成申候、毎度御厚意之段難レ有、宜敷御礼申上候様申付候、珍菓一匣御患被レ下、難レ有永く榮ミ拝味可レ仕、猶拝書之節万々可レ奉レ謝候、拝答迄取込敷書御海恕奉レ希候、頓首

中秋

忠龍様

成卿

註

・野父ニ杉田玄白。

・杉田成卿ニ杉田立卿の長子。文化十四年十一月十一日生れ。名は信。梅里と号す。小浜藩医。のち天文台訳員。安政三年二月、著書調所教授職。嘉永七年(一八五四)二月十九日歿、四十三歳。

第一二三号文書 大槻俊齋書状 堀内(忠龍)宛

一筆拝呈仕候、兎角不順之時合ニ御座候処、益御壮健被レ遊ニ御座ニ恐賀至極ニ奉レ寿候、先達而中者、毎度罷出、種々之御面倒之儀御願申上奉ニ恐入候、爾采御無沙汰打過申候、御高免被ニ成下ニ度奉レ願候、扱別封老通無ニ余儀ニ要用申遣度認置候所、届方不案内ニ而大難渋罷在申候、何共恐入候仕合に御座候得共、御幸便之節忠郁子へ御遣し被ニ成下ニ度奉レ願候、可ニ相成ニ者早方奉レ願度候、持參之上御願可ニ申上ニ筈之処、多忙中、乍ニ失敬ニ以ニ御便ニ奉レ願候、扱又御帰国者何時ニ被レ為レ在候哉奉レ伺度候、何近日中罷出、寛々御話可レ申候、且取込中勿々文略如レ此御座候、以上

四月十二日

大槻俊齋拜

堀内大先生

玉机下

註

・宛先の堀内大先生は堀内忠寛(忠龍・素堂)と考えられる。

第二二八号文書 青木研藏書狀 堀内（忠龍）宛

奉ニ拝読候、弥御多祥ニ被レ成ニ御起居ニ奉ニ恐悦候、陳ハ極
塾集愈々御持セ被レ下奉ニ拝受候、別ニシキエータ半斤コン
ス活板式部、是又拝受候、早速主様ハ相渡可レ申候、先ハ勿々
不レ遠内拝趨万々可ニ申上候、草々頓首

堀内先生

侍史拝復

研

拝具

註

・シキエータ＝cicuta 毒人參。

・ロンス＝ロンスブルックの内科書の訳書をやす。C. Cons-
bruch: Handboek der Allgemeinen Ziektekunde. 1817. 蘭学
者の間でよく用いられた内科書で、翻譯も数種ある。小関三
英訳『泰西内科集成』十六巻も本書の訳で、六巻まで出版さ
れた。米沢の出版のようで、本書中にも「活板式部」とい
うから、あるいは木活字本の本書をさすか。

・研＝青木研藏。

第二三七号文書 林洞海書狀 堀内忠亮（素堂）宛

(端裏)

「堀内忠亮様

林洞海

紙包沓ツ并金錢添

昨今は秋雨ニ而少數涼氣相催候へ共、益御清適奉レ賀候、陳
者一昨日は御令息様態々御出、且結構之御土産御惠授被レ成
下ニ難レ有拝受仕候、扱大兄様先日より御不快之趣は承居候へ
共、為レ差御儀も有レ之間敷、御見舞も參上不レ仕罷在候処、
此度は右御不快ニ付、御帰国ニ相成、為レ御迎ニ御令息御出府
ニ相成候由、六日比は御上途之趣、此度は急ニ又候御出府も
御計被レ成難き由ニ付、久ニ御懇意ニ御座候故、是必得レ拜頭
申上度、昨日御近辺まで參上仕候処、深更ニ相成候故、不
能ニ其儀、今明日之処何分罷出兼候、左候へは、輕少ニは御
座候へ共、毛氈老枚御餞別之印まで呈上仕候、御咲留可レ被
下候、書外は追々以ニ書中ニ可ニ申上、此後私相応ニ御用も御
座候ハ、無ニ御遠慮被レ御聞被レ下度、御国本失鳩答其外
薬品類相願候儀も御座候ハ、乍ニ御面倒ニ御世話被レ成上度、
高橋玄益老・仙仁玄雪老・東海林良庵も參上仕候ハ、御伝
声奉レ願候、以上

八月三日

尚々先日頂戴之失鳩答エキス半斤代金沓歩と四百文為レ持差
出申候、御落手可レ被レ下候、以上

註

・御令息様＝堀内忠淳（忠亮、適齋）、素堂の長男。

失鳩答＝cicuta 毒人參。

・高橋玄益＝名は備昂。米沢藩之間番医にて、明和八年四月

に一ヶ年の江戸留守番を勤め、安永六年中にも同断のことあり。天明四年四月病死。

・仙仁玄雪 名は秀之。米沢藩中之間番医にて治広に仕えた。

・宛名の堀内忠亮は素堂。素堂は嘉永七年（一八五四）三月十八日に病没したから、本状はその前年嘉永六年（一八五三）八月三日付の書状と考えられる。

・林洞海 小倉の医師。天保十四年に江戸で開業。万延元年、

奥医師。翌年待医・法眼。明治二十八年二月二日病歿。八十三歳。

第一三八号文書 林洞海書状 堀内忠亮宛

（端裏）

「堀内忠亮様

真サビナ一鉢添

林洞海

拝読仕候、過日は踏遊久々ニ而爵敬難有奉存候、其節シキ
ニ一タ相願參候処、態々為御持被下難有奉存候、右代
料如何程ニ御座候哉、無御遠慮被仰聞可被下候、扱サ
ヒナ之儀被仰下、踏遊之夜ハ草市ニ付、門前ニ可有之と
奉存候処、似寄之者は見候へ共、真物と存候者は無之候、
其後真物之さし木漸根付候小木一鉢貰受候故、為持差上可
申与存候内、彼是延引恐入候、是は出所も慥ニ而、真物ニ間
違無之候間、来春迄は此鉢ニ而折々水を灌き、春ニ相成候而

静ニ鉢をこはし、捌木之しらぬ様ニ大鉢ニ而も土地ニ而も
御うつし可被成候、書余は拝謁可申上候、以上

八月廿六日

註

・サビナ 名 *sabina*。欧州産 *Juniperus Sabina* (*Sabina officina-*
lis) の葉梢。通経剤として用いる。

・シキタータ 名 *cicuta* 毒人参。

第一四〇号文書 宇田川榕庵書状 堀内忠龍宛

坪井方今夕方高堂江參上仕候而御談可申旨申參候得共、箕
作并ニ私も一同御會議申上置事と奉存候、既甫は今日何も
故障無御座候へ共、私は直日ニテ既甫參上仕候得は、外ニ
請合頼之人無御座候間參上仕兼候、近比奉恐入候得共、
何卒今後八時前後ニ寒倉江御來駕被下間敷也、昨日別段ニ
坪井方江今日午後老台ヲ茅屋江御請待申候間、参り呉候様ニ申
遣し置候間、定而高館ニ不罷出ニ私方江参り呉候事と奉存候、
万一今日御直日等にて御來駕被成下ニ兼候ハ、夕方信道既
甫兩人參上にて御相談可申候、此義相頼傍奉伺候、勿々頓
首

正月念九

榕

忠龍様

註

・坪井 坪井信道。名は道、号は誠軒・冬樹。宇田川榛齋に修学。のち萩藩侍医となる。『製煉発蒙』『万病治準』。

・箕作 箕作阮甫。津山藩侍医から、天保十年天文台訳員にあげられた。安政二年、著書調所教授、洋書調所の教授職となる。文久三年六月十七日歿、六十五歳。

・榕 宇田川榕庵（一七九八—一八四六）。名は榕、榕菴また緑舫と号した。江戸日本橋に大垣藩医江沢養樹の長子として生まる。津山藩医宇田川榛齋の養子となり、同藩医となる。馬場佐十郎に蘭学を学ぶ。のち天文台訳員となり、『厚生新篇』の訳出に参加。『苦多尼訶経』『植学啓原』『舎密開宗』

『温泉試説』等の訳著あり。

第一四三号文書 戸塚静海書状 堀内龍宛

渡辺氏診察仕候処、先々快方ニ御座候、最早瘡口癒着ニ付、外敷膏も去候而も可然奉レ存候、且又散劑シキユータカロメル今暫く引続内服、尤カロメルは一日ニ一仄ツ、シキユータの方は追々分量相増服用可然奉レ存候、御勘考之上宜敷御調製可レ被レ下候、外用生永膏は一両日相休、かぶれ平癒候度尚又陸統摩擦為レ致度奉レ存候、煎劑中消石及杜松木等は去候而ハ如何、是亦御勘考可レ被レ下候、早々頓首

五月八日

再啓時下為レ道御自愛奉テ祈入候、書余拝答申上度、不備忠龍様
静海

病用

註

・渡辺氏 渡辺東栄。江戸の医師。

シキユータ igitis 毒入参。

・カロメル Calomel 甘汞。塩化第一水銀。

・生永膏 昇永膏。（昇永 塩化第二水銀）。

・消石 硝石 硝酸カリウム。

・杜松子 ねずの果実。利尿剤。

・戸塚静海 松平薩摩守侍医。名は維奏。安政五年、徳川家定の病篤きとき挙げられて奥医師となる。明治九年一月歿。七十八歳。

第一五五号文書 伊東宗益書状 堀内忠亮宛

過日ハ御細書被レ下候御遠志御返事も不レ仕候而奉テ恐入候、為御礼ニ申上候ハ御国元之鴨沢山ニ被レ下、早速拝味仕候、風味別段ニ御座候、御内共も宜敷御礼申述候、右之御礼御返早速申述可レ申候、引越前等大延引致し、明日ハ靴町三昨日谷町へ引移申候、家内へ之下物宜敷御礼申上度申聞候、御滯

留中御炊事候処、御配慮痛却仕候、答札之外且又相待申候、此品如^レ何御座候、御存申候得も御^ニ入^ニ御覽^ニ申候、御返事之印ニ御座候、早々以上

六月廿七日

忠亮様

宗益

註

・伊東宗益^ニ東都の医官。

第一五六号文書

渡辺東栄書状

堀内忠龍宛

(端裏)

「上杉様御内

堀内忠龍様

渡辺東栄

玉案下

拝

拝啓仕候、兎角不順之氣候ニ御座候得共、倍御多祥御勤仕被^レ成奉^ニ恭奉^ニ候、然は過日は屢御来診被^ニ成下^ニ御懇情難^レ有奉^ニ感謝^ニ候、扱鄙者別而相替義も無^レ之候処、当十三日頸之外面腫起之処、破潰致候、志かし膿ニ而は無^レ之、血ニ而も無^レ之、稀薄なる水液少々急附候得は紙を染め候程ニは無^レ之、液大約一茶碗斗迸出致、其後も少々ツ、同様之もの出候、一兩日前、兩日引続ハツ様も余程出申候外一時ニ原之如ニ可^ニ相成^ニ候処、前後別之腺の浩腫有^レ之候、いまた少々も痛有^レ之候者破

潰前ニ仕候得共、其痛半減位之事御座候、且口中別而相替義無^レ之、此程少々之御穢のもの粘着致候様相見へ申候間、折節毛引などニ而取申候、是も格別悪敷方ニは無^レ之松表煎も矢張含嗽剂ニ致居候、松表煎内服も致居候処、余り多尿ニ相成候ト覚候間、昨今は兩日見合罷在候、右之段早速可^ニ申上^ニ候処、祭礼場所ニ而何敷取紛、昨日迄ハ縁者之ものとも止宿ニ而取込罷在、追々延引仕候、毎々御配慮被^レ下難^レ有奉^ニ存候、破潰之泄物純膿ニ無^レ之候とも排除之一端ニ可^ニ相成^ニ敷^ニ被^レ存候、尚御案も承知仕度候、万々奉^ニ願上^ニ候、此節は吉那蘭苔橙皮ケンチなど相用罷在候、書外追々可^ニ申上^ニ候、先は右之段申上度、如^レ此御座候、頓首尚々時候御自愛專^ニ奉^ニ存候、以上

註

- ・渡辺東栄^ニ江戸の医師。
- ・稀薄なる水液^ニリンパ液。
- ・ハツ^ニ琶布、湿布。
- ・含嗽剂^ニ嗽薬。
- ・吉那^ニ Kina アカネ科の常緑喬木。皮を薬用とする。
- ・蘭苔^ニ 依蘭苔、 Islandish moos
- ・ケンチ^ニ ゲンチアナ gentiana リンドウ。根茎は苦く、健胃剂として用いる。

第一五八号文書 野田笛甫書状 堀内忠龍宛

奉_レ捧読_レ候、久候益御多祥欣躍無_レ限候、拙筆承前相認候間、
差上候、御落手可_レ被_レ下候、賀詩跋ハ今日相綴なき申候間、
明日迄御ゆるし可_レ被_レ下候、早々已上

五月廿二日

忠龍様

笛

註

・笛_ニ野田笛甫(野田希一)、田辺藩儒者。寛政元年(一七八九)生れ、安政六年(一八五九)歿。

名は逸、字は子明、通称希一、笛甫と号す。丹後田辺の人。江戸に出て、古賀精里に学ぶ。文政九年、清の商船得泰船号が駿河の清水港に漂着したとき、駿河の代官羽倉簡堂が清人との筆談に任じ得る者を幕府の儒員古賀侗庵に求めたところ、侗庵は笛甫を推薦した。笛甫時に年二十八、清客江芸閣、朱柳橋等を敬服せしめるころがあった。笛甫は藩主の知遇を得、抜擢されて執政に任じ、藩治文教に貢献するところ多大であった。安政六年七月歿、年六十一。『海紅園小稿』『嘉永二十五家絶句』『撰東七家詩鈔』『今世名家文鈔』等にその詩文がみえる。

第一七八号文書 竹内玄同書状 堀内忠良宛

(端裏)

「堀内忠良様

竹内玄同

差上置

不時之寒冷益御万福奉_ニ大賀_一候、然ハ今日御屈臨可_レ被_レ下候様兼而御約束仕候処、天台より御用向申参候ニ付、只今より参り候間、今日は御見合可_レ被_レ下候、来四日ニハ尊宅江罷出候心得ニ御座候間、左様御承知可_レ被_レ下候、右御断申上度、草々頓首

四月廿九日

註

・天台_ニ天文台。

・竹内玄同_ニ名は幹、西坡と号す。玄同は通称。丸岡藩侍医。天文台出仕、幕府の侍医、法印。西洋医学所取締兼帯。明治十三年(一八八〇)十一月十二日歿、七十六歳。

第一七九号文書 竹内玄同書状 堀内忠良宛

(端裏)

「堀内忠良様

竹内玄同

内用

益御万祥奉_ニ大賀_一候、然は貫齋義も漸昨晩同人実父方及_ニ談合_一談しも相調申候、御同意大慶ニ奉_レ存候、就而は来月ハ自

も不尽ニ付、同人義明廿九日朝伊東方江召連候様、双方江も及ニ相談、差支も無之候間、左様致し呉レ候与之事ニ御座候間、何卒御繰合、明日朝四ツ時比より伊東方江御屈臨被ニ成下候度、深々奉ニ希上候、万一無御扱ニ御用等も御座候ハ、御繰合一寸なり御顔御出し被レ下候様、呉々も奉ニ希上候、先は右之段相願度、草々頓首

二月廿八日

註

・貫齋ニ織田貫齋、諱盛貞、字文仲。嘉永六年（一八五三）四月二十九日、伊東玄朴の養子となり、玄朴の長女まちと結婚す。

・伊東方ニ伊東玄朴方。

・実父儀ニ伊東貫齋の実父、即ち武藏府中祠官織田筑後（のち渡盛徳と改む）。貫齋はその二男。

第一八〇号文書

竹内玄同書状 堀内忠良宛

（端裏）

「堀内忠良様

差上置

竹内玄同

其後は御無音ニ罷過、多罪之至御海容可レ被レ下候、然は昨日伊東へ逢候処、不レ論ニ晴雨ニ明日早朝より墨水辺江参り度、尊

兄江は小子より御通申呉候与之事ニ御座候、尤青木周弼当七日ニ出仕候間、其前存寄之催ニ御座候、御繁多ニも可レ被レ為ニ在候得共、何卒御繰合朝早伊東宅にて御光駕可レ被レ下候、勿々頓首

三月三日

註

・墨水辺ニ墨田川堤附近。

・伊東ニ伊東玄朴（一八〇〇—一八七一）、『医療正始』。

・青木周弼ニ長州藩医。

第一八一号文書

竹内玄同書状 堀内忠良宛

拝誦高諭、連日之炎熱難レ凌御座候処、増御多福奉ニ慶喜ニ候、然は御用立申置候讀考御返却被レ下、髓ニ落手仕候、西上行大延、何も奉ニ恐入ニ候、付ニ美介ニ差上仕候、御落手可レ被レ下候、扱近日御出立之由、何角御繁多可レ被レ為ニ在、いつれ夫前一寸取出万可ニ申上、取込草々頓首

聞 七日

堀内忠良様

竹内玄同

拝答

第一八二号文書 竹内玄同書状 堀内忠良宛

(端裏)

「堀内忠良様

竹内玄同

拝酬

拝見五六日来御病臥之由、冷暖不_レ齊之氣候、御大切ニ御加保
專一奉_レ存候て、額田君御小兒も段々御衰弱之由、折角御骨
折之処、御同意残念至極ニ奉_レ存候、キナ塩、此節之所何程ニ
御座候や、相分り兼候間、今日相知候人ニて明日否可_ニ申上_一
候、先は貴答迄、草々頓首

九月十五日

二白、早速御病氣御見舞ニも可_ニ罷出_一筈ニ御座候得共、小子
も腫物出来、歩行難儀ニ御座候故、一兩日も延引可_レ仕候、
不_レ悪思召可_レ被_レ下候、以上、

註

キナ塩 || 規那塩、キニーネ Kinine の塩酸塩。解熱剤。

第一八五号文書 竹内玄同書状 堀内忠亮宛

(端裏)
「堀内忠亮様

竹内玄同

貴酬

拝読炎熱難_レ凌御座候処、益御佳適奉_ニ敬賀_一候、陳者御尋被_レ
下難_レ有、最早快相成候間、御懸念被_レ下間敷候、塩谷容体被_ニ
仰下_一、誠ニ奇痛、今日は七ツ半時比ニ相見舞候心得ニ御座
候間、御繰合御到来被_レ成候ハ、其比一寸同人方御光駕可_レ
被_レ下候、勿々頓首

廿六日

註

・塩谷 || 塩谷甲蔵。名は世弘、字は毅侯、宕陰と号し、別に甲
蔵・九里香園と号した。幕府儒官。慶応三年(一八六七)九
月歿、五十九歳。

第一八六号文書 竹内玄同書状 堀内忠良宛

(端裏)

「堀内忠良様

竹内玄同

侍史

此間は尊書被_レ下候処、不在ニ而貴答も不_ニ申上_一失敬、昨日
は御光駕被_レ下候処、又々不在不_レ得_ニ拝眉_一残念奉_レ存候、塩
谷方昨日見舞、夫より尊宅江罷出候心得之処、無_レ拠途中ニ而

手間取、御無沙汰ニ相成候、今日も無_レ拠義有_レ之参り兼候間、明日も明日も無_レ相違ニ相見舞候間、左様思召可_レ被_レ下候、先は右之段申上度、早々頓首

廿八日

・塩谷_〓塩谷甲蔵(岩陰)。

註

第一八八号文書 竹内 書状 堀内 宛

(端裏)

「堀内様

貴答

竹内

如_レ高論酷熱難_レ凌御座候処、益御佳適奉_レ敬喜_レ候、塩谷氏之九子之方、御尤千万御同意ニ奉_レ存候、早々御用可_レ然奉_レ存候、尚近日御拜晤万可_レ申上候、草々頓首

七月四日

尚々此節、疼痛相起不_レ申候ハ、御方中之度宕ニ無_レ之候而も宜候半敷与奉_レ存候、御熟考可_レ被_レ下候、以上

註

・塩谷_〓塩谷甲蔵(岩陰)。

・莫岩_〓莫岩、鎮痛・鎮瘻劑として胃痛・百日咳などに用いる。

第一八九号文書 竹内玄同書状 堀内忠龍宛

(端裏)

「堀内様

貴答

竹内

拝見、先日ハ御光来被_レ成下_レ候処、大失敬御高免可_レ被_レ下候、然ハ赤沢寛輔居所は室町通仏光寺下ル西側と申所ニ居候由ニ御座候、乍_レ去小生も悉クハ存不_レ申候得共、右所と半及_レ申候、貴答草々頓首

六日

註

・差出人・宛先とも名を詳記していないが、筆蹟から竹内玄同から堀内忠龍宛の一簡とみなされよう。

第一九二号文書 青木周弼書状 堀内忠勉宛

一筆致_レ啓上_レ候、然ハ御同苗忠良様御事、御帰国後も御宿疾御了然不_レ為_レ在、追日御諸症加重、去月十八日溘然御遠行被_レ

成候段、驚入奉_レ絶_レ言語候、御家内様御愁傷之程御心情方々奉_レ察候、私共も多年辱_ニ御交誼_一被_レ仰付_ニ難_レ有仕合_ニ御座候、実_ニ御老成人之御事_ニ御座候へ共、尋_レ道之山斗と奉_レ仰居候処、御凶臥相同、不堪_ニ愁嘆_一候、旧年御帰国後、御投書被_ニ成下_一、猶保嬰書并葡萄組之囊御惠贈被_レ仰付、千万難_レ有、御懇情之御事奉_ニ感謝_一候、いまた御礼書も不_ニ差上_一内_ニ長別離と相成、遺憾之至奉_レ存候、扱御薄寔奉_ニ恐入_一候へ共、御線香料尅封差出申候、御仏前へ御備可_レ被_レ下奉_レ願候以死不備生御折哀之程申上候疎々御座候、先_ハ弔慰為_レ可_ニ申上_一如_レ此御座候、恐惶謹言

四月十四日

青木周弼

(花押)

堀内忠勉様

侍史

註

・忠良_ニ忠亮の誤り。堀内忠寛(素堂)をさす。

・去月十八日_ニ堀内素堂は嘉永七年(一八五四・安政元)三月十八日に病歿。享年五十四であった。

・右により、本状は嘉永七年四月十四日付書状なり。

・山斗_ニ泰山北斗。

・青木周弼_ニ名は邦彦、月橋と号した。享和三年周防大島に生る。長門藩医能美估庵に漢医方を学び、のち長崎に遊学。さらには江戸に出て坪井信道・宇田川榛齋に師事する。長門藩医

となり、医学校好生館を設立、嘉永初年藩主の侍医となる。種痘術の鴻益を認識して、弟研蔵を長崎に遊学せしめ、藩内に施行した。文久三年十二月十六日歿。年六十一。『医院類案』『察病論』『袖珍内外方叢』『病理論』『察病龜鑑』等がある。

第二四七号文書

甚寒_ニ御座候処、益万吉奉_レ賀候、然は兼而研蔵_ハ御咄申上置候解剖、弥明後廿六日_ニ相極り申候間、思召之御方御社中江茂御座候半歿、何卒払暁_ヨ里御出席可_レ被_レ下候、此段御案内申上度、如_レ此御座候、以上
十一月廿四日

註

・研蔵_ニ青木研蔵。

十月例会 十月二十一日(土)

於順天堂大学医学部九号館二階三番教室

一、小絵馬に現われている疾病観と治療観

三浦 三郎

(財団法人日本漢方医学研究所員)

右は願事があると神社仏閣に生きた馬を奉納したものである。それが木形の馬となり、更に小形の木に馬の絵を描いて納めるようになった。これが小絵馬の始めである。

寛弘八年六月大江匡衡が北野天満宮に色紙絵馬を奉納したというから九〇〇年前には既に小絵馬の風習が始まっていたわけである。

庶民が願事、この場合は病氣平癒の祈願をする時、小絵馬に病氣の部位種類を表現したものを奉納し、その願いをかなえらるると、それが言い伝えとなって、この神はこの病氣というように神社仏閣が専門医扱いされるにいたるのである。そのようにして、ご利益のある社寺には、絵馬師が願人に奉仕するようになり、病人はそれぞれその社寺に赴き絵馬を納めて病氣平癒を祈願し、また御札に絵馬を奉納するようになった。それであるから、その社寺の祭神とは関わりのないものである。たとえば足利の大手神社に双手の絵馬が納められ、手の病の神とされるの類である。この

種の病氣平癒祈願のため奉納された小絵馬を供覧する。

瘡(くさ)の病いを癒してもらいたい祈願に草刈り鎌を交又して描いた図はしばしば見られる。牛込草刈稻荷のものは有名である。南千往に齒神様というのがあつて、歯をくわえた人物の絵馬が上げられていたが、歯の絵馬もよく見られる。

東京には江戸時代の小絵馬が多様多様に方々の寺社に上げられていたが、震災戦災で殆んど消失した。現存の小絵馬は練馬区の南蔵院に文化文政時代のものもあり、ここに供覧されるものの中にもあるが、一般に真言宗の薬師さまは目の神とされ、めの字を差し向いに並べた構図が最も普通で、新井薬師では今日も納める風習が残っている。トビやタカの図を描いてその眼を特に誇張したもののや烏天狗の目を特に大きく描いたものもある。

小児の夜泣き平癒祈願には鶏の親鳥が雛鳥をたしなめている図や大津絵の鬼の図があり、足利市外の水使神社の小絵馬の、腰巻の裾から女の両足ののぞいている図は、性病平癒祈願のものである。

二、江戸幕府と医師

進士 慶幹

(日本大学法学部助教)

ひとたび幕府に召抱えられると、よほどの失態のないかぎり、その者からその子、その孫に、医師という役目と俸禄とが与えられる。親が診療に長じていても、その子や孫が、かならずしもそれを受け継ぐとはかぎらない。病氣が治るか、治らないかというのは、はっきりわかってしまう。もっとも、大事なときには一人

の医師だけまかせるといふ例はすくないから、実力のある他の医師の力でそれを切り抜けることができる。それにしても、精銳を常にそろえて置くことが一番よい。

1、家康は医師に高禄を与えると、医術の練磨をおこたるようになるから、そうしてはいけなさと云ったというよううながちが幕末の官医のあいだでもいい伝えられていた。

2、享保改革の一環として、A無学短才の医師、B医師の嫡子で医学の勉強をせずに放埒な生活を送る者には御暇を下されという方針が打ち出された。但し、御暇後に奮起して、医療をよく学んだ者が再勤仕を願ひ出れば、召抱えようという「世襲」の特権が残されている。

3、典薬頭という官医の総元締的家格の医家は今大路・半井(表)、吉田・竹田(奥)の四家で、しかし、実際の治療にはうとかったことが、江戸時代後期には常識となっていたものの、先格を重んずる幕府内部では、そのまま世襲されていた。こうしたことをふまえて、『徳川実紀』を検索すると、有能な町医師や諸家に仕えている医師を引き抜き、幕府の医師として召抱えてしまう記事がきわめて多いことに気がつく。しかし、その数量的データはまだ手にするに至っていない。

そのほか、医師の身分、奥医になった者の権威、あるいは特殊技術者(儒学者を含めて)に対する幕府の処遇などについての話柄を供して、諸彦の御教示をいただきたい。

十一月例会 十一月二十五日(土)

於慶応大学医学部北里記念図書館第一会議室

一、明治年代の歯科麻酔―殊に笑気麻酔小史―

谷津 三雄

日本で笑気を用いられた最初の記録は明治六年(一八七三)の「日講記聞」の薬物編にみる。

歯科では高山紀斎著「歯科薬物摘要」の附録の項に「嬉笑気」Nitrous Oxide Gas(一名亜酸化窒素)があり、これが歯科応用鼻薬中、無害なる者として常に賞用すべきものといつて紹介したのが最初とみられる。

しかし、その実施方法は明治二十二年(一八八九)七月刊の小林義直訳述のバライト著「歯科提要」と明治二十三年(一八九〇)二月刊の小島原泰民訳述「歯科小枝」(ハリス並にパレットの歯科手術書の訳本)にみられる。

では笑気ガスが実際に用いられた記録は明治二十四年(一八九一)四月に片山敦彦が米国から吸入器を購入して帰り、抜歯に用いたのが最初である。なお、従来は笑気麻酔器は大正年10(一九二一)に田代(義徳?)が米国から輸入したものが最初とされてきた。

また、明治二十八年(一八九五)に神翁金齋が笑気ガス麻酔器を米国より輸入し、翌年一月十一日に瑞穂屋で一井正典が非公開で笑気ガス麻酔の実験を行ない、良結果を得たと「歯科学会月報」61号(明治29年1月)、32頁に「亜酸化窒素の試験」と題して報告している。

抜歯のための笑気麻酔の公開実験を歯科学会の月例会で初めて

行つたのは明治二十九年五月であつた。この時の施術者は伊沢信平氏であり、器具は神翁金齋氏より貸与された。被検者は二名で、その一人は榎本会長自身であつた。

明治四十一年（一九〇八）十一月三十日刊の「歯科新報」第一号に共立歯科（日歯大の前身）に英国、ロンドンのシ・アシユ父子会社からヘキット氏提携瓦斯麻醉器一式が寄贈されたとある。なお、ヘキット氏式酸化窒素及び酸素混合迷朦薬については明治30年に既に「歯科学会月報」84号に紹介されている。

しかし、日本で笑氣を抜歯に使用することはなかなか普及せず、明治四十三年（一九一〇）四月の第三回日本医学会総会において、京都の苗加房三郎氏が「英国ロンドンにおける除歯術の実況並に亜酸化窒素瓦斯吸入器及抜歯器供覧」と題して発表した中に、ロンドンでは笑氣を使った抜歯が日常的になつてゐるから、日本でも遠からず、盛んに用いられるようになると思ふ、と言つてゐる。

明治十七年から本格的に始まつた歯科医術開業試験の出題の中で、明治26年のに伊沢信平が「亜酸化窒素吸入器の使用法、マトリックスの考案」という問題を出している。その他この時代の出題には、全身麻醉薬に関する問題を見る。

なお、明治三十二年の高山歯科医学院の卒業試験問題に「亜酸化窒素の生理的作用、歯科医治効用を記し、併て其施用法を問ふ」というものがある。

因みに、明治年代にはエーテルを亜的児、依的児、越的児、遏篤児と書き、クロロホルムを哥口羅防、嘔囉防護、格魯々福爾護、格魯々保兒母、格魯兒保爾母と書いている。

二、幕府医官奈須家資料について

鍋島 直玄

徳川二代將軍秀忠に召出され、代々医官を勤めた奈須家の資料が、慶応義塾大学北里記念医学図書館（医学情報センター）内、富士川文庫にある。ここには、所請、和装本の古医書といわれるものが、総数約五、二〇〇冊余あり、その大部分三、六三四冊が富士川文庫である。その中に、約九十点余の奈須家の資料があり、殆どが伝記的資料として役立つもので、即、幕府上司からの書状、又は、奈須家よりの届書草稿、先祖書等であり、当時の医官の地位、待遇が偲ばれる。大正十二年の震災によつてその後裔が絶えてしまつた今日、尚更貴重なものとなつたのである。その中で、医官としての第六代恒徳、玄盅と称し、柳村と号した人については、富士川博士が明治四四年刀圭新報第二巻に、また藤浪博士が中外医事新報第一、一九九号にそれぞれ論文を寄せて居られる。ここでは、医官としての初代恒昌、玄竹法印から、七代信徳玄竹までの事蹟を略述し、遺された資料の主要なものを紹介して、幕府医官としての、奈須家代々を偲びたいと思ふのである。尚、前記の五、〇〇〇冊余の古医書目録は、冊子体として刊行の準備が進められてゐることを附記して筆を擱く。

奈須家資料、参考 1 家系

源姓 大塔宮護良親王苗裔

式部少丞越前守

家恒

家之

重恒

重貞

二代將軍徳川秀忠召出

久昌院 初代 ユキ 二代

恒昌

恒干

良音 三代

良種 四代

玄竹

玄竹

玄筑

玄筑

・法眼

・御目見

・御目見

・養子、奥医師
内田玄寿次男

・法印

・寄合医師

・寄合医師 (享保十七年)

・御目見

・民部卿

・法橋 (元禄十一年)

・法名 正智

・寄合医師

・武州埼玉郡青柳村
のうち五百石知行

・法眼 (〃 十二年)

・谷中感應寺葬

・御番医師

・拝領屋敷

・拝領屋敷

・法名 明達

・谷中

・法名 日休

・法名 天了

・谷中

・谷中
感應寺葬

五代 恒隆

六代 恒徳

七代 信徳

画 吉備丸

玄真

玄竹改め

玄竹

震災にて
不明

・養子、三代良音

・玄盅・養子田沢玄丈次男

・小請謂医師

・弟恒栄の惣領

・家禄五百石の処

・御番医師 廃止により

・家督相続

・四百五拾被下置

・小普請入

・寄合医師

・御番医師

・慶応四年 (明治元年)

・家業未熟

・御番医師

・六月御暇願

・身持不宜

・元通五百石知行

・十月御暇被下候

・小普請医師へ差控

・縁合医師

・明治九年卒

・拝領屋敷召上

・寄合医師

・縁合医師

・差控御免被申渡

・縁合医師

・縁合医師

・法名 覚堂

・右御免被申渡

・縁合医師

・谷中 感應寺葬

・寄合医師

・縁合医師

・法名 寿山

・谷中天王寺寺中養善院

・後日了院寺葬

備考 寛政重修諸家譜と奈須恒徳及び信徳筆由緒書、先祖書草稿と多少年代の相違あり。尚前者は家恒以下四代を未勘とす。為念。

一、勅許状

法橋・法眼勅許状

口宣案 元禄十一年・十二年

奉勅状 元禄十一年・十二年

二代恒干ツナ 玄竹宛 (法橋) (法眼)

二、幕府文書

1、將軍上意の趣大奥川崎局代筆書状

2、松平因幡守書状

初代恒昌 玄竹 宛

3、登城要請状 三通貼付 巻物

1 堀田撰津守 2 植村駿河守

井伊兵部少輔

植村駿河守

連名

3 森内膳正

林肥後守

小笠原相模守

堀大和守

増山河内守

連名

七代信徳 玄竹 宛

4、後藤佐渡守書状

同前 宛

5、御暇願聞届書

同前 宛

6、御印鑑(門鑑?) 紙片一枚

徳川旧臣 元御番医師奈須玄竹
用人支配 高五百石辰十月三日暇済
(戊辰)

以下略

三、奈須家文書

1、知行目録

初代恒昌 玄竹筆

安藤右京亮 松平備前守宛

2、武蔵国埼玉郡之内郷村高帳請取書

早川八郎左衛門より

六代恒徳 玄竹改め玄忠宛

享和二年戊

(知行高元の通五百石に戻りし時の
郷村高帳請取書)

3、家乗 二冊

六代恒徳 玄竹改め玄忠筆

七代信徳 玄竹後に加筆

4、先祖書 玄竹筆

七代信徳

5、親類書 玄竹改め玄忠筆

六代恒徳

6、雷除解毒丸由緒

同前 筆

7、隠居奉願候覚

同前 筆

8、御変格により御暇願草稿

七代信徳 玄竹筆

以下略

奈須家資料 参考3

各代在任期間

寛政重修諸家譜 七代信徳筆資料

初代恒昌 玄竹

二代恒干 玄竹

三代良音 玄筑

四代良種 玄筑

五代恒隆 玄真

六代恒徳 玄竹

七代信徳 玄竹

自寛永(一〇年) (一、六三)	自元和(八年) (一、六三)
至延宝(元年) (一、六七)	至延宝(五年) (一、六七)
自延宝(元年) (一、六七)	自延宝(五年) (一、六七)
至享保(六年) (一、七三)	至享保(六年) (一、七三)

享保(六年) — 宝暦(五年) (一、七五)

宝暦(五年) — 明和(元年) (一、七五)

明和(元年) — 寛政(八年) (一、七六)

寛政(八年) — 天保(八年) (一、七六)

天保(八年) — 慶応(四年) (一、八六)

十二月例会 十二月十六日(土)

於慶応大学医学部解剖学教室講堂

一、多摩の蘭学

新藤 恵久

二、切手でみた救ライと外科

蓮見 武爾

三、日本におけるヒポクラテス画像とその後

緒方 富雄

四、カピタンの娘、平戸のコルネリアの半生

岩生 成一

以上四題の詳細は蘭学資料研究会研究報告第二六五号に掲載さ

れている。

一月例会 一月二十七日(土)

於順天堂大学医学部九号館三番教室

一、南海寄帰伝にみられる個人衛生

杉暉 道二

二、佐藤尚中の長崎留学について

小川 鼎三

以上二題は原著として本誌に掲載予定。

書評

中川米造著「医学をみる眼」

著者の中川米造氏は大阪大学助教授、医学概論を専攻し、そのユニークな視点と発言が注目を集めている。最近では医学教育の分野でも活躍しているが、昭和四十四年のいわゆる医学部紛争のさい阪大にさして大きな混乱のなかつたのは、著者の力によるところが少なくないと思う。一般にはかかる紛争ごときに関係するとマイナス面が多いが、著者によれば「一見時間浪費的な会合が、どれほど私の思想を肥やしてくれたかはかりしれない」ということとなる。その包容性、行動性、消化力の大きさに感嘆する次第であるが、このような豊富な自己体験をもとに、著者の大胆で特異な発想により世界の医学の流れをコンパクトに、平易に書き流したのが本書である。

本書の構成はつぎの七章である。①医学の起源的ながら
②古代医学 ③中世の医学 ④市民社会の成立と医学 ⑤病院の
医学 ⑥研究室の医学 ⑦社会の医学 この時代区分こそが著者
の志向したものであり、従来のアカデミズム史学（著者はこれを
十九世紀史観にもとづく医学史という）から脱却ないし訣別を試
みたものである。全体の比重としては近代以前（1-4章）が重
く、ことに中世までに全体の三分の一を費しているが、この中
には近年著者が自ら対面したアフリカの魔法医の紹介などあり、こ
れは社会人類学的手法による医の原点の追及と考えることができ
よう。その他実に数多くの、興味あるエピソードが紹介され、著
者の視野の広さと博学ぶりにいささかとまどうほどである。

著者はヒポクラテスの医学を王様の医学、ないし侍医的立場の
医学と規定する。それは基本的にガレーノスにうけつがれ、体系
的となる。中世にはベストを始め伝染病の流行が盛んであるが、
一方サレルノを始めとする医学校ができ、またアラビア医学が独
特の地位を占めるに至る。しかしこのアラビア医学も支配階級の
医学であったがゆえに、ギリシャ・ローマのそれと同じく、支配
階級の没落とともにその力が衰える。十六・十七世紀にかけてパ
レ、ベサリウス、ハービー等が登場するが、その背景は決してき
れいなものでなく、苦澁と混乱の世界であった。そして十八世紀
のヨーロッパは開業医の黄金時代を迎える。

十八世紀から十九世紀にかけて、病院が本来の性格をもつよう
になる。これは侍医の医学から「病気の医学」への医学の質的変換
である。著者はこの臨床医学の発達をフランスに重点をおいて追
及している。一八四八年にはフランスで社会医学という語が生れ

ている。十九世紀の後半から一九一四年にかけては世界の医学を
ドイツがリードする。この医学を一言にしていえばそれは研究室
の医学である。そしてドイツ医学を代表する人としてフィルヒ
ウに焦点をあて、彼の生涯を詳しく紹介する。研究室の医学は細
菌学分野などではなやかに開花するが、それは帝国の力に負う閉
鎖的なものであった。そして最後の「社会の医学」の時代はアメ
リカに焦点が移る。現代医学の複雑さを「非病性症候群」とい
うべきなれない概念で説明している。

近代以降を病院・研究室・社会の医学ということで三大別し、
夫々フランス・ドイツ・アメリカ医学で代表したことは全く著者
の独創であり、その思想的背景とともに読者を一応納得させは
するが、やや類型的にすぎたきらいがあり、前半に比すと無理が
目立つのではなからうか。著者は「医学の現実には確かに病んでい
る。（中略）結論から先に述べれば、治療法はある」。とし「健
康の科学としての実践的理論を医療者との協力によってつくりあ
げてゆかねばならない」といっているが、これを裏付ける説明が
欲しかった。

本書はNHKブックスの一つであり、いわば一般を対象とした
ものである。医学史、それも清新な考えによった医学史が一般市
民に受け入れられることは、大変意義のあることであり、その筆
をあえてされた著者の学識と勇氣に心から敬意を表したい。ただ
残念なことには初版にはミスプリントが実に多く、また表現にも
やや生硬なところがあることで今後の更改を期待したい。

（日本放送出版協会発行、B 6判、二二二頁、三四〇円、昭和
四五年初版）長門谷 洋治

昭和四十七年度医史学関係論文目録 (一)

1 医学のあゆみ

Dr. Bestとその周辺—インスリン発見五〇周年によせて—(Ⅱ)

仁木 厚・他 80巻1号 四五〜四八

健康の思想ⅧⅧ ベーコンと健康の技術学 中川米造 80

巻2号 一〇一〜一〇四

三沢敬義名誉教授 緒方富雄 80巻3号 一五九

シゲタリスの発見とその後の薬物史への寄与 今井昭一 80

巻4号 二一三〜二一六

ベルト(一八四九〜一九一三)のこと 緒方富雄 80巻6号

四二〇 80巻7号 四七〇

健康の思想ⅧⅨ A・スミスの経済学と医療 中川米造

80巻7号 四七七〜四八〇

医学の切手とわたくし 古川 明 80巻9号 五九一〜五九

四

健康の思想Ⅷ一〇Ⅴ 「百科辞典」の医学 中川米造 80巻

11号 七一一〜七一六

アルコールの薬物史から—その益と害— 赤羽治郎 80巻12号

七七九〜七八一

構材代謝という私の新しい考え方に基づいた生組織学の骨組み

緒方知三郎 81巻1号 一〜八

高橋明名誉教授 緒方富雄 81巻2号 九七

健康の思想Ⅷ一Ⅴ カントの保健論 中川米造 81巻2号

九八〜一〇一

米国の医学教育(学部)におけるリハビリテーション医学

荻島秀男 81巻3号 一六四〜一六六

健康の思想Ⅷ二Ⅴ ロマン主義と医学 中川米造 四七五

〜四七八

健康の思想Ⅷ三Ⅴ 形態と生命 中川米造 七三四〜七三

七

医学教育における Human Biology の導入 小林 登 81巻

12号 七九一〜七九四

Insulin発見への史的道標 二宮陸雄 81巻13号 八四三〜八

四八 82巻1号 三三〜三九 82巻3号 一六六〜一七〇 82巻

6号 四〇七〜四一三 83巻6号 四二九〜四三五

健康の思想Ⅷ四Ⅴ 調和 中川米造 82巻2号 一〇八〜

一一一

健康の思想Ⅷ五Ⅴ 適応 中川米造 82巻7号 四六〇〜

四六三

中国の医学をのぞきみて—とくにハリ麻酔を中心に— 岡本

途也 83巻2号 九五〜九八

生体開頭の前頭蓋が日本に発見されない理由 中田瑞穂 83

巻5号 三七〇〜三七八

医学史研究

38号(一九七二年六月発行)

東洋比較医学史—私の中国医学史研究— ジョーセフ・ニード

ム 一〜四

医学史研究会 第八回東京研究集会 特集(2)

国崎定洞をしのぶ会

回想の国崎定洞 曾田長宗 五〇〜一

回想の国崎定洞 山田とく 一三〜一五

国崎定洞と現代 前田信雄 一六〜一八

国崎定洞—その後の調査より 上林茂暢 一九〜二〇

六〇年代のメスをめぐって 林 正秀 二一〜二四

日本製業史稿(その一) 宗田 一 二五〜三一

芥子焼考 新村 拓 三二〜三五

労働組合期成会鉄工組合の救済活動(その三) 北原龍二

三六〜四〇

医学史研究会第七回東京研究集会報告 岡田靖雄 四一〜四

七

医家芸術

16 卷11号 (一九七二年十一月発行)

座談会「シーボルト」の本質を探る 緒方富雄他 一一〜二

六

シーボルトとドイツ 石橋長英 二八〜三一

シーボルトと長崎 北村精一 三二〜三五

シーボルトと愛媛 仙波嘉清 三六

シーボルトと京都 阿知波五郎 三七〜三九

日本人の描いたシーボルト画像 四〇〜四二

父藤森成吉と「シーボルト夜話」 藤森岳夫 四三〜四四

シーボルトと本間棗軒のこと 矢数道明 四四〜四六

シーボルト著「日本の施律集」について

田中助一 四六〜四八

シーボルト研究の文献資料について 鍋島直玄 四九〜五二

漢方の臨床

修琴堂收藏医籍解題 大塚敬節 19 卷2号 七七〜八〇 19

巻3号 一四五〜一四八 19 卷4号 二二六〜二二八

昭和四十六年度漢方医界年表 矢数道明 19 卷2号 一〇八

〜一一〇

東洞門人録の中の神琴溪 矢数道明 19 卷5号 二五七〜

二六一

「春雨雑誌」と「医心」を加え再び明治以降の漢方関係諸雑誌

一覧表を紹介する 矢数道明 19 卷7号 三七三〜三七六

神農本草経は薬医学である(追補) 高橋良忠 19 卷8号

四三五〜四四二

若若の弁 宮下三郎 19 卷10号 五五五〜五五九

長山と東洋と修庵と—「東洋洛語」をめぐって— 大塚恭男

六七九〜六九三

生物学史研究

21号 (一九七二年三月発行)

産婦人科の世界

24巻10号（一九七二年一〇月発行）

江戸時代の帝王切開 小川鼎三 一〇三

一葉の古写真にまつわる歴史と感想―婦人科手術風景 五〇七

日本における近代産科の黎明期 酒井シヅ 九〇一三

日本における産科学の発達と帝王切開 石原 力 一五〇二

帝王切開の回顧 安井修平 二一〇三

帝王切開の今日と将来 山村博三 二五〇二八

産科の将来と帝王切開 小林 隆 二九〇三二

歯学史研究

第5号（一九七二年一〇月発行）

古記録に見る歯痛の信仰療法 山田平太 一〇三

日記にあらわれたわが国の歯科医療 杉本茂春 四〇一三

瑞穂屋について 山田平太 5号 一四〇二六

口腔病理学の歴史への手がかり 正木 正 一七〇二二

歯学への疑問 杉本茂春 二二〇三〇

W・C・イーストターキとフリーユーン 今田見信 三一

パーキンス先生の令孫マグリーン教授と会して 瀬戸俊一 三

五〇三八

国産歯科材料の展望 山田平太 三九〇四〇

三百年前の局部入歯 小林五郎 四〇〇四二

ロウアーの生理学 中村禎里 一〇六 生命の科学の方法(I)

個別性―特殊性―普遍性の論理 草薙昭雄 七〇一五

L・Vレベeltaランフィ研究序説(I) 鞠子英雄 一六〇二〇

科学史を利用した設問形式の授業 その5 光合成 加藤信行 二一〇三五

アルフレッド・ラッセル・ウォーレス―変種がもとのタイプから無限に遠ざかる傾向について(一八五八) 江上生子 三六

と四二

22号（一九七二年八月発行）

日本における血液循環論の受容 酒井シヅ 一〇七

「植学啓原」に於ける生殖について―宇田川榕菴の植学啓原

(II) 矢部一郎 八〇一三

石川千代松における進化論と社会(2)

富沢英治 一四〇二四

生命科学の方法(II) 因果性について 草薙昭雄 二五〇三

三

L・V・ベルカランフィ研究序説(II) 鞠子英雄 三四〇四

三

科学史から見た遺伝子概念の指導について 鈴木善次 四四

と四五

Nora Barlowのダーウィン論 江上生子 八杉龍一 四六〇

四八

江馬蘭齋に関する一資料に就いて 青木一郎 二五七号 一
と六

海軍々医寮と戸塚環海 戸塚芳男 二五八号 一〇一三

杉田玄白の日記「鶴齋日録」から 片桐一男 一〇一六

宇田川榕菴とリンネ分類 矢部一郎 二五九号 七〇九

解馬新書について 松尾信一 二五九号 一三〇一五

江馬蘭齋に宛てた杉田玄白の書翰 片桐一男 二五九号 二
五〇二六

ある地方蘭学者の英人との対談 中山 沃 二五九号 三〇
三二

理学蘭書について―山口県華浦医学校旧蔵書研究統報― 阿
知波五郎 二五九号 三七〇四一

「蘭漢」折衷医学から「漢蘭」折衷医学へ―杉田玄白・大槻玄
沢を中心に― 山崎 彰 二五九号 四二〇四三

江戸幕府と医師 進士慶幹 二六〇号 一〇一五

「植学啓原」に於ける発酵について 矢部一郎 二六〇号
六〇一二

橋本宗吉の「西説産育手術全書」について 宮下三郎 二六二
号 一〇一六

多摩の蘭学 新藤恵久 二六五号 一〇一三
切手に表われた救癩及び外科の歴史 蓮見武爾 二六五号

四〇六
日本におけるヒポクラテス画像その後 緒方富雄

東海医学史研究会発足す

― 発会記念講演会印象記 ―

かねてから待望されていた中部地方での医史学研究団体、東海医学史研究会が、二月二十四日、名古屋大学医学部で発会記念講演会を行なった。

会則に「医学の歴史、思想、哲学に関する研究、研鑽を目的とする」とうたい、事業のひとつに「専門学会……との協力・交流」を掲げた同研究会は、日本医史学会会員も含め、東海地方の著名な医史学研究者二十九名の連名でよびかけられ、今回その設立を見たものである。

当日は小雪まじりの悪天の中、四十五名の参加という盛況で、岡田博代表（名大教授、予防医学）のあいさつのあと、服部敏良氏を座長として、記念講演「蓬左文庫の医書（石川道雄氏）」、「森鷗外と愛知医専その他（青井東平氏）」が行なわれた。石川講演は、徳川記念館における蓬左文庫の成立と、その所蔵医書に関する多年の研究成果であり、青井講演は、鷗外への関心をよびさせた亡き友への哀惜を縦糸に、鷗外と愛知医学界との関連を横糸に、愛知医専史に関する造詣の一端を披露されたもので、演題も演者も、中部における医史学研究センターの創立にふさわしいものであった。

同会の会員は現在九十八名、当分は春秋二回の研究会総会を軸に運営される。

会の代表は岡田博氏、世話人は青井東平、服部敏良、吉川芳秋氏等十四人。事務所は名古屋市昭和区鶴舞町六五、名大医学部図書館内、会費年額千円。

同会の御発展を心から祈る。(K)

日本医史学会々々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係學術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額二〇〇〇円を前納する。た

だし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の内任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内(東京都文京区本郷二の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行情日 年四回(三月、六月、九月、十二月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数

表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校 正

原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別 刷

投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先

東京都文京区本郷二丁目一の一
順天堂大学医学部医史学研究室内 日本医史学

会

編集委員

大鳥蘭三郎(委員長) 石原 明 杉田暉道
大塚恭男 酒井シヅ 沢井貫太郎

日本医史学会役員氏名 (五十首順)

理事長 小川 鼎三
 常任理事 石原 明 大島蘭三郎
 會計監事 宗田 一

赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節
 大矢 全節 緒方 富雄 岡西 為人
 蒲原 宏 佐藤 美実 杉 靖三郎
 鈴木 正夫 鈴木 勝 宗田 一
 竹内 薫兵 津崎 孝道 戸苅近太郎
 中野 操 三木 栄 矢数 道明
 吉岡 博人 和田 正系

大塚 恭男 酒井 シヅ 沢井貫太郎
 杉田 暉道 谷津 三雄

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎
 青木 一郎 石原 明 石田 憲吾
 石川 光昭 今市 正義 今田 見信
 岩治 勇一 内山 孝一 大島蘭三郎
 大塚 敬節 大塚 恭男 王丸 勇
 大矢 全節 緒方 富雄 小川 鼎三
 岡西 為人 茂島 四郎 片桐 一男
 川島 恂二 蒲原 宏 金城 清松

久志本常孝 神原修紀田郎 酒井 シヅ
 酒井 恒 佐藤 美実 清水藤太郎
 杉 靖三郎 杉田 暉道 鈴木 正夫
 鈴木 勝 鈴木 宜民 瀬戸 俊一
 関根 正雄 宗田 一 高木圭二郎
 高山 担三 竹内 薫兵 田中 助一
 津崎 孝道 津田 進三 筒井 正弘
 戸苅近太郎 中泉 行正 中川 米造
 中沢 修 中西 啓 中山 沃
 長門谷洋治 中野 操 服部 敏良
 福島 義一 藤野恒三郎 本間 邦則
 富士川英郎 古川 明 丸山 栄
 松木 明知 三浦 豊彦 三木 栄
 三廻 俊一 谷津 三雄 山形 敏一
 矢数 道明 山下 喜明 山田 光胤
 安井 広 吉岡 博人 和田 正系
 以上

会員消息

富士川英郎編「芳翰帳」

富士川游先生の御子息芳郎氏が游先生に宛てた著名人の手紙をまとめて「芳翰帳」として出版された。英郎氏の丁寧な註が入り、貴重な本となっている。この本は私家版であり、百部限定であるが、医史学会々員の希望者に進呈したい旨のお申出をいただいた。希望者は左記の住所に送料として

八十五円の切手(現金はお断り)を同封の上申込まれたし。

鎌倉市山ノ内二二〇 富士川英郎

編集後記

本誌の発刊が予定より大巾におくれてしまった、編集委員として申訳ない言葉以外ない。編集委員会の体制を建て直し、順調に発刊できるように配慮していきたいと思っている。

昭和四十八年三月二十五日 印刷
 昭和四十八年三月三十日 発行

日本医史学雑誌

第十九巻 一号

編集者代表 大 鳥 蘭 三 郎
 発行者 日本医史学会
 代表 小川 鼎三

〒二三 東京都文京区本郷二一

順天堂大学医学部医史学
 研究室内

振替 東京 一五二五〇番
 製作協力者 金原出版株式会社
 医学文化保存事業部

〒二三 東京都文京区
 湯島二二一四

印刷者 五協印刷有限公司
 〒七四 東京都板橋区
 南常盤台一三三

血行障害に

●自社開発の新しい血行改善剤

メグリン錠

(一般名：ヘプロニケート)

- 血管拡張作用
- 脂質代謝改善作用
- プラスミン活性化作用



(包装) 錠 100mg (コード番号：Y-MEXO)

：100・1000・3000錠

(薬価基準) 錠 100mg 1錠当り ¥15.00

- 使用上の注意 等については現品説明書をご参照ください。
- 文献等ご要望の向きは吉富製薬学術部 大阪市東局区内 まで。



製造=吉富製薬株式会社
販売=武田薬品工業株式会社

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 19. No. 1

March 1973

CONTENTS

Articles

- The Change-over from Dutch to German
for the Learnings of Western Medicine
in the Local parts of Japan in the Early
Meiji PeriodGoro ACHIWA...(1)
- Seisetsu-naika-senjo, the first translated
Book of Internal MedicineToshio OTAKI...(19)
- Remarks on the Medical Letters written on
the Board from the Ruins of Fujiwara
CourtTaku SHINMURA...(29)
- Hygienic Conditions in the Old Tertament
.....Yoshimi OZAWA...(41)
- Population-Pyramid taken from Shosoin
literatureEhiko HINO...(50)
- Yoshitsuna Hatakeyama and Introduction of
Medicine to the Noto District...Yoshimi MIYAMOTO...(59)
- Remarks on the ISAI-IKO, Poems by Sugita
.....Ranzaburo OHTORI...(70)
- Poems in Celebration of Hippocrates by
Tsuboi Shindo.....Ichiro AOKI...(87)
- Materials**.....(91)
- Notes from monthly Meetings**.....(102)
- Miscellaneous**(114)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo